

始



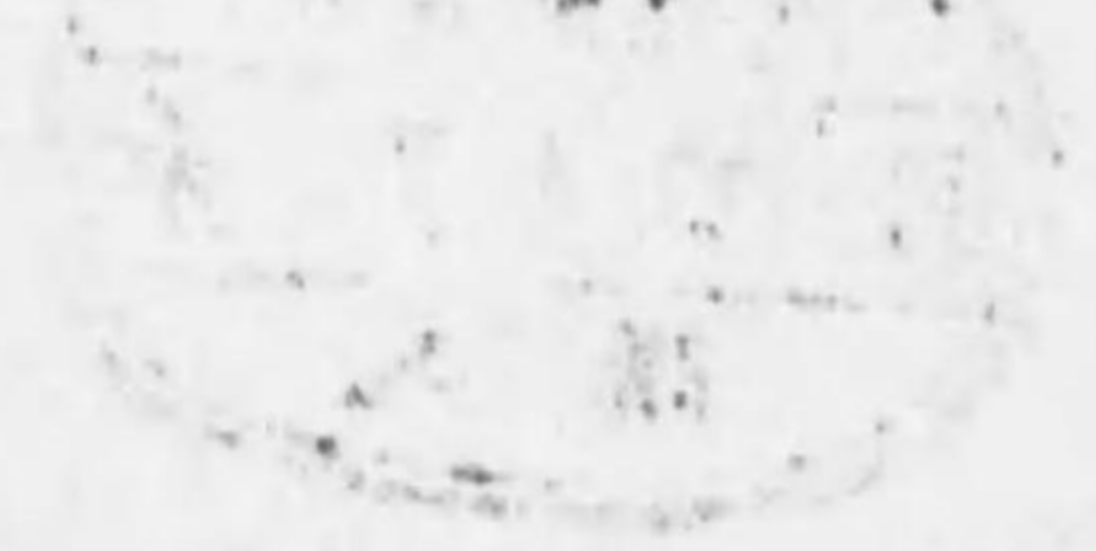
F83  
Tu5  
3a



續々  
獵人日記

ツルゲーネフ著  
米川正夫譯

第三書房



目次

シチグロフ郡のハムレット……………七頁

チエルトプハーノフとネドビュースキン……………五九

チエルトプハーノフの最後……………六六

生きた御遺骸……………一六八

音がする！……………一九九

森と曠野……………二二二



## 解題

『獵人日記』は、一銃獵家が獲物を追つて野や森を跋渉する間に見聞した農村の生活の種々相を敘すといふ形式によつて統一せられた、長短さまざまな二十五篇の物語の一聯をさすもので、ツルゲーネフとしては初期の作品ではあるけれど、この高い天分を有する藝術家のあらゆる特質や傾向を残りなく示した名作で、單に露西亞文學の中に極めて高い特殊な位置を與へられてゐるばかりでなく、農奴制度廢止のために間接に大きな影響を與へた點で、露西亞社會史に於ても重要な一頁を占めてゐるのである。

とは云へこの名作が世に出たのは、單なる偶然の助けに依つたのである。ツルゲーネフは一八四三年韻文物語『パラシヤ』を發表して、當時の批評界の權威であり露西亞文學全體の號令者であつたペリンスキイの注目を惹き、温い同情と鼓舞の言葉を贈られたのであつたけれど、その後の作品はペリンスキイの好意に充ちた期待を満足させることも出来なければ、作者自身の意にも満たぬやうなものばかりであつた。遂にツルゲーネフは自己の才能に絶望し、文學を抛つてしまはうとさへ決心した。けれど一八四七年、偶々友人パナーエフの懇請に任せて、その編輯する雑誌『現代人』に與へた短篇『ホーリとカリイヌイチ』が、作者の決心を翻へさせ、その將來の運命を決定する使命を帯びてゐたのである。この時たる一小篇が實に露西亞の文學のみならず、社會生活にまで偉大な役割を演ずるに至らうとは、作者も無論豫期してゐなかつたが、編輯者パナーエフも夢にも考へなかつたので、この作品を雑誌の創作欄でなく雑誌欄へ編入した。しかしこれにも拘らず『ホーリとカリイヌイチ』は今迄

での如何なる作家にも見られなかつた新鮮さと眞摯さに依つて、忽ち讀者に驚嘆の目を瞠らせ、全讀書階級の興味を中心となつたのである。然らば、なぜこの小篇がかくまで一世の注目を喚起したか？ ほかでもない、その中に現はれた農村と民衆に對する態度である。

當時の露西亞農民はたゞ無恥蒙昧な醜い滑稽な半野獸的存在のやうに見做されてゐて、文學の對象となり得るなどとは殆ど考へられない位であつた。ところが、ツルゲーネフは初めて農村の民衆の中に潜んでゐる隠れた睿智と才能と、優にやさしい感情と、純な魂を聞いて見せたのである。現實的、實際的頭腦の發達した賢い處世家のホーリにしても、自然を友としてその中の詩趣を享樂することに依つて満足してゐる、柔和で謙抑なカリイヌイチにしても、彼らの領有者である貴族の地主に比べて、人間的に些かも劣るところがないばかりでなく、却つて自然の性情を歪められたり傷つけられたりしない純眞さに於いては、寧ろ遙かに優れてゐるくらゐなのである。この事は當代の露西亞にとつて、驚異すべき新發見であつた。

ツルゲーネフはこの一作の成功に勵まされて、勇氣と希望を奮ひ起こし、幼い頃から母の莊園で蓄へた豊富な知識と觀察を傾けつゝ、農民と地主を主題とする小説のシリーズを續け、遂に一八五一年、巴里近郊のブジワールで最終篇を書き上げ、『獵人日記』と題して二巻の集に纏めて出版した。この書の出現はすべての心ある露西亞人をして、今さらのやうに農奴制度なるもの恐ろしく、忌はしい本質を痛感せしめたのみならず、長い間解決し難い懸案として残されてゐた農奴解放を實現する一つの有力な動機とさへもなつたのである。一八六一年二月十九日の勅令によつて、この歴史的な大事業を完成した皇帝アレクサンドル二世は、また皇太子として『獵人日記』を讀んだが、それ以來農奴解放の急務を思ふ心は夢寐にも腦裡を離れなかつたと告白してゐる。この『獵人日記』を讀んだが、それ以來農奴解放の急務を思ふ心は夢寐にも腦裡を離れなかつたと告白してゐる。この『獵人日記』を讀んだが、それ以來農奴解放の急務を思ふ心は夢寐にも腦裡を離れなかつたと告白してゐる。

が一つの社會問題の提唱として當時の露西亞知識階級に投げかけた衝動は、想像することも出来ないほど大きなもので、その頃峻烈を極めたニコライ一世治下の檢閲をどうして無事に通過したかといふ事が、多くの人々に取つて不思議な謎のやうに考へられたほどである。現にこの書物に對して當面の責任者であつた莫斯科檢閲局長のリツフが、一時それとなく職を罷免されたといふ事實も傳へられてゐる。ラストーブチ伯爵夫人がチャアデーエフに向かつて、「Voilà un livre incendiaire (これは人の心に火を) 點けるやうな本だ」と云つたのは、當時の露西亞社會に對する『獵人日記』の意識を雄辯に語るものである。


然し、今日の讀者の眼から見ると、この『獵人日記』一巻に現はれてゐる作者ツルゲーネフは、それほど熱烈矯激な社會改革の闘士ではない。勿論、彼は極めて高い教養を有するインテリゲンツトであり、敏感な魂をもつた正義の士であつたから、醜惡な農奴所有の制度を衷心から憎み呪はずにゐられなかつた。で、後年彼自身その追憶の中で語つてゐるやうに、この制度を敵として最後まで争闘を續け、決してこれと和解しまいと決心し、所謂「ハンニバルの誓ひ」を立てたほどであるが、然しツルゲーネフは人となり温良柔和な藝術家であつたために、正面から破邪顯正の劍を取り、政治的立場に立つて戦ふなどといふことは到底なし得るところでなかつた。成程、『獵人日記』の中には奴隷の狀態に置かれた農民たちの悲惨な苦しい生活が、さまざまの形態と狀況に於いて物語られ描寫されてゐるけれど、敢然たる激しい抗議の聲は殆どどこにも見られない。たゞそこには地主やその側近者達の横暴と、氣紛れと我愆のために、人間としての權利も自由も幸福も蹂躪されて、貧困と苦惱の中に呻吟しながら、あるひは宗教に、あるひは自然に、あるひは藝術に、あるひは傳統の權威に、慰安や是れを認見出してゐるいぢらしくも痛ましい農民たちと、長い世紀に亘つて濫用された過當の權利のために良心を痛痺さ

せられ、皮相の文化と奢侈のために無爲無能の遊民となり切つて、健全な良識を失つてしまつた貴族地主のもろもろの型が、嚴正なレアリズムの精神をもつて純客観的に描き出されてゐるのみである。しかもそこにはこの作者の特色である一抹の憂愁を帯びた音樂的、抒情詩的な氣分が漂つてゐて、なほさら社會的抗議の書としての本篇の調子を和らげてゐるのである。

元來ツルゲーネフは、十九世紀前半の露西亞文學を二分してゐた大きな思潮的對立たる西歐派と汎斯拉ヴ派の中では、前者に屬してゐた作家なのであるから、従つて露西亞の過去を零と見て、新しい西歐的文化の基礎の上に將來の露西亞を建設すべしといふ思想の共鳴者であつたが、それにも拘らず人間として藝術家としては、自分を育ててくれた環境である莊園的露西亞に深い本能的な愛情を持つて生まれたのである。彼は農奴制度そのものを憎み呪ひながら、農奴制度の上に築き上げられた特殊な文化や傳統に對して限りなき懐かしみを感じ、かつこの世界に根を下ろしてゐる農民たちと、彼らの思念や感情や信仰を深い氣持で受入れ、抱擁せざるを得ないのである。この意味に於いて西歐派であるツルゲーネフには、その對立者たる汎斯拉ヴ派と極めて密接な共通點が認められる。この女性的なほど繊細優美な魂を賦與されてゐる藝術家にとつては、粗々しく嚴しい反抗や闘争の叫びよりも、やさしい空想的な氣分や、つゞましい謙抑の精神や、農民獨特の宗教的な人生觀などを對象とする方が、より多くびつたりとした相應はしいものに感じられたに違ひない。

彼は不思議な神祕と憧憬を藏した露西亞の野や森の廣表の間に、涯てしなく擴がつた莊嚴な大空の下に、祖國の農民の内部生命をなしてゐる偉大な謙抑の詩味を感得し、これを言葉に傳へて見せたばかりでなく、その豊かな詩材の湧き出る源を深く究めて、數々の美しい驚嘆すべき典型を創造したのである。自己否定の中に德行と幸

福との哲學を體得したルケリヤ(『生きた御遺骸』)、自然を愛し自然と同化することに依つて獨自の世界觀、宇宙觀に悟入した空想家のカシヤン(『クラシワ・メーチのカシヤン』)、素朴な民謡の中に露西亞民衆も力も、憧憬も、悲しみも残りなく表現して見せた自然の藝術家ヤコフ(『歌うたひ』)、冷酷で一徹な表皮の下に暖い人情味を隠してゐる陰鬱なビリユーク(『狼』)、露西亞農民の中に認められてゐる豊かな本能的力を暗示するやうな『ペーリジンの草野』の少年たち、これらはすべて一連の美しい寶玉として、世界の文學に永く傳へられるのであらう。しかしツルゲーネフが單に社會的風潮や所謂進歩的思想のみに指導されて、その奴隷となることなく、藝術家としての自己の天分と素質を充分に生かして、彼の最高傑作たる内部的自由を創作の根本に置いたがために、この『獵人日記』は眞實味に充ちた輝かしい農村の敘事詩となつて現はれたのである。そのために、専ら社會組織の不正を指摘し暴露せんとする仰々しい興奮した叫喚や叱咤にもまして、農村の現實に對する世人の眼を開かせ、民衆に對する正しい同情を呼び醒まし、ツルゲーネフの「ハンニバル的誓ひ」を成就させることになつた。とは云へ、この書が我々にとつて貴く懐かしいのは、その社會的意義や功績のためではなくて、こゝに描かれた自然と人間が眞實と美の融合した永遠の世界を開いて見せたからである。また單に形式・手法の點から見ても、ツルゲーネフは『獵人日記』によつて文學上の新しいジャンルを創造したのであつて、この自然と人事を交錯させたスケッチ風の短篇の領域に於いては、何人にも凌駕されることのないやうな高い完成味を示した。特にその自然描寫に至つては、これは單なる作の背景や裝飾ではなくて、高いハイモニーに充ちたツルゲーネフの魂そのものの發現であり、その優婉な内部生命を奏で出づるいみじき交響樂である。



シチダグロフ郡のハムレット

あるとき遠出の獵のをり、私は金持ちの地主で銃獵家のアレクサンドル・ミハイルイチ・G<sup>1</sup>といふ人から食事の招待を受けた。その村は、當時私のゐた小村から五露里ばかり離れたところにあつた。私は燕尾服を着込んで、アレクサンドル・ミハイルイチの所へ出かけた。この燕尾服といふやつは、外出の場合、たとひ獵に出る時でさへ、必ず用意するやうに御忠告申し上げたい。食事は六時始まりといふことになつてゐた。私が着いたのは五時であつたけれど、もう制服や略服や、その他はつきりした名で呼び難いやうな服装をした貴族たちが、吃驚りするほど大勢集まつてゐた。主人は慇懃に私を出迎へたが、すぐさま侍僕部屋へ飛んで行つた。それはさる顯官の到着を待つてゐたので、彼ほどの押しも押されぬ社會上の地位と富には凡そ相應しくない位、そはくしてゐたのである。アレクサンドル・ミハイルイチは今まで一度も結婚したことがなく、女を愛したこともなかつた。で、彼の家に集まる連中も獨身者ばかりであつた。彼は豪奢な暮らしをしてゐて、祖

父傳來の邸を増築したり、華々しく裝飾したり、年々モスタワから一萬五千ルーブリからの酒を取り寄せなどして、廣く世間から絶大の尊敬を受けてゐた。アレクサンドル・ミハイルイテは疾くの昔官職を退いて、名譽ある肩書などは一向に欲しがらなかつた……それが一體どういふ譯で、晴れの晩餐會の當日、顯官の來訪を求めたり、朝早くからそはくしてゐるのだらう？ この點は『未知の闇』に葬られてゐる。それは私の知人に當たる辯護士が、有志の人からの賄賂を受け取るかと聞かれた時、いつも持ち出す十八番の文句なので。

主人に別れてから、私は部屋から部屋をぶらつき始めた。客は殆んど誰も彼もが私の知らない顔ばかりであつた。二十人ばかりの人はもう歌留多の卓に向かつてゐた。この歌留多好きの連中には、品はあるけれど幾らか古ぼけたやうな感じの顔をした軍人が二人と、幅の狭い高く盛り上がったネクタイをつけて、てきばきはしてはゐるものの穩健主義の人にのみ見られるやうな、垂れ氣味の髭を染めた文官が幾人かゐた（かういふ穩健主義の連中は、さも勿體らしく歌留多をとり上げ、首を振り向けようともせず、近寄つて来る人たちにちらと流眄をくれるのであつた）。小さな丸つこい腹を突き出して、ぶよ／＼した手を汗ばませ、控へ目に足を動かさないでゐる郡役所の役人も五六人の合せた（これらの諸君はもの柔かな聲で話し、四方八方へ優しい微笑を振り撒き、自分の

持ち札を襯衣の胸もとへ押し附けるやうにして、切り札で切る時にも、卓をどん／＼叩くやうな眞似をしないどころか、却つてしとやかに、緑色の羅紗の上にふわつと札を落とす。そして、自分の取つた札を集める時にも、極めて慇懃な嗜み深い態度で、軽く卓を擦るやうにしてゐた。そのほかの貴族たちは、長椅子に腰をかけてゐるのもあれば、戸口や窓際に窮屈らしく塊まつてゐるものもあつた。その中で一人、もう年は若くないけれど女のやうな顔付きをした地主が、片隅に佇んで、誰もその方に氣を止めるものもないのに、びく／＼慄へたり、顔を赧らめてもぢ／＼したり、時計の飾りにつけた印形を腹の上でいちり廻したりしてゐた。先祖代々名を知られた莫斯科の仕立屋で、フィルス・クリューヒンといふ腕こきが作つた丸味のある燕尾服に碁盤縞のズボンを穿いた別の紳士たちは、脂ぎつた禿げ頭を遠慮會釋もなく振り立てながら、恐ろしく磊落な調子で元氣に議論を闘はしてゐた。頭から足の爪先まで黒ずくめの扮装をした、しよぼ／＼眼の、白つばい髪をした二十歳ばかりの青年は、眼に見えて怖氣づいてゐるくせに、何やら毒のある微笑を洩らしてゐる……

9  
それにしても、奴はいくらか退屈になつて來た。その時ふいにダイニーツイン某といふ、大學を中途退學した若い男が私の話し相手になつてくれた。アレクサンドル・ミハイルイテの邸に暮らし



てゐたが、その家庭内の位置は……どんなものとも一口には云ひ兼ねる。彼は射撃の名手で犬を  
 躡るしつぽこともうまかつた。私はまだ莫斯科にゐる時からこの男を知つてゐた。彼は試験の度に「直立  
 不動の藝當」を演じる方の仲間であつた。つまり教授の質問に一口も答へなかつたのである。か  
 ういふ連中は云ひ廻しを面白可笑しくするために「髭書生」とも呼ばれてゐた（何分お察しもつ  
 くことと思ふが、これは遠い昔の話である）。さて、その藝當の實況はと云ふと、例へば、ツイニ  
 ーツインが呼び出されたとする。それまでは自席で身動きもせずじつと眺こぼつてゐたツイニ  
 ーツインは、頭から足の先きまで熱い汗でびつしよりになり、のろ／＼と無意味に四邊を見廻しながら立ち  
 上がつて、制服の釦を上まで一つ残さずそ／＼と掛け、試験官の卓を指さして横むきのやうな恰  
 好で歩いて行く。「さあ、試験票を取りなさい。」と教授は朗らかに云ふ。ツイニーツインは手を  
 伸ばし、慄へる指先で幾つかに積まれた試験票に觸つて見る。「いや、そんなに選らないで。」  
 と傍に控へてゐた疥癬らしい老人が、ひとの入つたやうな聲で注意する。これは別の科の教授なの  
 であるが、この惨めな髭書生を見て、急にむら／＼と憎らしくなつたのである。ツイニーツインは、  
 運を天に任せて試験票を一枚取ると、自分の番號を見せて、先番の者が問題に答へてゐる間、窓際  
 へ行つて腰を下ろす。窓際に陣取つたツイニーツインは、試験票から眼を放さうともせず、たゞほ

んの時々、前からの辭でのろ／＼と四邊を見廻す位のものであつたが、それでも、手足一つ動かさ  
 ない。が、その中に先番の試験が済んで、「結構、もう行つてよろしい。」とか、「結構です、大變  
 結構です。」とか、出來榮えに應じてそれ／＼言葉をかけて貰ふ。いよいよツイニーツインの名が  
 呼び上げられる。ツイニーツインは立ち上がつて、しつかりした足取りで卓に近づく。「問題を讀  
 みなさい。」と聲がかかる、ツイニーツインは試験票を両手に取つて、鼻の傍まで持つて行き、の  
 ろ／＼と讀み上げて、のろ／＼と手を下ろす。「さあ、答へて貰ひませう。」と例の教授が身體をぐ  
 つと後ろへ反らし、兩腕を胸に組みながら、大儀さうにかう云ふ。あたりは墓場のやうに森然しんぜんと靜  
 まり返る。「どうしたんです、君？」ツイニーツインは黙つてゐる。立會ひの老教授はびり／＼し  
 て来る。「さあ、何とか云つたらどうだね？」我がツイニーツインは氣でも遠くなつたやうに、や  
 はり黙りこくつてゐる。短く刈り上げたその後ろ頭は、同級生一同の物好きな視線を集めながら、  
 突兀として動かないでゐる。立會ひの老教授の眼は今にも飛び出さなばかり、老人はすつかりブ  
 イニーツインを憎み切つてゐる。「それにしても、どうも奇妙だね。」と、もう一人の試験官が云  
 ひ出す。「何だつて君は嘸なのやうに黙つて突つ立つてゐるんです？ さあ、分からないんですか、  
 え？ それならさうと云つたらいい。」「もう一枚試験票を取らして下さいませんか。」と不仕合せ

な青年はかすれた聲で申し出る。教授たちは眼と眼を見合せる。「まあ、さうしたらよからう。」と主任の試験官が愛想をつかしたやうに片手を振つて答へる。ゾイニーツィンはまた問題の紙をとつて、また窓際へ行き、又ぞろ卓の所へ引つ返し、又々、死人のやうに黙り込んでゐる。立會ひの老教授は、彼を生きたまゝ取つて食ひもし兼ねまじき形相になる。結局、彼は追ひ返されて零點をつけられる。そこで諸君は、もうかうなつたら仕方がないから歸つて行くだらう、と思はれるに相違ない。ところが、どういたしまして！ 彼は自分の席に歸つて、相變らず身動きもせず、試験が済むまで坐り込んでゐる。そして歸り際に、「いやはや、すつかり脂を絞られちやつた！ 何たる情けないこつたらう！」と叫ぶ。それからまる一日モスクワ中を歩き廻りながら、時々、頭を抱へて自分の悲運をつつくくと呪ふのである。本などは勿論手に取らうともしない。そして翌朝になると、同じやうな始末が繰り返される。

さて、このゾイニーツィンが私の話し相手になつたわけである。私たちはモスクワのことや、獵のことなど話し合つた。

「もしなんでしたら。」と不意に彼は囁いた。「この土地いちばんの警衛家を御紹介しませうか？」  
「どうぞ。」

ゾイニーツィンが私を引つ張つて行つたのは、肉桂色の燕尾服に染め分けのネクタイをつけ、額の上に髪を高くかき上げて、口髭を生やした、小柄な男の傍であつた。その膽汁質らしい落ちつきのない顔立ちは、なるほど機智と皮肉を發散してゐる。浮かんでは消える辛辣な微笑は絶えずその唇を歪め、やゝ細めた黒い眼は不揃ひな睫の蔭から不敵な光りを放つてゐる。その傍には一人の地主が立つてゐるが、ゆつたりとして柔かみがあり、甘つたるい感じのする——真正正銘の砂糖屋ショコラ兵衛で——しかも眼つちかちである。小柄な男の警衛を皆まで聞かないうちから笑ひ興じて、溶けさうな程うれしがつてゐる。ゾイニーツィンは私をこの警衛屋に紹介してくれたが、その名はピョートル・ペトロロギッチ・ルビーヒンと云つた。私たちは名乗り合つて、初對面の挨拶を交はした。

「ときに、私の無二の親友を紹介させて頂きませう。」突然ルビーヒンは甘ちやん地主の腕をとつて、險のある聲で云ひ出した。「まあ強情を張らなくても好いですよ、キリーラ・セリファーマイチ。」と彼は云ひ足した。「誰もあなたに噛みつかうと云やしませんからね。そこで、」と彼は言葉を續けたが、その間にキリーラ・セリファーマイチはもぢくしながら、まるで腹がべちやんこになつたやうな不器用らしいお辭儀をしてゐる。「そこで御紹介しますが、この人は寔に申し分のない貴族で、五十の年まで壯健無比に渡らせられました。どうしたものか不意に眼の療治を思ひ立

たれ、その結果、隻眼ひとめとなられました。それからといふもの、領地の百姓どもを治療してをられますが、その成績も似たり寄つたりで……さて、百姓どもは申すまでもなく、それにふさはしいだけの心服の念を捧げて……。

「いや、どうも困つた男だ。」とキリーラ・セリファーマイイチは口の中でもぐぐぐ云つて——そのまゝ笑ひ崩れた。

「しまひまで云ひ給へ、君、さあ、しまひまで。」とルビーヒンはすかさず云つた。「何しろ君はひよつとしたら、裁判官に選舉されるかも知れないんだから。いや、選舉されるとも、見てゐたまへ。さて、さうなつたら無論、君の代りに陪審員の連中が頭を働かしてくるにきまつてゐる。それはさうとしても、だが萬一の用心に、たとへ他人様の考へにせよ、とにかく自分で喋ることだけは稽古をしなければならぬよ。もし運悪く知事でもやつて来て、『どうしてこの判事は吃るのか?』と訊かれたら、まあその時は『中風に罹りました。』と返事をするわけだ。『それなら古血を出してやるがいく。』と来るだらう。ところがそんな事は、ねえ、考へても見たまへ、君の地位からいつて不様ぢやないか。」

甘ちやん地主はもう堪らず笑ひ轉じた。

「あれまあ、あんなに笑つてる。」とルビーヒンは、波打つてゐるキリーラ・セリファーマイイチの腹を毒々しげに見やりながら、言葉を續けた。「尤も、笑はずにゐられる筈がない。」と私の方に振り向いて云ひ足した。「お腹は何時もくちくつて、身體は丈夫だし、子供はなし、百姓たちは抵當にも入れてないし、自分でその百姓たちを療治までして——細君は少し頭が變だと來てゐる。(キリーラ・セリファーマイイチはよく聴きとれなかつたやうな振りをして、ちよつと脇の方をむきながら、相變らず笑ひ續けてゐる)。私も同様に笑つとりますが、私は實のところ、女房に駆け落ちされたんで、測量師と手に手を取つてね(彼はにやりと笑つた)。あなたはそれを御存じなかつた? さうなんですとも! いきなり出し抜けに家出をしちまつて、私にはこんな置手紙をして行きましたよ。『なつかしきビョートル・ベトローギツ様、何卒御赦しを。懸路の闇に迷ひて心の友とこの地を去り行きます……』とね。その測量師は爪を切らないで、細いきち／＼のスポンを穿はいてゐるといふ、たゞそれだけで女をものにしやがつたんで。あなたは『何とまあ、あけすけに喋る男だ……』と呆れてゐらつしやるんでせう? いやはや、とんでもない! 私ども野育ちの人間は、有りのままをづか／＼云つてしまふんでね。それにしても、少し脇へ退きませう、未來の裁判官の傍につゝ立つてゐるのもなんですからね……。」

彼は私の腕をとつて、窓の方へ引つぱつて行つた。

「私はこの土地では洒落の巧い人間といふ評判をとつておますが、」と、彼は話の進むにつれてこんな事を云つた。「これは本當になさらないやうに、私はたゞ物事が癪に障る性質で、あけすけに人の悪態を吐くんです。だから、こんなにさつくばらんにやつて行けるんです。何も儀式張ることなんかないぢやありませんか、全く？ 私には誰の云ふ事だつて三文の値打ちもないと思ふから、何一つ強ひて求めようもしない。私は人が悪い。——しかし、それがどうしたと云ふんでせう。人の悪い人間には、少なくとも智慧が要らない。人の悪いといふ事がどんなにさばくしたものか、とても想像がおつきにならんでせうよ……まあ、早い話が、ほら、ね、この家の主人公を御覧なさい！ ねえ、何だつてあゝ耻けずり廻つてるんでせう、全く冗談ぢやない——のべつ時計と睨めつこをして、にこ／＼笑つたり、汗をかいたり、勿體ぶつた様子をしたりしながら、私たちに空腹じい目をさせてゐるんですからね。へん、格別珍らしくもない——何が顯官のお方だ！ そらそら、また耻け出した——跋まで引き出してさ、御覧なさい。」

ルビーヒンはきい／＼聲で笑ひ出した。

「たゞ困つたことには、御婦人方がゐない。」と彼は深い溜め息を吐きながら喋り続ける。「まるで

獨身倶楽部の宴會みたいだ——でも兎に角、我々仲間は御馳走にありつける譯ですて。あゝ、御覧なさい、御覧なさい。」と彼はだしぬけに叫んだ。「コゼーリスキイ公爵がやつて来た——ほれ、あの顎鬚を生やして、黄色い手袋をはめた背の高い人です。外國住ひをして来たつて事が、ちやんと見えます……いつも決まつてうんと遅刻する人なんでね。構はず云ひますが、馬鹿も馬鹿、ひどい棒鱈なんですよ。あの人が我々風情にさも恩がましく言葉をかけたり、物欲しさうな母親や娘達のお世辭を聞いて鷹揚らしくにつこり笑つてみせる、あの様子をお目にとめて御覧下さい……この町にはほんの通りすがりの御滞在なんだけれど、御自分でも時折りは洒落をとばすんです。——その代り、どうも大變な洒落なんで！ なんの事はない、切れない庖丁で太綱を鋸引きにするやうなもんでさ。あの人は私が厭でたまらないんだけど……それにしても、一つ挨拶して来るかな。」

かう云つて、ルビーヒンは公爵の方をさして耻け出した。

「さあ、あすこに私の仇敵がやつて来た。」私の所へ引つ返して、彼はだしぬけにかう云つた。「あの赤つちやけた顔をして、髪の毛のこは／＼した肥大漢が見えるでせう——ほら、帽子を驚掴みにして、壁傳ひに歩いて行きながら、狼みたいに、四方八方に眼を配つてゐる。あいつに私は千ルーブリもする馬を四百ルーブリで賣つてやつたのに、あの畜生、今では大威張りで私を輕蔑してゐや

がる。そのくせ御自分はまるつきり分別といふものがない。とりわけ、朝お茶を飲む前とか食事のすぐ後などには殊にひどくつて、こつちから「今日は、」と云ふと、先生、「何用だね？」と来ます。あれ、あすこに閣下がやつて来る。」とルビーヒンは言葉を續けた。一退職の勅任文官で、微碌した閣下なんです。あの人の娘はビート糖で出来てゐて、工場は瘰癧に罹つてゐるといふ始末……いや失禮、これは云ひ間違ひで……なに、それでも分かつて下さるでせう。おや……建築技師もこんな所へ来てゐるぞ！ 獨逸人のくせに髭なんか生やしてござるが、自分の仕事は一向に分からない——珍無類な奴ですよ！……尤も、あんな奴、仕事なんか分かつたつて仕方がない、たゞ賄賂をとつて、柱だの圓柱だのを——つまり、國家の柱石たる我が國の貴族連に、出来るだけ澤山建ててやればいゝんです！」

ルビーヒンは又、から／＼と笑ひ出した——けれど、不意に慌だしいざわめきが家中に擴がつた。顯官の客が乗り込んだのである。主人は取るものも取り敢ず玄關へ駆け出した。その後から忠勤を擡んでる召使ひと、お節介な客の誰れ彼れが飛んで行つた……今までの騒々しい話し聲は、生まれた巢の中に蠢く蜜蜂の春の唸りにも似た、物柔かな快い唾きに變つた。たゞ一匹の不躰な胡蜂のルビーヒンと、堂々たる雄蜂のやうなコゼーリスキイ公爵だけは、聲を低めようとしなかつた……

：やがていよ／＼女王蜂格の顯官が入つて来た。一同は心をときめかして歓迎の意を表し、坐つてゐる人々も身體を持ち上げた。ルビーヒンから馬を安く買つた例の地主、この地主すらも頸を胸につけて會釋した。顯官は申し分のない堂々たる態度で品位を保つてゐた。會釋するやうな恰好に見せて頭を後ろに振りながら、二言三言お世辭らしい言葉を述べたが、その言葉がどれも「あゝ」の音で始まつて、鼻にかゝつて長く尾を引くのであつた。空腹感と入れ交じつた憤慨の色を現はしながら、ゴゼーリスキイ公爵の顎髭を睨み、例の工場と娘を持つた勅任文官に左手の人さし指を突き出した。それから顯官は四五分間に、宴會に遅刻しなかつたのは甚だ欣快だと二度まで口にしたが、とかくするうちに、一同は名士連を先頭に食堂へ移つた。

くだ／＼しく述べ立てるまでもない事だが、顯官は一番の上座に据ゑられ、勅任文官と縣の貴族團長の間に陣取つた。貴族團長は鷹揚な威のある顔付きをした人で、糊の利いたワイシャツの胸、偉大なチョッキ、佛蘭西煙草を入れた丸い煙草入れなど、凡てがびつたりとその表情に相應してゐた——主人は斡旋これ努めて、あちこち駆けずり廻つたり、何かと氣を揉んだり、客に御馳走をすすめたり、顯官の傍を通り過ぎる度にその背中に微笑みかけたり、まるで小學生のやうに部屋の間隅に突つ立つたまま、慌だしくスリーブ入りの皿や牛肉の料理を給仕の手から引つたくるのであつ

た。——侍僕頭は、長さ三尺もありさうな、口に花束を唾へた魚を食卓にさし出す。——仕着せを着た佛頂面の下男たちは、マラガ産の葡萄酒やドライマデーラ酒の壺を、一人々々の客に氣難かしさうに突きつけてゐた。殆んど凡ての貴族たち、殊に年配の連中は、お義理でいや／＼おつき合ひをするといつたやうに、一杯二杯と壺を重ねてゐた。かうして、遂に三鞭酒の壺がぼん／＼抜かれて、次々と祝盃が上げられた。——こんな事は、恐らく讀者諸君にとつて分かり過ぎるくらゐ分かつてゐることと思ふ。けれど、一同がさも喜ばしげに謹聽してゐる中で、顯官が親しく物語つた逸話こそ、特に注意すべきもののやうに思はれる。誰であつたか、例の微碌した勅任文官だつたと思ふが、最近の文學に接した印象を述べて、一般に女性の影響といふこと、特に青年に對する女性の影響といふことを持ち出した。すると、顯官は早速それを引き取つて、『さう、さう、それは全くだ。しかし若い連中は、嚴重に服従といふ習慣をつけておかなければならぬ。さもなければ女の腰巻さへ見ると、夢中になつてしまふでな。』（子供じみた愉快さうな微笑があらゆる客の顔を傳はつて流れた。一人の地主などは眼にさつと感激の光りさへ漲らした。）『何分、若い者は智慧が足らぬからな。』（顯官は恐らく勿體をつけるためであらうが、時々普通とは違つた所に抑揚をつける癖があつた。『まあ自分のことを例へて云つて見れば、私にはイワンといふ息子があるが、』と彼は言葉

を續けた。『この馬鹿息子もとつて二十歳になつた、ところが、だしぬけに私の所へやつて来て、『お父さん、結婚を許して下さい。』と云ふぢやありませんか。そこで私は「この阿呆め、先づ勤めにでも出る……」と云つてやりました。さあ、悲觀して泣き出すといふ騒ぎ……しかし私には……その……」顯官はこの『その』といふ言葉を唇より寧ろ腹で云つた。それから暫く口を嚙んで、隣りに坐つてゐる勅任文官をいとも鷹揚に見やつたが、そのとたんに突拍子もなく眉を吊り上げたものである。勅任文官はちよつと横向きに氣持ちよく頭を下げ、顯官の方へむいた片目を素晴らしい速力ではちつかせた。『すると、どうでせう。』と顯官はまた話し出した。『今ではあいつが自分の方から手紙を寄越して、お父さん、馬鹿者に性根を入れて下さつて有難う、と書いて居りますよ……つまり、あゝいふ風にやらなくちや駄目です。』勿論、客はみんな頭からこの話に感服してしまつて、そこから汲み取つた興味と教訓のために、生き生きとして來たやうな具合であつた。食後、一同は席を立つて、いくらか騒々しくはあつたけれど、作法を亂さないやうにして、かういふ場合にのみ許されたかのやうなざわめきを立てながら、客間の方へ移つて行く……歌留多が始まつた。

私はやつとのことで晩まで辛抱した。馭者には、明朝五時に馬車の支度をするやうに頼んで置い

て、あてがはれた部屋へ休みに行つた。けれど、尙その日のうちにもう一人注目すべき人物と相識する廻り合はせになつてゐた。

來客が多かつたために、誰も一人一部屋で眠るわけにはゆかなかつた。アレクサンドル・ミハイルイチの侍僕に案内されて入つた小さな緑いろがよつた濕つばい部屋の内には、もうすつかり着物を脱いでしまつた先客が一人ゐた。私を見ると素早く毛布の下へ潜りこんで、鼻のところまで顔をかくし、柔かい羽根ぶとんの上で暫くごそ／＼動いてゐたが、やがてひっそり静まり返つて、木綿の夜帽子の丸い縁のかけから目慧く様子を窺つてゐた。私は別の寢臺に近づき（この部屋には寢臺が二つしかなかつたので）、着物を脱いで、しめつばい敷布の上に身を横へた。同室の男は自分の寢床でしきりに寢返りを打つてゐる……私は「お休みなさい」と聲を掛けた。

三十分ばかり経つた。どんなに苦心してみても、私はどうしても眠れなかつた。何の役にも立たない、取り止めのない妄想が後から後からと、水揚げ機械の桶のやうに執念深く單調に、果てしもなく續くのであつた。

「あなたは、どうやら眠つてゐらつしやらないやうですね？」と同室の男が聲をかけた。

「御覽の通りの始末で、」と私は答へた。「あなたもお休みになれない風ですね？」

「私はいつもの事なんですから。」

「それは又どうして？」

「別にどうつて事もないんです。どういふ具合だか、自分でも分からないんですが、それでも寢つくには寢つきます。ちつと根氣よく横になつてゐると、どうやら寢入つてしまひますよ。」

「なぜ眠くもないのに床にお入りになるんでせう？」

「ちや、どうしろと仰つしやるんです？」

私は同室の男の問ひには答へなかつた。

「奇態ですね、」と暫く黙つてゐてから、彼は言葉を續けた。「どうして此處には蚤がゐないんです。此處でなくてどこに居どころがあるかと思はれるのに？」

「まるで蚤のゐないのが残念さうな口吻ですね。」と私は云つた。

「いえ、別に残念がりもしませんが、たゞ物事に筋道の立つてるのが好きでしてね。」

「おや／＼」と私は考へた。「變つた云ひ方をするな。」

同室の男はまた暫く黙つてゐた。

「一つ私と賭けをしませんか？」と不意に彼は、かなり高い聲で云ひ出した。

「何の賭けを？」

私はこの同室の男が面白くなつて来た。

「ふむ……何にするかね？ あゝ、さうだ、かうしませう。あなたは私を馬鹿だと思つてゐらつしやるでせう、私はさう確信してゐますが。」

「とんでもない。」と私は呆れて口ごもつた。

「野育ちの、物識らずだとね……白状なさい……」

「私はまるであなたといふ人を存じ上げないんですから。」と私は云ひ返した。「どうしてさう獨り決めにきめておしまひになるんでせう？……」

「どうしてつて？ そりやあなたの聲を聞いただけで分りますよ。あなたはいやに氣のない調子で受け答へをしてゐらつしやる……ところが、私はお考へのやうな人間とはまるで違ふんで……」

「失禮ですが……」

「いや、こちらこそ失禮ですが、第一に、私は佛蘭西語をあなたに負けない位話せるし、獨逸語ならあなたより上手い位です。第二に、私は外國で三年も暮らしましてね、伯林だけでも八箇月ゐました、ヘーゲルを研究しましてね、あなた。ゲーテなどは語で知つてゐますよ。おまけに、長いあ

ひだ獨逸人の教授の娘に戀ひこがれてゐましたが、國へ歸つてから肺病やみのお嬢さんと結婚してしまひました。頭は禿げてゐるけれど、中々えらい女でしたよ。かういふ次第ですから、私も結局あなた等と同類で、内々考へてゐらつしやるやうな野育ちぢやありません……。私も反省といふ奴に蝕はれた人間で、衝動的なところがまるで無いんです。」

私は頭をあげて、前よりも尙注意を緊張させながら、この變り者を睥めたが、有明燈のほの暗い光りでは、その顔立ちをはつきり見分けることが出来なかつた。

「そらね、あなたは今私を見てゐらつしやるでせう。」と彼は夜帽子をちよつと直して、語り續けた。「そして恐らく、なぜ今日この男に氣がつかなかつたらう、と我ながら不思議に思つてゐらつしやるんでせう？ なぜあなたが私に氣がおつきにならなかつたか、それを私がお聞かせ致しますせう。——ほかでもない、私が大きな聲を立てないからです。他人のかけに隠れて、戸の後ろに立つたまゝ誰とも話をしないからです。侍僕が盆を持つて傍を通りかゝる時には、肘を私の胸と同じ高さ張つて、ちやんと用意してゐるからですよ……では、何故こんな事になるのか？ といふと、それには二つの理由があるんです。第一には、私が貧乏だといふこと、第二には私が自分から諦めたといふことなので……どうか本當の事を云つて下さい。あなたは私に氣がつかなかつたんでせ



う？」

「全くのところ、ついお見それしまして……」

「や、まあ、まあ、」と彼は遮つた。「それは分かつてゐますよ。」

彼は起き直つて腕組みした。夜帽子の長い影が壁から天井へかけて曲がつて映つた。

「ときに、正直なところを聞かせて下さい。」不意に横目でちらと私を見て、彼はかう云ひ出した。

「私はきつとあなたの眼には大の變人、所謂變り種に見えたでせう。いや、ひよつとしたら、それよりもつと悪い位かも知れない。あなたは、あいつわざと變人ぶつてる、とお思ひかも知れませんか？」

「いつも同じことを云ふやうですが、私はあなたを存じ上げないんで……」

彼はちらと眼を伏せた。

「どういふわけであなただを掴まへて——まるで見ず知らずの人を相手に、こんなに思ひがけなく話し込んでしまつたのか——實に、實に不思議でたまらない！（彼はほつと溜め息をついた。）何もお互ひ同志氣が合つたからといふわけでもないでせうし！ あなたにしろ私にしろ、どちらも歴とした人間です。云ひ換へれば、エゴイストなんです。だから、あなたも私に用がなければ、私もあ

なたにこれつから先きの用もない。さうぢやありませんか？　ところが、今二人とも眠られない……

……だから、一と喋りしてはならんといふ法はないでせう？　私はお調子にのつてゐますが、こんなのは私として珍らしい事なんです。私は實のところ臆病なんです。臆病といつても、それは私が田舎者だからとか、何の官等もない貧乏人だからとかいふためぢやなくて、恐ろしく自尊心が強い故なんです。ところが、どうかすると、いつどんな時とはつきり云へもしないし、前から見通しもつきませんが、何かの拍子に臆病な氣持ちがすつかり消し飛んでしまふことがある。例へば今夜のやうな具合にね。今なら達賴喇嘛と顔を突き合せて立たされても、平氣で喫き煙草を一服頂戴と出ますよ。しかし、若しかしたら、あなたはお睡いのぢやありませんか？」

「それどころですか、」と私は急いで打ち消した。「あなたとお話してゐるのが大變愉快なんです。」

「つまり、私の話が氣晴らしになる、と、仰つしやりたいところなんでせう……それならなほ結構……さて、改めて申し上げますが、私はこゝで變り者といふ評判を取つてゐます。いや、評判を取るといふより、くだらない世間話の合間に、何かの拍子で私のことでも出ると、つい噂に上るといふわけです。「我が運命をば心にかくる人もなく」でしてね……世間の奴らは私に針を刺してやらうといふ心算なんです……あゝ、悲しいかな！　奴らは一向に知らないけれど……私の不運の原因は、

まるで世間並みと變つた所がないといふことなんです。まあ例へば、今かうしてあなたと話し込んでゐるやうに、ひよい／＼と氣紛れはやりますがね。しかし、こんな氣紛れは銀錢一枚の値打ちもありやしない、こんなのは一番安つばい、一番低級な獨創ぶりですからね。」

彼は私の方へまともに向き直つて、両手を振つた。

「あなた！」と彼は叫んだ。「私はこんな意見を持してゐるんです。一體にこの地上の生活は、たが騎人にのみ與へられてゐる。ひとり騎人のみが生活の權利を有してゐる。 *Mon verre n'est pas*

*Grand, mais je bois dans mon verre*

(わが盃は大ならず、されど、  
も我はわが盃にて飲まん。)

と誰かが云ひましたね。——ね

え。」と彼は小さな聲で云ひ足した。「私は佛蘭西語の發音がきれいでせう。どんなに頭腦が大きくて、抱擁力に富んでゐても、又すべてを理解し、多くを知り、時代に遅れずついて行く力があつても、自分自身のもの、獨特のもの、固有のものが何一つなかつたならば、それが一體何の役に立ちませう！ それこそ陳腐な月並みを詰め込んだ蔵がこの世に一つ増えただけの事で、誰も喜ぶものはありやしない。さうですとも、たとへ愚かであつても、自分自身であれ！ 自己の匂ひ、自分自身の體臭を持って、これが肝要なのだ！ ——しかし、お考へ違ひのないやうに、この體臭に關する私の要求は大したものぢやないんですから……どうして、どうして！ そんな程度の變り者は腐る

ほどゐます。ごつちを向いても變り者ばかり、生きた人間は一人残らず變り者です。ところが私はその數に洩れたんで！」

「それにしても、」暫く無言の後、また話を續けた。「若い頃はどんなに華々しい抱負を抱いてゐたことせう！ 外國へ行く前から歸朝當時にかけて、自分をどんなに高く買ひ被つてゐたことせう！ さて、外國で留學當時は一生懸命に耳を敏く、何一つ聞き洩らさないやうにしながら、何時も獨りぼつちで押し通してゐました。なんでも一人で合點した積りでゐながら、終りになつて見ると、いろはのいの字も知らずにゐたなんていふ、我々書生仲間にはよくある奴なんではしてね！」

「變り者、變り者！」と彼は自ら責めるやうに頭を振りながら、言葉を繼いだ。「私は變り者と云はれてゐますが……正體を洗つてみると、凡そこの世の中に小生くらゐ平凡な人間はゐない程なんです。私はきつと人眞似をして生まれたに相違ありません……さうですとも！ 現在生きてゐるのだつて、今まで捻くり廻したいろんな作家たちの、眞似事をしてゐるやうなもんです。額に汗して生きてゐます。私は勉強もしたし、戀もしたし、最後には結婚もしたけれど、まるで自分の意志でやつたのではないやうです。何かの義務と云はうか、與へられた宿題と云はうか——その邊は誰にも分かりつこないが、とにかくそんな風なんです！」

彼は夜帽子を頭から引つ揃んで、寢床の上へ叩きつけた。

「お望みなら、私の身の上話をお聞かせ致しませう。」と彼は途切れがちな聲で云ひ出した。「いや、それよりいつそ、その中から變つたところを幾つか抜いて見ませうか？」

「ええ、どうぞ。」

「いや、こいつも見合せにして、私の結婚した顛末をお話した方がいゝでせう。何しろ結婚といふものは重大なことで、人間全體の試金石に當たりますからね。まるで鏡にでもかけたやうに、その人となりが反映るといふわけで……だが、この洒落も餘り陳腐過ぎますかな……ちよつと失禮、喫ぎ煙草を一服やりますから。」

彼は枕の下から煙草入れを出して、蓋を開けた。開けた煙草入れを振り廻しながら、また話し出す。

「あなた、お願ひですから、私の身にもなつて下さい……御自分で考へて御覧になつても分かる事ですが、ヘーゲルの百科全書の中から私はどんな利益を、ねえ、一體どんな利益を私が引き出す事が出きたか？ 後生ですから御意見を聞かして下さい。この百科全書と露西亞人の生活の間に、え、どんな共通點が有ませう？ また、それを我々の生活にどう適用しろと仰つしやるんです？」

いや、そんな百科全書ばかりでなく、一般に獨逸哲學を……更に一步進めて云へば、科學そのものをですな。」

彼は寢床の上に跳ね上がつて、毒々しげに齒を喰ひしりながら、小聲にぶつ／＼云ひ出した。

「あゝ、さういふわけなんです。さういふわけなんです……それならば、何だつてのこ／＼外國くんたりまで出かけて行つたのだ？ 何故おとなしく我が家にちつとしてゐて、周圍の生活を居ながらに研究しなかつたんだ？ さうすれば、實生活の要求も、その將來をも認識して、自分自身のいはゆる使命についても、はつきりした確信が得られただらうに……かう仰つしやるかも知れませんが、冗談ぢやない。」まるでおづ／＼と自己辯護でもしてゐるやうに、また語調を變へて語り續けるのであつた。「まだ今までどんな才人も本に書かなかつたやうなことを、どうして我々風情に研究が出来るのですか！ 私はそいつに、露西亞の實生活に、喜んで教へを乞ふ筈だつたんですけれど、困つた事には肝心の相手が黙つてゐる。かうしてゐるから俺を理解するがいゝ、と云はんばかりなんですけれど、それが私には及びもしない。私が演繹を示して貰ひたい、結論を授けて欲しい、といふと……『結論だつて？——それなら、ほら、これが結論だ。つまり莫斯科の連中の説を聞くがいゝ。まるで鶯のやうな妙音で轉つてるぢやないか？』ところが、悲しいかな、莫斯科の

連中はクルスクの爲そこのに轉り立てるけれど、人間らしい話をしないのです……そこで私は考へに考へ抜いた——何しろ學問はどこへ行つても一つらしいし、眞理も一つしかない筈だ——といふので、斷然故郷を離れて異國の邪教徒の中に入り込んだ譯です、……何とも致し方がありません——血氣に逸つて己惚れにとつつかれてゐたんですからね。實は當分のあひだ脂肪ぶとりに肥りなくなかつたんです。尤も、これは身體の爲めにいゝと世間で云ひますがね。いや、さうは云ふものの、自然に肉が附かなけりや、身體に脂肪も廻る氣遣ひはないんです！」

「それはさうと。」と稍々暫く考へてから、彼は云ひ足した。「私は自分の結婚した顛末をお聞かせすると約束したやうですね。ちや、聞いて頂きます。第一にお断りしておきますが、妻はもうこの世に居りませんし、第二には……第二には考へてみると、私の青春時代をお話しなければならぬやうです。さもないと、何が何やらまるでお分かりにならないでせうから……本當にあなた、お睡くないんですか？」

「いゝえ、眠ありません。」

「それなら結構。一つ聞いて下さい……ほら、隣りの部屋で、カンタグリュールヒン氏が何と下品な癖をかいてゐること！ 私はあまり裕かでない両親の間に生まれまして——私が両親と申し上げて

のは、云ひ傳へによると、私にも母親の他に父親もあつたとの事ですからね。覺えては居りませんが、父は餘り豪い男ぢやなく、大きな鼻をして、雀斑があつて、赤つ毛で、片方の鼻で煙草を嗅いでたさうです。母の寢室には、黒い襟を耳まで立てた赤い制服姿の、お話にならない程みつともない父親の肖像が懸かつてゐました。私はよくその傍へ連れて行かれて、折檻されたものです。さういふ時、母は何時もこの肖像畫を指さしながら、『もしお父さんが生きてゐらしたら、こんな事ではお済ましにならなかつたらうに。』と云ひ云ひしたものです。それがどんなに私を發奮させたか、あなたも想像がおつきになるでせう。私には男兄弟も女姉妹もありませんでした。いや實のところは、やくざな弟が一人ゐましたが、後頭部尙僕病といふのを患ひましてね、何だか篋棒に早く死んちまひました……何だつて英國原産の尙僕病なんか、クルスク縣はシチグロフ郡まで入りこんで来たものでせう？ しかし、そんな事は肝心の話ぢやありません。私の教育を引き受けてくれたのは母親で、如何にも田舎地主らしい眞剣さで、ひたむきにやつてくれたもんです！ 私が生まれ落ちたその記念すべき日から十六の聲を聞くまで、母は私の教育に専念しました……あなた、私の話をずつと聞いてゐますか？」

「聞かなくつてどうしませう、さあ、話して下さい。」

「いや、それなら結構です。さて、私が十六の聲を聞いたとき、母はさつそく猶豫なしに、ネージンの希臘ギリシアから来た獨逸生まれのフィリポギッチといふ佛蘭西語の家庭教師を追ひ出してしまひました。それから、私を莫斯科へ連れて行つて、大學へ入れてくれましたが、間もなく伯父の手に私を残して、天國へ旅立つてしまひました。伯父はコルトゥン・バプーラと云つて、シチゴフ郡ばかりでなく、他郡にまで名を知られた凄腕の辯護士でした。この親身の伯父に當たる辯護士のコルトゥン・バプーラは、よくある手で、私を綺麗に裸かにしてしまひました……しかし、これもやはり本筋の話ぢやありません。私が大學に入つた時は——母親の努力を多としなければなりません——可成りしつかりした力がついでにありました。けれども獨創力の缺けてゐる事には、もうその時分から氣がついてゐました。私の少年時代は他の若い連中の少年時代と較べて、少しも變つた所がありませんでした。私もやつぱり羽根布團にくるまつて育てられたみたいに、だらしなくぼんやりと大きくなつて行つて、やはり御多分に洩れず、早くから詩の誦讀などを始め、空想的傾向などといふのを口實にして、だん／＼柔弱になつてゆきました……何を空想するかといふと、えゝと——さうですね、美しきものとか……さういつた類なんです。大學へ入つてからも、私は別に人並はぶれた道をとらうとはしませんでした。私は直きに研究團體へ入りました。その頃は時世が今とは違つ

てゐましたからね。しかし、あなたは研究團體つてどんなものか御存じないかも知れませんね？——たしかシルレルがどこかでこんなことを云つてゐたやうですね。

Gefährlich ist's, den Leu zu wecken

Und schrecklich ist des Tigers Zahn,

Doch des schrecklichste der Schrecken—

Das ist des Mensch in seinem Wahn!

危きは獅子の眠りを醒ますこと

恐ろしきはまた虎の牙

なほいやさらに恐ろしきは

迷ひに落ちし人ごゝろ!

シルレルは確かに云ひ間違ひをしたんです。きつと Das ist ein (Krujok)……in der Stadt Moskau (怖ろしきはモスクワ)といふつもりだつたんですね。」

「でも、どうして研究團體がそんなに恐ろしいんでせう？」と、私は訊ねた。

同室の男は夜帽子を掴んで鼻の上まで引き下ろした。

「何がそんなに恐ろしいか、ですつて？」と、彼は呼んだ。「ほかでもありません、研究團體なるものは、あらゆる獨創的發達を撲滅させるからです。研究團體は社會、女性、生活の代りに作られた醜い置造物なんです。研究團體は……あゝ、一寸待つて下さい、研究團體つてどんなものか、ひとつお話し致しませう！ 研究團體といふやつ——これは如何にも合理的な仕事らしい意味と外見を備へてはゐるけれど、その實、不精者どものだらしない寄りあひ暮らしなのです。研究團體は普通の會話を議論に代へて、何の役にも立たない饒舌の癖をつけ、獨り靜かに有益な仕事をするのを妨げ、人間に文學的疥癬病を傳染させる。さうして遂には、魂の新鮮さや健全な處女性を奪つてしまふのです。研究團體といふ奴——それは同朋愛だの友情だのといふ美名の下に匿れた凡俗性と倦怠に過ぎません。胸襟を披くとか、同情を寄せ合ふとかいふのを口實にして、誤解や自分勝手主張を絡み合せたものに過ぎません。研究團體では一人々々の會員が權利を持つてゐるおかげで、いつ何時でも垢だらけの汚い手を、仲間の魂の中へ突つ込むことで許されてゐるので、誰ひとり他人の手に弄られない純潔な心を持つてゐるものはないのです。研究團體では頭腦の空っぽなお喋りや

自惚れの強い小才子や、まだ若いくせに老成ぶつた人間などが崇拜されて、才能はなくとも「隠れたる」思想をもつたとか稱する詩人が擡ぎ上げられるんです。研究團體ではやつと十七八の若造が、女だの戀だのと生意氣に尤もらしく喋々してゐるが、いざ女の前に出ると黙り込んでしまふか、でなければ、まるで本を読むやうな調子で話をする——しかもその話といふのが、なつちやゐないんです。研究團體では小生意氣な雄辯が盛んになつて、お互ひ同志が警視廳の刑事そこのけに探り合ひをやる……あゝ、研究團體、それは研究團體でなく、立派な人間を一再ならず滅亡に陥れた魔法の圈だ！」

「いや、それは少し大仰ですよ、失禮ながら。」と私は遮つた。

同室の男は黙つて私を見つめた。

「さうかも知れません。至くのところ、さうかも知れません。しかし、何分我々のやうな連中に殘された樂しみは、誇張するといふ事たつた一つだけなんですからね。そこで、私はこんな有様で莫斯科に四年暮らしました。この間の年月がどんなに早く、どんなに呆れるほど早く經つてしまつたか、それはあなた、とても私などの口にくまぐま現はせるものぢやありません。思ひ出すと悲しくもなれば、忌々しくもなります。朝起きたかと思へば、まるで櫛にでも乗つて山を迂り下りるやうに

……気がついてみると、もう何時の間にかやら籠にこりついてゐて、やがてもう日が暮れて行く。寝ぼけ眼をした下男がフロックを着せてくれる——服装を整へて友達の所へ出かけて行く。それからパイプをふかし、薄いお茶をコップに幾杯も幾杯も飲みながら、獨逸哲學だとか、愛だとか、永遠な精神の輝きとか、その他いろんなこの世に縁遠い問題を論じたものです。しかし、そこでも獨創性のある、自我のはつきりした人達に出逢ひました。中にはどんなに自我を撓めても歪めても、持つて生まれた性質が自然と光りを放つものです。たゞ私ばかりは可哀想なもので、まるで柔かい蠟みたいな自分自身を担ね廻してゐるが、生まれつきがやくざなものだから、こんな外部の小細工に一向反撥しようとしなさい！ さうかうしてゐるうちに、やがて二十一の聲を聞きました。私は親から残された財産を相続しましたが、こいつは正確に云ふと、後見人がお情けで残してくれた財産の一部を貰つた筈です。私は農奴から自由の境涯にして貰つた召使ひのワシトリー・クドリヤーシェフに、世襲財産の管理を全部委任して、伯林へと海外留學に出掛けました。外國ではもう前にも申し上げた通り、三年間滞在しました。ところでどうでせう？ そこでも、外國でも、私は相變らず獨創のない人間で済んでしまひました。第一、歐羅巴といふものも、歐羅巴の生活なるものも、鶴の毛ほども知らないで終つたのは云ふまでもありません。私は獨逸の教授たちの講義を聞き、獨逸

の本を本場で讀んだ……たゞこれだけがモスクワ生活と違ふだけでした。私はまるで修道院の僧みたいに、孤獨な生活を送りました。多少懇意になつたのは、退職の陸軍中尉ぐらゐのもので、これが私と同じやうに、貪婪な知識慾に責め立てられてゐましたが、そのくせ極く悟りの鈍い方で、能辯の才といふものがまるでない。またベンザとかその他の地味豊かな地方から來た鈍感な家族連れの連中とも懇意にしたり、カフェーへ出入りしたり、雑誌を讀んだり、晩になると芝居へ行つたりしました。土地の人とは餘り交際をしないで、話をするのも妙に堅くなつてしまひ、自分の住居へは誰も寄せつけないやうにしてゐました。たゞ二三人の猶太生まれのしつこい著者だけが例外で、のべつ私の所へやつて來ては金を借りて行きました——露西亞人が信じ易いのをいゝ事にしましてね。その中に不思議な運命の戯れで、私は一人の教授の家へ出入りするやうになりました。それはかういふわけなんです。私がこの人の聽講生にならうと思つて申し込みに行つたところ、先生なると思つたか、私を自分の家の集りに招待してくれました。この教授には娘が二人あつて、年は二十七ぐらゐ、がつしりした身體つきで——實際その通りだから仕方がありません——實に見事な鼻をして、髪はきれいに渦を捲き、眼は薄青く、赤い手に白い爪をしてゐる。一人はリンヘンと云ひ、もう一人はミンヘンと云ふのです。私は教授の家へ出入りするやうになりました。お断りして置き

ますが、この教授は鈍物といふ譯ではないけれど、なんだか抜けてゐるやうなところがありました。講壇に立つと、可成り筋道の立つた話をするんですが、家へ歸ると舌つたらずのやうな口の利き方をして、いつも、眼鏡を額に上げてゐる。それでゐて、中々博識の學者なんです——ところが、どうでせう？ 私は急にリンヘンに戀ひしてゐるやうな氣がして來ました。——それからまる六箇月といふもの、ずっとそんな氣持ちが續きました。尤も、その娘と話をする事は餘りなくつて、どちらかと云へば、ちつとその顔を眺めてゐる方が多かつたのです。けれど、いろんな身につまされるやうな事を讀んで聞かせたり、そつと内緒で手を握つたり、晩になると二人で並らんでちつと月を眺めながら、月がなければ何となしに空を見上げながら、空想に耽つたりしてゐたものです。おまけに、娘はコーヒーを入れるのがとても上手で……この上に何が不足かと思はれるばかりでした。たゞ一つ困つた事には、所謂、えも云はれぬ幸福の高潮した瞬間に、私はどうしたものか鳩尾の邊がしくしくと痛んで、惱ましい冷たい慄へが胃の邊りを走るやうな氣がするのです。私は到頭このやうな幸福感に堪へ切れないで、逃げ出してしまひました。それからなほ丸二年といふもの、外國で暮らしました。伊太利に行つた時には、羅馬の『基督變容』の前に立ち、フローレンスの『ヴィナス』の前に立つては忽ち大袈裟な歡喜の聲になつて、まるで物の怪にでも憑かれたやう

な風でした。晩には又詩を書いたり、日記に筆を染めたり、一と口に云へば、こゝでも世間並みの事やつてゐたわけです。それにしても、所謂獨創のある人間になり済ますのがどんなに易々たる業か、これでお分かりになつたでせう。私は早い話が、繪や彫刻のことは一向に分らない……それならそれと、あつさり白狀してしまへばよささうなものです……どつこい、さうはゆかない。案内人を雇つて、壁畫を見に駆けずり廻らなければならぬ……」

彼はまた眼を伏せて、再び夜帽子を脱ぎすてた。

「さて、いよく故國へ歸りました。」と彼は疲れた聲で話を續けた。「そして莫斯科に着きました。が、莫斯科では私の身の上に驚くべき變化が起こつたのです。外國にゐる間は主に黙りこんでばかりゐたものが、此處へ歸つて來ると、急に思ひがけないほど元氣に捲し立てるやうになつて、同時にとんでもない己惚れを抱くやうになりました。また私を殆んど天才扱ひにしてくれる寛大な人達も出て來ました。婦人たちは私の勿體らしいお喋りを感じして傾聴したものです。けれど、私はこの高い名聲を長く保つてゐることが出來ませんでした。或るとき突然、私のことで良からぬ風評が立ちました（誰がそんなものを捏造したか知りませんが、恐らく女の腐つたやうな奴でせう——莫斯科にはこんな男の老嬢がうよくする程ゐるんですから）。この風評は一旦立つが早い、ま



るで暮みたいにどん／＼芽を殖やし、蔓を伸ばして行きました。私はその中に絡まれてしまつて、どうにかして連れ出さう、この纏れつく糸を断ち切らうとしましたが、——どつこい、中々さうは収かない。で、私は莫斯科を發つてしまひました。さて、この場合にしても、私はやはりやくざな人間に過ぎない事が分かりました。私は蕁麻疹の快復期を待つやうに、落ち着いてこの災難が去るのを待つてゐればよかつたのです。さうすれば、例の寛大な連中がまた抱擁の手を置いて私を迎へ、婦人達は再び私の言葉に微笑を溶びせてくれたに相違ない……けれども私が獨創的な人間でないのがいけなかつたのです。實は突然、馬鹿正直な氣持ちが頭を持ち上げたのです。私はなんだかのべつ幕なしに喋つて、喋つて、喋り立てるのが恥づかしくなつて來た。——昨日はアルバートで今日はトルバで、明日はシフツェフ・ヴラジョークで、相も變らぬ同じやうな事を喋り散らすのが、氣恥づかしくなつたのです……しかし、それを世間が要求してるとすれば、構はないわけぢやありませんか？ まあ、この方面の本當の猛者連を御覽なさい。こんな事は蚊が喰つた程にも感じやしない、それどころか反つてさうしなくちやゐられないので、中には二十年間も舌一枚を資本に働いて、おまけに始終同じ手で行つてる者さへあります……自己に對する確信と自負心の力は、なんと偉大なものぢやありませんか！ 私にだつてそれはありました、自負心は。そして、今でもま

るつきり閉塞してしまつたわけぢやありません……しかし困つたことは、繰り返して云ひますが、私が獨創的な人間でなくて、中途半端なところで足踏みしてしまつたことなんです。私を生んでくれた自然は、うんと自負心をつけてくれるか、さもなければ、始めつからまるでそんなものを授けてくれなければよかつたのです。とは云ふものの、始め暫くの間は私も全く辛い思ひをしましたよ。おまけに外國などへ行つたために、すつかり身上を耗つてしまつたのですが、それかといつて、若い身體つきはしてゐるけれど、ゼリーのやうにぶよ／＼した商人の後家さんなどと結婚する氣にならないので——結局、自分の持ち村へ引つ込んでしまひました。どうやら、——と同室の男はまた私を横目にちらと見てかう云ひ出した。「田園生活の最初の印象だとか、自然美の描寫だとか、孤獨生活の靜かな喜びとか、さういつたやうなものは抜きにしても御異存ないでせうね……」

「異存ありません、異存ありませんとも——と私は答へた。

「しかも」と話し手は言葉を續けた。「そんな事はみんな馬鹿氣てゐますからね、少なくとも私に關する限りでは。田舎に歸つた私は、まるで閉ぢ込められた仔犬のやうに、寂しくて寂しくて困つたものです。尤も正直なところ、初めて村へ歸る途中、春のことでしたが、馴染みの深い白樺の林を通りかゝつた時には、淡とした甘い期待のために頭がぐらく／＼して、心臓が、烈しく鼓動したもので

すがね。けれど、こんな風の漢とした期待は、御承知でもありませんが、決して實現される例がない。むしろその反對に、まるで思ひもかけなかつたやうな別の事が起こつて來るのです。例へば獣疫だの、年貢の滞納だの、競賣だの、何だのかだのといつたやうなわけで。私は支配人のヤーコフに助けて貰つて、やつとこのことでその日その日を過ぎておりました。このヤーコフは前の管理人の代りに取り立ててやつたのですが、その後暫くたつてから、前に負けず劣らずの、いや、それにも優る位の泥棒だといふことが分かつたのです。おまけに、樹脂を塗りたくつた長靴の臭ひで、私の生活氣分を毒すること夥しいのでした。かうしてゐる中に、或るとき私は近所に親しくしてゐた家がある事を思ひ出しました。その家族は退職陸軍大佐の未亡人と二人の娘なのでした。私は馬車の用意をさせて、この家へ訪問に出かけました。その日は永久に記念すべき日となつて、六箇月後、私はこの大佐未亡人の二番目娘と結婚したのでした……」

話し手は頭を垂れて兩手を空にさし上げた。

「それにしても、」と彼は熱くなつて言葉をついだ。「私は亡くなつた妻のことで、良からぬ考へをあなたの心に吹き込みたくはありません。とんでもない話です！ あれはこの上もなく高尚な、心ばえの優しい女で、愛情の深い、どんな犠牲をも厭はない人間でした。とは云ふものの、打ち明け

て申しますが、もし私が妻に先立たれるやうな不幸な目に逢はなかつたら、恐らく今日あなたとお話しなにかすることは出来なかつたでせうよ。なぜつて、私は霜除け小舎の梁で何度首を縊らうと思つたか知れないからです、しかも、その梁は未だにそっくりその儘なんですからね！」

「或る種の梨は、」と暫く無言の後に、また彼は云ひ出した。「いはゆる『本當の風味』を出すためには、暫くの間、穴蔵の土の中にかこつて置く方がいゝとされてゐますが、亡くなつた妻も、さういつた風な天賦の性質を持つた女なのでした。やつと今になつて、私はあれのいゝ所が本當に分かつて來ました。やつと今になつて、例へば結婚前にあれと一緒に過ごした夜々のことを思ひ出すと、悲痛な氣持ちなどは少しも起こらないで、反つて涙ぐましいほど感動させられるのです。家内の實家は大きく裕かな方ではなく、家は至つて古風な木造でしたが、しかし住み心地のよい家で、淋しいほど木立ちの生ひ茂つた庭と、草だらけな内庭の間にあつて、小高い丘の上に建てられておりました。丘の麓には川が流れてゐて、鬱蒼とした茂みの間からちらほら透いて見えるのでした。大きな露臺が家の中から庭へ出る通路になつてゐて、露臺の前には薔薇の花で埋まつた細長い花壇が隙間と咲き誇つておりました。花壇の兩端にはアカシヤの樹が二本植ゑてありましたが、若木の頃に亡くなつた主人が悪戯をしたので、螺旋形に燃れ合つてゐるのでした。その少し先きの方には、手

入れを忘れて荒れるに任した木苺の繁みの眞ん中に、四阿が一つ立つてゐました。内部は數奇を凝して色さまざまに塗り上げられてゐましたが、外側は見るも氣味悪いほど古びて見すばらしい姿をしてゐるのです。露臺には硝子戸がついてゐて、客間に通ずるやうになつてゐました。客間へ入ると、見る人の物珍らしげな眼にうつるものは、先づ、四隅に造りつけられた化粧煉瓦の煖爐、右手に据ゑてある調子の怪しげなピアノ、その上に堆高く積み上げられた筆寫の樂譜、褪めた空色の地に白ちやけた花模様のある緞子を張つた長椅子、圓テーブルが一つ、エカチェリーナ朝時代の磁器や南京玉で飾つた玩具などを並べてある飾り棚が二つ、それから壁には、胸のところに鳩を抱いて、眼を上へ吊り上げた、白つばい髪の少女を描いた、月並みな肖像畫が懸かつて居り、テーブルの上には、剪り立ての薔薇を挿した花瓶……ほら、ね、随分細かく描寫するでせう。この客間で、この露臺で、私の戀の悲喜劇がすつかり演じられたのです。主の未亡人は意地の悪い婆さんで、いつも突慳貪な鹽辛聲をしてゐる、横紙破りの口喧ましいしろものでした。二人の娘のうち一人はエーラといつて、よくある型の田舎令嬢と一向に變つたところもない娘でしたが、もう一人はソフィヤといふので——實は、私はこのソフィヤの方に首つたけになつたのです。この二人の姉妹には他に一つ小さな部屋が當てがはれて、共通の寢室になつてゐました。如何にも可らしい、木づくりの

寢臺が二つ据ゑつけられ、黄色くなつた古くさいアルバムや、木犀草や、鉛筆で描いた甚だ拙い男友達や女友達の肖像がありました(その中でも、人並み外れて精力の漲つたやうな顔つきをして、更にそれ以上精力的な署名をした一人の紳士が、嶄然異彩を放つてゐた。若い頃には柄にない程の望みを囁かれてゐたけれど、結局のところは、私たち同様何一つ仕出來さなで終つた男です)。それからゲーテやシルレルの胸像、獨逸語の本、乾からびた花環、そのほか記念に残された品々が並んでゐました。けれど、この部屋へは私は餘り出入りしませんでした。氣も進まなかつたのです。こゝへ入ると、何故か呼吸がつかまるやうな氣がしましたね。その上に——奇妙なことですが、ソフィヤが格べつ好もしく思はれたのは、私がこの娘に背中を向けて坐つてゐる時か、でなければ、一人でその女のことを思つてゐる時——殊に夕方露臺の上で彼女のことを空想してゐる時なものでした。私はそんな時、夕焼け空や木立ちの蔭や、もう暗くなつてゐながら、尙くつきりと薔薇色の空に浮き出してゐる緑の細かな葉などを、眺めつくしてゐたものです。客間ではソフィヤがピアノに向つて、ベートオヴェンの作品のうち、何かしら自分の好きな、情熱の籠つた、物思はしい感じのする一節を絶えず奏でてゐるのです。意地の悪い婆さんは長椅子に凭れて、苦もなささうに軒をかいてゐる。茜色の夕焼けが瀧のやうに流れ込んでゐる食堂では、エーラがまめ／＼しく茶の支

度をしてゐる。サマワールは何か嬉しい事でもあるやうに、節面白くしゆつくと沸るし、輪形龜は陽氣さうに音を立てて割れ、スプーンは茶碗にふれて澄んだ響きを立ててゐる。日がな一ち、遠慮會釋なく囁り通したカナリヤは、不意に静まつて、たゞ時折り何かもの問ひたげな調子でちつちと鳴いてゐるばかり、透き通るやうな軽い雲の中から、通り雨がばらばらと降り落ちて来る……私はちつと坐つたまふ、いつまでも耳を傾け、そこはかとなく眺めつくしてゐる。すると心が廣々となつて、又しても自分は戀ひしてゐるのだなといふ氣がして来る。さて、このやうな黄昏の魅しにひかれて、あるとき、私は老婦人に娘さんを貰ひたいと申し入れました。そして、二箇月ばかり経つてから、私たちは結婚しました。私は新妻を愛してゐるやうな氣がしてゐました……さあ、今ではもうはつきり分かつてもう頃なんです、私は正直なところ、未だにソフィヤを愛してゐたのかどうか、あやふやなのです。あれは氣立ての優しい、利巧な、口數の少ない、温かい心を持つた女でした。けれども、どういふ譯か、神ならぬ身の知る由もありませんが、餘り長く田舎に暮らしてゐた故か、ほかに何か謂れがあつたのか、とにかくあれの心の底には（もし心に底といふものがあるとするればですが）或る一つの傷が隠れてゐたのです。でなければ、どうしても癒すことの出來ない小さな傷口が、絶えず血を滲ましてゐるやうな具合なのです。それは、彼女自身にしても、

また私にしても、何とも名のつけやうなものでした。この傷のある事に氣がついたのは、もちろん結婚してから後の事です。そのために私はどれだけ苦心したか知れませんが、——しかし、どうにも仕方がなかつたのです！ 私は子供の頃に鷲を一羽飼つてゐましたが、あるとき猫に爪を立てられた事があります。私たちはそれを助け出して手當てをしてやりましたが、可哀さうな鷲は傷が癒つても、元の身體にはなれませんでした。いつも羽を膨まして元氣がなく、歌も唄はなくなりました……とゞのつまりは、ある晩、戸を閉めるのを忘れたので、鼠が籠の中へ入り込み、嘴を噛み切つてしまひました。そのために鷲も到頭はかない最期を遂げてしまひました。一體どんな猫に爪を立てられたのか知りませんが、私の妻もその可哀さうな鷲と同じやうに、しよんぼりと元氣がなくなつて行きました。どうかすると自分でも羽ばたきをして、爽かな空氣の中で日光と自由を樂しみながら遊び戯れなくなる様子で、一寸試つてはみるのですが、すぐ意氣地なく縮こまつてしまふ。でも、妻は私を愛してくれました。もうそれ以上なんにも望む事はないと、幾度私に誓つた事やら知れませんが——なんと忌々しい事に！ さういふ口の下からあれの眼が曇つて来るのです。私はあれの過去に何かあつたのぢやないかと思ひまして、いろいろ調べても見たのですが、一向に何の種も上がらない。さあ、こゝで御判断を願ひますが、獨創的な人間ならちよつと肩を練めて、

まあ、一度ばかり溜め息をついただけで、自分の考へ通りな生活を始めたことせう。が、私は獨創的な人間でないものだから、梁はりなんか眼をつけるやうになつたのです。私の妻には老嬢オールドミスのあらゆる癖が沁み込んでゐて——ベイトオヴェンだの、夜の散歩だの、木犀草だの、友達との文通だの、アルバムだの、何だのといふ有様で、これより外の暮らし方、殊に一家の主婦としての暮らし方には、どうしても馴染めなかつたのです、それかと云つて、もう人妻になつた女が、そこはかない悩みを抱いて、毎晩のやうに、「きみよ、東雲に佳き人を覺まし給ふな！」などを歌ふのは可笑しいものですからね。

「まあ、こんな風で私達は三、間、夢のやうに暮らしてしまひました。ところが、四、目にソフィヤは初めてのお産で亡くなりました。しかも奇妙な事には——私にはなんだか初めから蟲の知らせてみたいものがあつたのです。あれは私に娘なり息子なりを、授けてくれる力はない、この地上に新しい住人を送り出せさうもない、といふ氣がしてゐました。私は今だに葬式の時の模様を覺えてゐます。それは春のことでした。私たちの教區の教會は小さな古ぼけた建物で、聖帷イコノスタスは黝ずみ、壁は漆喰シメツトひが落ち、煉瓦の床は、ところ／＼齒の抜けたやうになつてゐるのです。兩側の唱歌隊席には大きな古い聖像がかけてありました。棺が持ち込まれて、聖門の前にあたる堂の眞ん中へ

安置され、色の褪めた蔽カクレモノひを被せられて、周りに三つの燭臺が置かれました。やがて勤行キョウギョウが始まりました。小さな編み下げ髪を後ろに垂らし、緑いろの帯を低いところに締めたよぼ／＼の伴僧が、經机の前で物悲しげに口をもぐ／＼さして讀誦クニシヨクしてゐる。人の好ささうな、しよぼ／＼眼まなこをして、黄色い花模様のある薄むらさきの衣ころもを着た、同じやうに老いぼれた司祭が、自分と助祭の分と二人前のお勤めをしてゐました。一杯に開け放した窓の外には、枝垂れた白樺の瑞々しい若葉がそよいで囁き交はし、庭からは草の香りが漂つて来る。蠟燭の赤い焰は春の陽の樂しげな光りの中に、白々と見えてゐます。雀が會堂の内外に高い囀りを漲らし、時々堂内へ飛び込んで来る燕の聲が、丸屋根の下で朗らかに響き渡る。金粉のやうに漂ふ陽光の中で、故人の靈にひたすら祈り續けてゐる數多からぬ百姓たちの亞麻色をした頭が、忙がしげに上がつたり下がつたりしてゐる。青味がかつた煙の流れが、香爐の孔から細々と立ち昇る。私は妻の死顔を眺めました……あゝ！死さへ、實に死さへも、彼女を自由にしてはやらなかつた。その傷を癒してはやらなかつた。依然として變りのない病的な、おど／＼した、啞のやうな表情——それは棺の中うちにゐてさへも、居心地が悪いといふやうな具合でした……私は悲痛な氣持ちで、体内の血が止まつたやうな思ひがしました。全く優しい女でしたけれど、しかし死んだのは、結局あれ自身のために好い事だつたのです。」

話し手の頬は一面に紅を潮し、眼は曇つて来た。

「妻が死んでからと云ふもの、」と彼は又話し出した。「彼はひどい氣鬱症にとりつかれてゐましたが、やつとそいつを清算して、いはゆる事業にとりかゝらうと考へました。で、縣廳所在地の町へ出て勤めにつきました。お役所の大きな部屋にゐると頭がやたらに痛んで、眼もどうやら鈍つて来るのでした。そこへ搦てゝ加へて、ほかの事情も重なつて来て……私は退職する事にしました。それからモスクワへ行かうと思つたのですが、第一に金はなし、第二に……もうお話しした事です。私は諦めをつけてゐたのです。この諦めがついたのは突然のやうでもあり、又さうでもないやうな具合でした。氣持ちの上ではもうとづくに諦めてゐたのですが、頭の方はやはりまだ我を折らうとしなかつたのです。私はかうした憤まじやかな感情や思想を、田舎の生活や一身上の不幸のせゐにしてゐました……また一方から云ふと、私はもう前からこんな事に氣がついてゐました——近隣の地主たちは若い者も年寄りも殆んど凡て一様に、初めの中こそ、私の學識や外國留學や、そのほか私の教育上の特點に骨かされてゐた形ですが、やがてすつかり私に馴れ切つたばかりでなく、應對振りなども何だかぞんざいに、好い加減になつて、私の議論などろく／＼終ひまで聞きもせず、話しふりにしても『さやうでございます』なんて言葉遣ひはもうしなくなつた。それから、申

し忘れてゐましたが、結婚した初めの年に私は徒然のまゝ、文學の方をやらうと思ひ立ちましたね、ある雑誌に原稿を送つた事さへあります。それは、私の記憶に間違ひがないとすれば、たしか中篇の小説だつた筈です。けれど、暫くたつと、編輯者から鄭重な手紙が届いて、いろ／＼な文句の末に、貴下の頭腦は認めないわけにゆかないけれど、才能の方はさういふ事にまゐり兼ねる、文學に必要なのはたゞ才能ばかりだ、と書いてありました。その上に搦てゝ加へて、モスクワから来たある男が——尤も極く善良な若者だつたんですけれど——縣知事邸の夜會で何かの話の拍子に、私の事を氣の抜けた頭の空つぽな人間だと評したといふ噂が、傳はり傳はつて私の耳に入つたのです。しかし、半分は私の身から出た錆でしたが、お芽出度の己惚れはそれでも相變らず續いてゐました。お察しでもありませんが、自分で自分に『びんたを喰らはせる』氣になれなかつたのですね。けれども、遂に或る時、忽然と眼が覺めました。それはまあ、こんな事情なのです。私のところへ地方の警察署長がやつて来ました。私にはまるで修理の工面がつかないで打つちやらかしにしておいた領地内の壊れた橋のことで、注意を促すつもりだつたんです。蝶鮫の燻製を肴に火酒を一杯ひつかけながら、この鷹揚な署長はまるで父親めいた口振りで、私の不行届きを一應責めはしたものの、それでも私の立場に同情して、たゞ百姓たちに云ひつけて、不用な材木でも被せて置いた

らよからうと勧めたばかりです。やがて、煙草に火をつけて、間近に迫つてゐる選挙の話を始めました。その當時、縣の貴族團長といふ名譽職を狙つてゐたのは、オルバッサーフ某といふ男でしたが、まるで中味のないくせに豪さうな事を云つて、おまけに賄賂まで取らうといふ人間なんです。その上、財産からいつても家柄からいつても、別に取り立てていふ程の事もない。私はこの男のことで自分の意見を述べましたが、その口振りが大分ぞんざいだつたのです。私は正直な話、オルバッサーフ氏を高い所から見下ろしてゐたのです。署長はちつと私の顔を見て、愛想よく私の肩を叩きながら、人の好ささうな調子でかう云ひました。「いや、ワシーリイ・ワシーリッチ、われわれ風情があんな人達のことをとやかく云ふのは間違つてゐますよ、及びもないこと……牛は牛づれ、馬は馬づれと云ひますからね。」「とんでもない、」と私はむつとして云ひ返しました。「私とオルバッサーフ氏と、どれだけ違ふと仰つしやるのです？」署長は口からパイプを取つて、眼を丸くしたかと思ふと、いきなりぶつと噴き出してしまひました。「いや、笑はせるよ。この人は、」と眼に涙を滲ませながら到頭かう云ひ出すのでした。「とんでもないことを宣ふお方だ……あゝ！驚いた！」と云つて、時々私の脇腹を肘で突ついたり、急に私に君呼ばはりをしてしながら、歸るまで私をからかひ通すのでした。遂に署長は歸つて行きました。これこそ本當に盃を溢れさす最後の一

滴だつたのです。私の自信は一溜まりもなく崩れてしまひました。私は幾度か部屋の中を歩き廻つて、鏡の前に立ち止まり、いつまでもいつまでも自分の情氣きつた顔を見つめながら、ゆるりと舌を出して、苦笑ひを浮かべながら顔を振つたものです。眼かくしをしてゐた布が落ちてしまつて、私ははつきりと、鏡にうつるわが顔よりもはつきりと、自分が如何に空虚な、とるに足らぬ、なんの要もない、月竝みな人間であつたかといふ事を、まさしくと見て取つたのです！

話し手は口を噤んだ。

「ヴォルテールの或る悲劇の中に、」と彼は萎れた聲で話を續けた。「一人の紳士が不幸のどんづまりまで行きついたのを喜ぶところがあるでせう。私の運命には悲劇的なところなんか一向ありませんが、それでも正直に白状すると、なんだかそれに似たやうなものを味はひましたよ。私は冷やかな絶望の毒つばい喜びを知りました。午前中、悠然と寢床の中に身を横へたまふ、自分の生まれた日と時を呪ふのがどんなに快いものか、それを経験しました。——私は一時にさつぱりと諦めてしまへなかつたのです。それに、察しても頂きますが、金がないものですから、忌々しい田舎に縛りつけられてゐたのです。領地の經營も役所勤めも文學も——何一つ私の身につかなかつた。地主たちとの交際は避けるやうになり、書物は見るのも厭になつてしまひました。捲毛をふり立て、」人

生」といふ言葉を躍起になつて繰り返してゐる、水ぶくれのしたやうな病的に感傷的なお嬢さん方にも、さつぱり興味を感じなくなりました。私がお喋りをしたり、有頂天になるやうな癖をやめてからといふものはね。それかといつて、全くの孤獨になつてしまふのも柄にないし、また出来もしなかつたのです……私は段々と——何を始めたか想像がおつきになりますか？——近處の地主たちの家を訪ね廻るやうになりました。まるで自己輕蔑の毒に酔つたかのやうに、故意と機りのある度にけち臭い屈辱に浸るのでした。食卓では時々、料理を抜きにされたり、冷やかな高慢なあしらひを受けたりして、終ひにはまるで存在さへ認められないやうになりました。一座の話の仲間にも入られて貰へないので、昔モスクワ時代には私の足の塵を舐め、外套の端に接吻しかねないほど私を崇拜してゐた、一人のお話にならないほど馬鹿なお喋りに、わざと隅つこの方から相槌を打つやうな始末……それでゐながら、自分がこんな皮肉な眞似をして苦い満足に耽つてゐるのだとは、夢にも考へないやうにしてゐました……冗談ぢやない、獨りぼつちでなんの皮肉どころでせう！ まあ、こんな風にして、幾年か過ぎました。そして、今でも同じやうにやつてゐるわけです……」

「それにしても、こんな作法つて聞いたことがない。」と隣りの部屋からカンタグリュール・ヒン氏が、睡さうな聲でぶつ／＼云ふのが聞こえた。「夜中にこど／＼話をするなんて、どこの馬鹿野郎だ！」

話し手は素早く毛布の中へ潜りこんで、臆病さうに外を覗きながら、指を立て、私を威す眞似を

「しつ……しつ……」と、囁いた。——そして丁度謝つてでもゐるやうに、カンタグリュール・ヒンの聲のする方へお辭儀をしながら、恭々しげに云つた。「畏りました、畏りました、どうか御免なすつて……ねえ、あの男だつて眠る権利があるんです。眠らなくちやなりません。」と又ひそ／＼聲で言葉を續けた。「あの男だつて新しい鋭氣を養ふ必要がありますよ——まあ明日、食事を美味しく食ふためにでもね。私たちはあの男の邪魔をする権利はありません。それに、私も云ひたいだけの事はみんなお話ししたやうな氣がします。きつとあなただつてお眠いでせう。おやすみなさい。」

話し手は疝症らしく、くるりと向かうをむいて、枕に頭を埋めた。

「それにしても、せめて、」と私は訊ねた。「あなたのお名前だけでも聞かして頂きたいものですが……」

彼は素早く頭を持ち上げた。

「いえ、後生ですから、」と私の言葉を遮つた。「私の苗字は訊かないで下さい。私にも、他の人にも。たゞ、運命に叩きつけられた無名の男、ワシーリー・ワシーリッチといふことにして頂きます



う。おまけに、私は獨創のない人間ですから、特別な名を持つ値打ちなんかないんで……でも、もし強ひて何とか呼び名をつけたいとお思ひでしたら、さうですね……シチグロフ郡のハムレットと呼んで下さい。こんな風のハムレットは何處の國にも澤山をります。但し、あなたはまだ他の手合ひにぶつかつた事はないかも知れませんが……では、これで失禮します。」

私はまた、羽毛布團の中へ潜り込んでしまつた。翌朝、人が来て私を起こした時、彼はもう部屋の中におなかつた。夜が明ける前に發つたのである。

### チエルトブハーノフとネドビュースキ

ある暑い夏の日、私は馬車に乗つて獵から歸つてゐた。エルモライは私の傍に坐つて、うとうとしながら、頻りに舟を漕いでゐた。私の足許でぐつすり寝込んだ犬は、まるで死んだもののやうに、車の揺れる度に跳ね上がる。馭者は馬にたかる蛇をのべつ鞭で追つてゐる。白い埃が軽い雲のやうに馬車の後から従いて走る。私たちは藪の中に入つた。道はいよ／＼凸凹が多くなつて車の轍が小枝に引つかゝり出した。エルモライはびくつと身慄ひして、四邊を見廻した……「よう！」と彼は口を切つた。「こゝらにや松鶏がゐるに違えねえ。降りてみますべえ。」私達は車を停めて、原つばへ入つて行つた。私の犬が、巢に塊まつてゐる一群を見つけ出した。私は一發撃つて、銃に装填しようとする、不意に後ろの方がさ／＼と大きな音が聞こえた。やがて、馬に乗つた男が両手で藪を押し分けながら、私の傍へ近づいて來た。「一寸お訊ねしますが、」と男は横柄な聲で云ひ出した。「あなた方はどんな権利があつて此處で獵をなさる、え、あんたあ？」見知らぬ男は突拍

子もなく早口に、鼻にかゝる髪で切れきれに云つた。私はその顔を見やつたが、生まれてからこの方、凡そこんな顔を見た事がない。親愛なる讀者諸君、白つばい髪の毛をして、赤い鼻の天井を向いた、恐ろしく長い人蔭色の口髭を生やした小柄の男を想像して頂き度い。上の方が緋羅紗になつて、先きの尖つてゐる波斯風の帽子が眉に届きさうなほど額に被さつてゐる。着てゐる物は黄色い草臥れた夏上着で、胸には黒い綿天鵞絨の弾丸入れが取りつけてあり、縫目といふ縫目には擦れた銀の飾紐がついてゐる。肩には角笛をかけ、腰にはじ首を仰々しくぶら下げてゐる。瘦せさらばへた段鼻の栗毛馬が、氣でも狂つたやうに、主人を乗せたまゝよろめいてゐるし、足の曲がつた二匹のボルゾイ種の瘦せ犬が、その馬の足許をちよこ／＼駆け廻つてゐる。見知らぬ男の顔、眼つき、聲、一つ一つの動作——凡てその全體から、滅茶々々の無鐵砲さと、又と類のない方圖の知れぬ傲慢さを發散させてゐた。薄青いビィ玉めいた眼は、酔ひどれのやうにきよと／＼と動いて、横目に人を見る癖がある。首をぐいと後ろに反らし、頬つべたを膨まし、鼻息の音荒く、りん／＼に張り切つた威嚴を示すかのやうに、全身を慄はしてゐるところは、縦から見ても横から見ても、七面鳥そつくりであつた。彼は又もや同じ問ひを繰り返した。

「こゝで鐵砲を撃つのが法度だとは知らなかつたものですから。」と私は答へた。

「こゝは、あんた、」と彼は言葉を續けた。「私の地所なんですぞ。」

「それは／＼、では早速ひき上げませう。」

「ちよ、ちよつとお訊ねしますが、」と彼は遮つた。「失禮ながら、あなたはもしや貴族の方ぢやありませんか？」

私は名乗りを上げた。

「あゝ、さういふわけなら、どうぞ獵をなすつて下さい。かういふ私もやはり貴族なんで、貴族の御役に立つのは欣快の至りです……ところで、私の名はバンテレイ・チュルトブハーノフです。」

彼は身を屈めて、一聲こわ高に叫ぶと馬の頸筋に鞭をくれた。馬は頭を振り、後脚で立つたと思ふと、脇の方へ飛び退いて、その拍子に一匹の犬の足を踏みつけた。犬はけたまゝしい悲鳴を上げた。チュルトブハーノフは躍起となつて口から泡をとばしながら、耳の間を狙つて馬の頭を拳固でなぐりつけ、稻妻よりも早く地べたへ飛び下がり、犬の足を検めてみて、傷口に唾を吐きかけ、うるさく鳴かないやうに犬の横腹を一つ蹴つた後、額髪に手をかけて鎧に片足を乗せた。馬は鼻面を高くあげて、尻尾を立て、そのまゝ横つとびに藪の中へ入つた。彼は片足で跳ねながら馬について行つて、どうやらやつとの事で鞍に身を乗せた。そして夢中になつたやうに鞭を振り廻し、角笛を

吹き立てて駛り去つた。チュルトブハーノフの思ひがけない出現に面くらつて、私がまだはつきり我に返る暇もない中に、不意に今度はなんの物音も立てないで、小肥りに太つた四十恰好の男が、小さな黒馬に乗つて藪の中から現はれた。彼は馬を止めて、緑いろの革の帽子を脱ぎ、か細い柔かみのある聲で、栗毛の馬に騎つた人を見かけなかつたと問ひかけた。私は見かけたと答へた。

「どの方角へ行かれましたらう？」と男は帽子を被らうともせず、同じ調子で言葉を續けた。

「あつちの方です。」

「大きに有難うございました。」

男は唇を鳴らして、馬の横腹に兩足をくつつけながら、跑でぼか／＼と教へられた方角へ走つて行つた。角のやうに隅の尖つた帽子が枝のかげに隠れるまで、私はその後ろ姿を見送つてゐた。この新らしく現はれた見知らぬ男は、前の人物とはまるで風采がちがつてゐた。顔は輪のやうに圓々と膨れてゐて、遠慮深い、人の好い、慎ましやかに遜つた性質を現はしてゐた。同様に圓く膨れてゐて、青い血の筋の縦横に透いて見える鼻は、見るからに好き者らしい相を示してゐる。髪の毛は前の方には一本もなく、後ろの方に亞麻色の毛が幾つかの束になつて疎におつ立つてゐる。まるで薄の葉で切つたやうな細い眼は愛嬌たつぷりに睡きをして、如何にも汁氣の多さうな赤い唇は甘

つたるい微笑を浮かべてゐる。着てゐる眞鍮鈕に立ち襟のフロックは、大分くたびれたものではあつたけれど、小ざつぱりとしてゐた。羅紗のスポンは上の方にずり上がつて、長靴の黄色い縁飾りの上から脂ぎつた服脛が覗いてゐる。

「あれは誰だね？」とエルモライに訊ねた。

「あれですかね？ ネドビューースキンでさ、チーホン・イワーヌイチなんで、チュルトブハーノフの家に暮らして居りますよ。」

「どういふ人なんだい、貧乏なのかね？」

「金持ちぢやござえません。といつたところで、チュルトブハーノフだつて幾一文持つてるわけぢやねえけれど。」

「ぢや、なんだつてそんな家へ住みこんだのだ？」

「それが、その、すつかり仲よしになつちまひましてね。どこへ行くにも必ず二人連れ立つてでなけりや承知しねえんで……全くあれこそお神酒徳利でさ……」

私達は藪の外へ出た。すると不意にすぐ傍で、二匹の獵犬がけたましく吠え出した。と、大きな白兎がもうかなり高くなつた燕麦の畑を走るのが見えた。その後を追つて藪の中からゴンチイや

ボルゾイなど、幾匹かの犬が飛び出した。犬の後から、主人のチュルトプハーノフが駆け出して来た。彼は唳鳴りもせず、嗷しかけもしないで、息を切らしてあぶく、してゐる。時々ちぎれ／＼な意味もない音が、大きく開いた口から洩れるばかりであつた。眼をむき出してまつしぐらに飛んで行きながら、尙も夢中になつて、可哀さうな馬を鞭でたゞき續ける。獵犬は「もう一と息といふところ」まで追ひついた……白兎はちよつと腰を落としたと思ふと、くるりと後ろ向きになり、エルモライの傍をかすめて、藪をさして跳んで行つた……獵犬はそのまゝ先きへ駆け抜けた。「かあ、け、ろ、かあ、け、ろ！」へと／＼になつた獵きちがひが、まるで吃りのやうに、やつとのことです舌をまはしながら云つた。「いゝ子だ、しつかりやつてくれ！」その時、エルモライが火蓋を切つて放した……手傷を負つた白兎は、滑らかな枯草の上を獨樂のやうに轉がり、宙に一つ跳り上がったと思ふと、忽ち駆けつけた犬の口に唾へられて、悲し氣な聲を立てた。獵犬の群れがどや／＼と押し寄せた。

チュルトプハーノフは宙返り鳩のやうに馬からとび下り、匕首を引つ摺むと、大股を擡げて犬どもの傍へ駆けつけ、もの凄ひ勢ひで唳鳴りつけながら、身體ぢう裂き傷だらけになつた兎を引つたくり、顔をひん曲げて、兎の咽喉へ柄も通れと匕首を突き刺した……。突き刺してから「ほうい、

ほうい。」と叫んだ。するとチーホン・イワイヌイチが繁みの縁に現はれた。「ほうい、ほうい、ほうい、ほうい、ほうい、ほうい！」とチュルトプハーノフは喚いた。「ほうい、ほうい、ほうい、ほうい！」と相手は落ちついた聲で繰り返した。

「しかし、本當のところを云ふと、夏は獵をするもんぢやないんですがね。」と私は踏みしだかれた燕麦を指しながら、チュルトプハーノフに云つた。

「私の畑だから構はんです。」とチュルトプハーノフは、やつと息をつきながら答へた。

彼は兎の脚を切り取つて、胴體を鞍に括へつけ、切つた脚を犬どもに分けてやつた。

「いまの弾丸は俺の借りにしておくからな、お前。」獵師の掟に従つて、彼はエルモライの方を向きながら挨拶した。「そして、あなたあ、」と相變らずちぎれ／＼な、ぶつきら棒な聲で云ひ添へた。「あなたにはお禮を申します。」

彼は馬に跨がつた。

「失禮ですが……つい失念いたしました……あなたのお名と苗字は？」

私はまた名前を云つた。

「お近づきになつて、大變愉快です。もしお序でがありましたら、お訪ねを願ひます……したが、

チーホン・イワイヌイチ、あのファームカの奴はどこへ行つたんだ」と中つ腹で言葉を續けた。

「あいつのゐない間に兎を獲つてしまつたぢやないか。」

「乗つてゐる馬が倒れたもんで。」とチーホン・イワイヌイチは、にこ／＼しながら答へた。

「え、倒れたつて？ オルパッサンが倒れたつて？ ちよつ、忌々しい！ あいつは何處にゐるんだ、何處に？」

「あちらに、森の向かうに。」

チェルトブハーノフは馬の鼻面に一鞭くられて、まっしぐらに駆け出した。チーホン・イワイヌイチは私に二度までお辭儀をした。一度は自分ので、もう一度は友達の方なのである。そしてまた敵の中へ小走りに入つて行つた。

この二人の紳士はひどく私の好奇心を唆つた……これほど肌合ひの違つた二人の人間を、斷ち難い友情の絆に結びつけたのは一體なんだらう？ 私はいろ／＼聞き合はしてみた。そして私が調べ上げたのは、次のやうな事であつた。

パンテレイ・エレメーイチ・チェルトブハーノフは、この近在一帯にかけて、險呑な分からずやで、またと類のない高慢な喧嘩買ひといふ評判をとつてゐた。ほんの僅かなあひだ軍隊で勤めてゐ

たが、『面白からぬ事情』があつて、俗に『まだお玉杓子で蛙になり切らぬ』と云はれてゐる官等のまゝ職を退いた。由緒を亂せば、嘗ては長者と云はれた古い家柄の生まれで、先祖たちは曠野地方の習慣で派手に暮らしてゐた。つまり、招いた客であらうとなからうと來る人ごとに款待して、へと／＼になるまで御馳走攻めにし、客の件をして來た馭者には飼料として燕麦を一斗づつも渡しやり、家には音楽師や、歌うたひや、道化や、犬をふんだんに抱へ、祝ひ日には村中の百姓に酒や麥酒を振舞ひ、冬になると、自分の馬に頑丈な大型の馬車を牽かせて莫斯科へ出かけた。が、時によると何箇月も一文なしで暮らして、自分の所で獲れるものだけで済ます事もあつた。パンテレイ・エレメーイチの父親が遺産を相續した時には、身代が大分左前になつてゐた。ところが、當人も負けず劣らず盛んに面白をかしく暮らしたので、臨終のとき一人息子のパンテレイに遺してやつたのは、もう抵當に入つてゐるベスソーノフといふ小さな村だけであつた。そこには男三十五人、女七十六人の百姓が地附きになつてゐた。その他コロブロードワの荒地にある役に立たない十四町歩の地所があつたけれど、この地所についてゐる農奴といふものは、故人の書類を調べても別になささうであつた。正直なところ、先代は寔に奇妙な遣り方で身上を潰した。それは、『自分流儀の算盤』の取り方が反つて身の仇となつたのである。彼の考へによると、貴族は商人や町人、又は

これと似たり寄つたりの『強盗ども』(これは彼の云ひ草なので)に係り合ふべきでないといふ譯で、自分の地内にありとあらゆる仕事場や工場を設けたのである。『自分流儀の算盤の方が品もいし、安くもつく。』とよく云ひ云ひした。この破滅の種となるやうな考へ方を、彼は生涯の終りまで捨てなかつた。つまり、そのために微塵してしまつたのである。が、その代り面白い目を散々し盡くした! どんな氣紛れでもやつて見ずには置かなかつた。さまざまな出来ごゝろを起こした中にも、ある時、自分の好み通りに馬鹿げて大きな自家用の箱馬車を作らした事がある。餘り大き過ぎたので、村中の百姓馬を狩り集め、その持ち主にまで手傳はせて、力を集めて一生懸命に曳かしたが、結局、坂道にかゝるが早いか引つくり返つて、ばら／＼になつてしまつた。エレメイ・ルキッチ(バンテレイの父親はエレメイ・ルキッチと云つた)は、この坂道に記念碑を立てさせたが、これしきの事には平氣なものであつた。彼はまた教會を建てようと思ひついた。もちろん獨力で、建築家の力を借りないのである。煉瓦を焼くのに森一つ薪にしてしまひ、縣の中央寺院にでも間に合ひさうな途徹とてつもない土臺を据ゑ、壁をめぐらし、さて圓屋根を造りにかゝつた。ところが、圓屋根は落ちてしまつたので、又やり直すと——又もや崩れ落ちた。彼は三たびやり直したが——圓屋根は三たび壊れた。いかなエレメイ・ルキッチもこれには考へ込んでしまつた。こいつは少々

怪しいぞ……忌々しい魔の祟りがあるに相違ない、と考へて……だしぬけに村中の年取つた農婦を一人残らずぶん撲れと云ひつけた。そこで農婦どもはお仕置きを受けたが——それでも圓屋根はやはり出来上がらなかつた。それから新らしい設計で百姓家の建て直しを始めたが、これも同じく自己流の算盤から出た事なのである。まづ三軒の家を三角形に組合せて、その眞ん中に柱を立て、彩色した椋鳥の巢箱と旗をそれに取りつけた。どうかすると、毎日のやうに新らしい計畫を考へ出す事があつた。牛蒡でスープを作つて見るかと思へば、馬の尻尾を切つて下男どもの帽子を拵へてみたり、蓆いし麻を亞麻の代用品にしようと思つたり、豚の餌かに菌かを使はうと考へついたりした……一度なんかは『莫斯科報知』で、ハリコフ地主フリヤーク・フルビョールスキイの寄稿した農民生活に於ける道徳の必要といふ論文を読んで、早速その翌る日百姓一同に、ハリコフの地主の書いた論文を即刻語記するやうに布れ出した。百姓らは論文を語記した。そこで主人は、その中に書いてあることが分かるかと訊ねたものである。すると番頭は、これが分からないでどうしませう! と答へた。又それと同じ頃に、秩序を保つ必要と、自分流儀の算盤から割り出して、家來どもを一人残さず勘定した上、銘々の番號を襟に縫ひつけろと命令した。御主人に出逢ふ度に、誰でも有りたけの聲を出して『何號であります!』と嗚ると、旦那は優しい聲で『よし、行け。』といふ譯なので。

ところが、秩序を保ち、自分流儀の算盤がとれたにも拘らず、エレメイ・ルキッチはだん／＼二進も三進もゆかぬ破目になつた。まづ手始めとして持ち村を抵當に入れ出したが、やがて賣りに出すやうになつた。一番後に残つた先祖傳來の巢ともいふべき村は、立ち腐れの教會と一緒にもう個人でなく政府の手で競賣に附されたが、いゝ按配にエレメイ・ルキッチの存命中ではなく——彼もこの打撃には堪へ切れなかつたに相違ない——死んでから二週間たつた時のことである。彼は運よくも自分の家の自分の寢床で、家の子に取り巻かれながら、お抱へ醫者に看護られて死ぬことが出来た。けれど不運なパンテレイの手には、やつとベスソーノフ村が入つたばかりである。

パンテレイが父病氣と知つたのはもう軍務についてからで、前に述べた『面白からぬ出来事』の持ち上がつてゐる眞つ最中であつた。彼は漸くやつて十九になつたばかりであつた。極く幼い時から自分の生まれた家を離れたことがなく、極めて人がいゝけれど薄のろの母親ワシリサ・ワシリエヅナの手で、我が儘なお坊ちやんに育つて来た。彼の教育に携はつたのは母親だけで、エレメイ・ルキッチは一流の工夫に急がしくて、それどころではなかつたのである。尤も彼はある時、息子がPを『アルツイ』と發音したといふので、自ら手を下して折檻した事があるけれど、その日エレメイ・ルキッチは秘蔵の犬が樹に頭をぶつゝけて死んだので、人知れず深い悲しみに沈んでゐた

のである。とは云ふものの、ワシリサ・ワシリエヅナが愛児パンテレイの教育のために拂つた苦心も、たゞやきもきと無駄骨を折つただけのことであつた。彼女は苦心慘愴して、ピルコフ某といふ、アルサス生まれの退職軍人を家庭教師に雇つたが、死ぬまでこの男の思惑を憚つて、戦々兢兢々としてゐた。「さあ、あの人が暇をくれと云つたらどうしよう。——私はもうお終ひだ！誰に逢はず顔があらう？どこで代りの先生を見付けよう？あれだけの人でも、やつとここで近處の邸から引つこぬいたんだもの！」と考へてゐた。ピルコフは目はしの利く男であつたので、忽ち自分の独占的な位置を利用して、へゞれけになるまで酔ひつぶれ、朝から晩まで寢通してゐた。『學業の課程』を終へた後、パンテレイは軍務についた。ワシリサ・ワシリエヅナはもうこの世にゐなかつた。彼女はこの重大な出来事の起る半年前に、恐ろしさの餘りこの世を去つてしまつた。熊に乗つた白い人を夢に見たのである。エレメイ・ルキッチもやがて配偶の後を追つて行つた。

パンテレイは父の健康が勝れぬといふ報せを貰ふや否や、取るものも取り敢ず駈けつけたが、父親はもうこの世の人ではなかつた。けれど大身代の相續人と思ひきや、裸一貫の貧乏人になつたと知れた時、この孝行息子の驚きはどんなであつたらう！大抵の人なら、かういふ急激な變化に堪

へ切れるものではない。パンテレイは急に粗暴なきびしい人間になつた。甘やかされてむきになりやすい性質ではあつたが、正直で、気が大きくなって、親切な男であつたのに、生まれ變つたやうに傲慢な怒りつばい人間になつて、近所交際もやめてしまつた——金持ちに對しては引け目を感じ、貧乏な連中は鼻の先きであしらつた。そして誰に向かつても途方もなく横柄にふるまひ、土地の官憲に對してさへも遠慮しなかつた。「俺は由緒の深い貴族だぞ」といふ腹なのであつた。一度などは、村の警部が帽子を被つたまゝ彼の部屋へ入つて來たと云つて、危く拳銃で撃ち殺さなければかりであつた。無論、當局の方でもやはり甘い顔をしなないで、機會ある毎に思ひ知らせるやうにしてゐた。とは云ふものの、幾らか彼を怖がつてもゐた。なにしろ恐ろしい疍癩持ちで、一言目にはすぐ決闘を申し込むからである。ちよつとでも自分の意見に反對されると、チェルトブハーノフの眼は怪しく動き出して、聲が途切れ途切れになる……「あゝ、わ、わ、わ、わ、」と彼は急ぎこんで、「忌々しい、どうなとなれ……」と、今にも喰らひ付きさうになる！ その上になほ生一本な人間で、曖昧な事件には一切かゝり合つたことがない。もちろん、誰一人彼を訪ねて行く者はなかつた……けれど、さういふ事はいろ／＼あるにもせよ、彼は善良な心の持ち主で、自己流のものではあるけれど、偉大なところさへ有つてゐた、不公平や壓制は他人事でも我慢できなかつた。自分の

百姓のためには、それこそ金城鐵壁であつた。「なんだと？」と彼は自分の頭を猛烈な勢ひで叩きながら、云ふのである。「俺のうちの者に手を出すつもりか、俺のうちの者に？ そんな事をそれたら、チェルトブハーノフの男が立たぬわい……」

チーホン・イワイヌイチ・ネドビュースキンは、パンテレイ・エレメーイチのやうに自分の門閥を自慢するわけにゆかなかつた。父は郷土の出で、四十年間も勤めたおかげで、やつと貴族の仲間入りが出来たのである。父のネドビュースキン氏は、まるで個人的な憎しみに追ひ廻されてでもゐるやうに、遠慮會釋なく不幸にとり憑かれてゐるといつたやうな人間であつた。生まれ落ちてから死ぬまで丸六十年の間、この氣の毒な男は、下つ端の人間に付きものありとあらゆる貧苦、疾病、災難と闘ひ通した。氷の上に抛り出された魚のやうに跳きつゞけ、寢食を忘れてべこ／＼お辭儀をしたり、駈けずり廻つたりした揚句、情氣かへつてくよく／＼しながら、一コペイカ二コペイカの事にも心を惱まし、勤めの方は全くの「濡衣」で誠首になり、揚句の果ては、自分は固より子供らのためにも、その日の糧に困らぬだけのものを蓄へる暇もなく、屋根裏か穴藏か、そんな所で死んでしまつた。運命はまるで狩り場の兎のやうに、へと／＼になるまで彼を追ひ立てたのである。彼は善良で正直な人間であつたが、賄賂はとつてゐた——しかし、額は十コペイカから二ルーブリ



までの間である。ネドビュースキンは瘦せた肺病やみの細君があつた。子供らもゐたが、好い按配にみんなばた／＼と死んでしまつて、たゞチーホンと娘のミドロドーラだけが残つた。この娘は倅名を『店屋のお洒落さん』と云はれてゐたが、いろ／＼悲しくも可笑しい経緯があつた後に、廢業した辯護士の所へ嫁入りした。父のネドビュースキンはまだ存命中に、息子のチーホンを或る役所の臨時雇ひとしてうまく扱ひこんでやつた。けれど、チーホンは父親が亡くなつてから間もなく辭職してしまつた。年中絶え間のない心配事や、寒さと餓ゑを相手の惱ましい闘ひや、母親のしよんぼりと氣落ちした様子や、父親のあくせくとしては落膽する有様や、家主や店商人の不慮な居催促や、さういつたやうな毎日の絶え間のない辛勞辛苦が、チーホンを又と類のない臆病者にしてしまつた。上役の姿をちらと見たばかりで、捕まへられた小鳥のやうに慄へ戦ひて、頭がぼつとなつてしまふ。で、彼は職を辭してしまつた。冷靜なやうではあるが嘲弄好きでもあるらしい自然は、當人の社會上の位置や資力には一切無頓着で、様々な能力や傾向を人に授けるものである。自然は持ち前の細心な愛情をもつて、腰辨の息子のチーホンを、物に感じ易い、懶惰な、氣の優しい、感受性の發達した人間に——たゞ享樂のみに適する、嗅覺と味覺の並み外れて鋭い人間にでつち上げた……でつち上げて、入念に仕上げまでしながら、この作品が酸っぱい甘藍と腐りかけた魚

を食べて大きくなつて行くのに、素知らぬ顔をしてゐた。さて、この作品は成長し切つて、所謂『生活』を始めたのである。自然の翻弄が始まつた。父親のネドビュースキンを絶え間もなく苛めた運命は、又もや息子に手を伸ばした。どうやら味をしめたらしいのだ。しかし、チーホンに對する遣口は別であつた。運命は彼を苦しめようとしないうで、娯物にしたのである。運命は一度も彼を絶望といふところまで追ひやつた事はなく、不面目な飢ゑの苦痛を嘗めさせもしなかつたが、その代り露西亞全國をエリーキイ・ウスチュークの端からツァリョ・コクシャイスクに到るまで引つ張り廻し、それからそれへと卑しい仕事や滑稽な役割りを勤めさせた。時には口喧しい疥癩もちで慈善家の奥様の所へ『家事取締り』として住み込ませたり、時には金持ちで吝坊の商人の家に居候さしたり、それかと思へば、英國風に頭を刈り込んだ出目金の旦那の家で帳場主任の位置につかせたこともあれば、或ひは犬好きの銃獵家のところで半ば家令、半ば道化役を勤めさせたこともある……一と口に云へば、運命は可哀さうなチーホンに、下積み生活の苦い毒盃を、ちひり／＼と最後の一滴まで飲み乾させたのである。彼は一生の間に有閑貴族の惡どい氣まぐれや、寢呆け氣分の意地悪な退屈さまじのために、どれだけ辛いお勤めをしたか知れない……腹に足るだけ彼を翻りものにした大勢の客に『もうよろしい』と云はれて、自分の部屋へ引き下がり、やつと獨りきりにな

ると、恥づかしさに顔を眞つ赤にして、眼に冷たい絶望の涙を浮かべながら、明日こそはそつとこの家を逃げ出して、町で一か八かの運試しをしよう、たとひ筆生の位置なりとも見つけ出さう、それも駄目なら、いつそ一と思ひに往來で野垂れ死しよう、幾度心に誓つたか知れない。けれど、第一には神様からそれだけの力を授かつてゐなかつたし、第二には臆病に取り憑かれてゐたし、また第三にはどうしたらいい就職が見つかるか、誰に頼んだらいいか、分からなかつたのである。「とてもそんな就職を廻してはくれまい。」と不幸な男は寢床の中で輾轉反側しながら、かく呟くのであつた。「とても廻してはくれまい！」かうして次の日になると、また從順おとよしくいやなお勤めを始める。その上に、よく氣のつく造化の神でさへも、御機嫌とりの商賣になくて叶はぬ才能や天稟を、ほんの罌粟粒ほども授けてやらなかつたので、彼の立場は尙のこと慘憺たるものである。例へば熊の毛皮外套を裏返しに着て、ぶつ倒れるまで踊ることも出来なければ、長い鞭がすぐ耳許でびし／＼鳴るのを聞きながら、輕口を叩いたり、お愛想を云つたりする術も知らなかつた。彼は時によると、氷點下二十度の寒さに素裸で突き出されて、風邪を引いた事もあつた。彼の胃の腑は、インキやその他の異物を混ぜた酒だの、細かく刻んで酢をかけた蠅取り茸や、濕氣茸しつげきなどを消化するやうには出来てゐなかつた。もし彼の最後の恩人とも云ふべき成金の買ひ占め商人が、ふと上機

嫌のとき遺言狀へ「ジョーチャ（即ちチーホン）・ネドビュースキんに拙者の正當に取得せるベスセレンヂェフカ村及び一切の附屬地を、子々孫々の末までも永久の所有として讓渡するものなり」と氣紛れに書き込まなかつたなら、チーホンの身の上はどういふ事になつたか見當もつかない位である。それから二三日して、この恩人は鱈鮫のスープを喫べてゐる中に卒中で死んでしまつた。忽ち大騒ぎになつて、裁判所から來た役人が然るべく財産に封印をした。親族が集まつて、遺言狀を開封して讀み上げた。それから、ネドビュースキンを招んで來いといふ事になり、ネドビュースキンの顔を出した。集まつた人々の大部分は、チーホン・イワイイチが恩人の傍でどんなお役目を勤めてゐたか知つてゐたので、彼が現はれると共に、耳を聳せんばかりの叫び聲と、冷かし半分の祝辭が浴びせかけられた。「地主様だ、ほら、あれが新しい地主様だ！」と他の相續人達が叫んだ。「これこそ、なんだ、」と馴れ者で皮肉屋として知られてゐる一人の男がすかさず云つた。「これこそ、全く、云つてみれば……これこそ本當に……その……所謂……その……押しも押されぬ相續人だ。」すると、一同はぶつと噴き出してしまつた。ネドビュースキンは何時までもこの幸福を信じようとしなかつた。遺言狀を見せられると、彼は眞つ赤になつて眼を瞑り、兩手を振り廻し始めたと思ふと、まるで堰でも切つたやうに泣き出した。一座の笑ひ聲は鼎の湧くやうな騒ぎに變つて

しまった。ベスセレンチェフカの村には、みんなで二十一人の農奴しか附いてゐなかつたので、誰もそんなにひどく惜しがる者はなかつた。してみれば、どうしてこの機會を利用して一と娯たのみなくさまずにはゐられよう？ 唯一人ベテルブルグから來た相續人で、希臘風の鼻とこの上もなく上品な顔付きをしたロスチスラフ・アダムイチ・シュトッペリといふ豪さうな男が、我慢し切れないで、横歩きにネドビュースキンの傍へ行き、さも横柄らしく肩越しに彼を見下ろした。「不躱たがながら、あんたはお見受けしたところ。」と見下げたやうな調子で無造作に云ひ出した。「あんたは故人フォードル・フォードルイチの所で、云はば御機嫌とりのために奉公してゐられたやうですな？」ベテルブルグから來た紳士は、やり切れない程すつきりした齒切れのいゝ几帳面な言葉遣ひをした。興奮して夢中になつたネドビュースキンは、見知らぬ紳士の言葉がよく聞き分けられなかつたが、他の連中は一時に鳴りを潜めてしまつた。例の皮肉やお情けににやりと笑つた。シュトッペリ氏は揉手をしながら、同じ問ひを繰り返した。ネドビュースキンは吃驚りして眼をあげ、ぼかんと口を開いた。ロスチスラフ・アダムイチは毒のある表情で眼を細めた。

「おめでたう、あんた、おめでたう。」と彼は續けた。「尤も、皆が皆、その、こんなお勤めをして、その日その日の糧を、か・せ・ぎ出さうと思ふ譯でもないがね。然し *De kusibus non est*

*disputandum* つまり、誰でもそれ／＼の趣味をもつてゐるから……さうぢやありませんか？」

誰か後ろの列に坐つてゐた者が、吃驚びっくりりしたのと嬉しませられたので、早口にぶしつけな感嘆の聲を上げた。

「一つ伺ひますが、」一座の微笑に一そう調子づいたシュトッペリ氏が、すかさず口を入れた。「一體どういふ特別な腕があつてこんな幸福を拾ひ上げたんです？ いや、恥づかしがる事はない。云つて御覧なさい。こゝにゐる者はみんな、云はゞ内輪の者 *en famille* だからね、なんと皆さん、さうぢやありませんか、こゝにゐる者は *en famille* でせう？」

ロスチスラフ・アダムイチが偶然にこの質問を向けた相續人は、生憎と佛蘭西語を知らなかつたので、たゞ賛成の意を表するやうな、軽い咳拂ひで誤魔化した。その代り、もう一人の相續人で額に黄色い斑点のある青年が急いで、「ウイ、ウイ、(えい) 無論ですとも。」と相槌を打つた。

「恐らく」とシュトッペリ氏は又云ひ出した。「あんたは逆立ちをして歩けるでせうな、足をその、上へ上げて？」

ネドビュースキンはさも辛さうに四邊を見廻した。どの顔もどの顔も意地の悪い微笑を浮かべ、眼は笑ひ泣きの涙に潤んでゐた。

「それとも、雌鶏の鳴き真似がお出来ですか？」

崩れるやうな笑ひ聲が一座に擴がつたが、すぐにひつそりして、次はどうなるかと待ち構へた。

「それとも、鼻の上に……」

「止めろ！」と出し抜けに鋭い銅鑼聲がロスチスラフ・アダムイチを遮つた。「弱い者いぢめをしてよく恥づかしくない事だ！」

一同は振り返つた。戸口の所にチュルトブハーノフが立つてゐた。亡くなつた買ひ占め商人の四等親の甥にあたるところから、彼もこの親族會議に招待を受けたのだが、遺言狀を讀んでゐる間は、何時もの癖でお高くとまつて、一座の中に交じらなかつたのである。

「止めろ！」傲然と頭を反らして、彼はまた繰り返した。

シュトッペリ氏は素早く振り返つて見ると、見すばらしい身なりをした風采の上がない男だつたので、小聲で隣りの人に訊ねてみた。(大事をとるといふ事は、どんな時でも悪くないものである。)

「あれは誰ですね？」

「チュルトブハーノフと云つて、大した代物ぢやありません。」と、相手は彼に耳打ちした。

ロスチスラフ・アダムイチは横風に構へた。

「一體あなたは誰です、そんな指圖がましい口をきいて？」と、彼は鼻にかゝつた聲で云つて眼を細めた。「一體あんたはどういふ代物なのか、一つ訊かして貰ひませう。」

チュルトブハーノフは、火薬に火の粉が落ちたやうに忽ちかつとなつた。憤怒のあまり息が切れ、物が云へなかつた。

「ず、ず、ず」とまるで首でも締められたやうに異様な聲を出したが、とたんに雷霆のごとき叫びを上げた。「俺が誰かつて？ この俺が？ 俺はパンテレイ・チュルトブハーノフだ。先祖代からの貴族だ。先々代は皇帝陛下にお仕へしたくらゐだぞ。さういふ貴様こそ何者だ？」

ロスチスラフ・アダムイチは眞つ蒼になつて、たぢ／＼と後ろに退いた。これほど手強く撥ね返して來ようとは思ひもかけなかつたのである。

「俺のことを代物だつて、俺のことを、俺のことを代物だつて……おゝ、おゝ、おゝ……」

チュルトブハーノフは恐ろしい勢ひで前へ飛び出した。シュトッペリはすつかりまごついて、跳びのいた。客はみんなが／＼で疝癩持ちの地主を宥めに行つた。

「決闘だ、決闘だ、今すぐ、ハンカチを使つてやる、あの決闘だ！」と、パンテレイは猛り狂つて

喚き立てた。「それが厭なら俺に謝罪れ、それから、あれにも……」

「あやまりなさい、あやまりなさい。」と、シュトッペリの周りに集まつた相續人たちは、はらはらしながら嗔いた。「何しろあれは氣狂ひのやうな男だから——人殺しさへしかねませんよ。」

「御免なさい。御免なさい、つい知らなかつたものですから。」と、シュトッペリはしどろもどろに云つた。「つい知らなかつたので。」

「あれにも謝罪れ！」と、腹の蟲の納まりきらないパンテイレは嗷鳴つた。

「あなたもどうかお赦しを。」とロスチスラフ・アダームイチは、徳にでもかゝつたやうに慄へてゐるネドビュースキンの方へ向いて、云ひ添へた。

チュルトプ・ハーノフは漸く落ちて、チーホン・イワーヌイチの傍へ寄り、その手をとつて不敵な眼付きで四邊を見廻したが、誰一人として彼を正面に見る者がなかつたので、正當な手段で手に入れたベスセレンチェフカ村の新しい地主と相携へて、深い沈黙の中を勝ち誇つたやうに部屋の外へ出た。

\* 一枚のハンカチの下に兩人の拳銃を持つた手を隠し撃ち合ふ決闘の方法、所謂刺し違へに類する。

(譯者)

その日からといふもの、二人はもう片時も離れなかつた(ベスセレンチェフカ村はベスソーノフから僅か八露里しか離れてゐなかつた)。ネドビュースキンの限りない感謝の念は、間もなく盲目的な敬虔の情に變つた。氣が弱くて、柔和な性質だが、餘り純潔とは云へないチーホンは、怖い物なしの無慾恬淡なパンテイレの前に三拜九拜してゐた。「大したものだ、」と彼は時をり心の中で考へた。「知事様と話をして、おまけにその顔をもっと見るなんて……ほんとに豪いこつた……まともに見るんだからな！」

彼は不思議な位、頭がぼつとする位、パンテイレに感心しきつて、彼を非凡な賢い學者だと思ひ込んでゐた。それもその筈で、假令チュルトプ・ハーノフの教育が、どんなにお粗末なものであつたにせよ、それでもチーホンの教育に較べたら、燦然と輝いてゐるやうに思はれた。チュルトプ・ハーノフは實際、露西亞語で書いたものを餘り讀まなかつたし、佛蘭西語の知識も怪しげなものであつた。その怪しげさ加減といつたら、或とき瑞西人の家庭教師が『Vous parlez français, monsieur?』(あなたは佛蘭西語を)とお話しになりますか』と訊かれた時、『私、わかりません。』と答へて、暫く考へた後『駄目』と云ひ足したやうな始末である。が、それにしても、彼は機智縦横の作者ヴォルテールがこの世にゐたといふ事も知つてゐれば、普魯西のフリードリッヒ大王が軍事の方面で頭角を現はした事も覺えて

ゐた。露西亞の文學者では<sup>\*</sup>ヂェルジャーキンを崇拜し、また<sup>\*</sup>マルリンスキイを愛して秘藏の牡犬にアマラート・ベークといふ名をつけた位である。

この二人の仲間に初めて出逢つてから、四五日経つて、私はベスソーノヲ村のパンテレイ・エレメイチを訪ねて行つた。彼の小さな家は遠くの方から見えてゐた。それは村から半露里ばかり離れた、樹も何も生えてゐない所謂「吹き晒し」の場所に、丁度畑に下りた兀鷹のやうな恰好で建つてゐた。チェルトブハーノフの邸といふのは、離れと厩と納屋と湯殿と、大小様々な古ぼけた小舎が四棟あるだけ、それがめい／＼自分勝手に離ればなれに建つてゐて、塀も廻らしてなければ門らしいものも見當たらなかつた。私の馭者は怪訝さうな様子で、半ば腐つて塵に埋もれた井戸の傍に馬を停めた。納屋の脇では、瘦せたむく毛のボルゾイ種の仔犬が何匹か、死んだ馬を食ひ裂いてゐる。恐らくオルバ・サンの死骸であらう。その中の一匹が血まみれの鼻面をあげて、氣忙しさうな吠え聲を立てたが、すぐに又あらはになつた肋骨に嚙りついた。馬の傍らには、年ごろ十七ばかりの、むくんで黄色い顔をした男の子が立つてゐた。コサツク風の<sup>ふなり</sup>服装をして裸足である。少年は預

<sup>\*</sup> 偽古典派の代表的詩人（一七四三—一八一六年）。（譯者）  
<sup>\*\*</sup> 有名な通俗小説の作者、「アマラート・ベーク」はその代表作。（同）

けられた犬を、勿體らしい様子で見守りながら、時々、餘り食ひ意地の張つたのに鞭をくらはしてゐた。

「旦那様は家かね？」と私は訊ねた。

「どうだか知らない！」と少年は答へた。「戸を叩いてごらん。」

私は馬車から飛び下りて、離れの玄關口へ行つた。

チェルトブハーノフ氏の住家はいと惨めな有様であつた。丸太は黝ずんで「腹」を外側へ突き出してゐるし、煙突は崩れ、家の隅々は蒸つて、腐り氣味になり、少々ばかり歪んでゐる。どんよりと青みがかつた灰色の小窓が、もしや／＼した藁屋根の垂れ下がつた庇のかけから、なんとも云へない曇めつ面をして覗いてゐる。年とつたあばずれ女などが、よくこんな顔付きをしてゐるものだ。私は戸を敲いた。誰もそれに應へる者が無い。けれど戸の向かうで、鋭い調子で云つてゐる妙な言葉が聞こえた。

「A、B、V、え、こいつ、馬鹿め、」と嗚れた聲で云つてゐる。「A、B、V、G……それぢや駄目だ！ G、D、E！ E！……ちよつ、こいつ、馬鹿め！」

<sup>\*</sup> 露西亞アルファベットの古い名稱。（譯者）

私はもう一度戸を敲いた。

すると同じ聲が、「おはひり——誰だね……」と叫んだ。

私はがらんとした小さな控室へ入った。すると、開け放した扉の向かうに主人のチェルトブハーノフの姿が見えた。脂じみたブハラ織の部屋着を着て、広いだぶ／＼のズボンを穿き、赤い椀形の帽子を被つて椅子に腰をかけたまゝ、左手で若い老犬の鼻面を締めつけ、左手には一と切れの麵麩を持つて、犬の鼻の眞上にさし出してゐる。

「あゝ！」席を起たうともせずに、威厳を帯びた調子で云つた。「ようこそお訪ね下すつた。まあどうぞおかけ下さい。いま私はこの通り、エンゾールに藝を仕込んで居りますので……チーホン・イワーヌイチ、」と、彼は聲を高めて云ひたした。「こつちへ来てくれんか。お客様の越しだ。」

「只今、只今、」と、隣りの部屋からチーホン・イワーヌイチが答へた。「マーシヤ、ネクタイを出しておくれ。」

チェルトブハーノフは又エンゾールの方を向かつて、麵麩の切れを鼻の上に載せた。私はあたりを見廻した。部屋の中には長短まち／＼の脚が十三本ついた、伸縮自在な反つくり返つた卓と、毀れかゝつた四つの籐椅子のほか、家具類といつては一つもなかつた。ずつと前に白く上塗りしたば

かりで、今は星模様みたいな青い斑点の一面についた壁は、大分あちこち剥げ落ちてゐる。窓と窓の間には、マホガニー擬ひの大きな縁に嵌められた、ひゞだらけの、どんよりした鏡がかゝつてゐる。部屋の隅々には長いパイプや鐵砲が立てかけてある。天井からは太い眞つ黒な蜘蛛の絲がたれてゐる。

「A、B、V、G、D」と、チェルトブハーノフはゆつくり云つたが、出し抜けに物凄いな聲で叫りつけた。「Eだ！ Eだ！ Eだ！……なんて馬鹿の畜生だ……Eだといふのに！」

けれど、不運な老犬はたゞぶる／＼慄へるばかりで、口を開けようとしなかつた。悄然と尻尾を捲きこんで、相變らずちつと坐つたまゝ、鼻面を歪めて、げつそりしたやうに、眼をばち／＼させたり、細く閉ぢたりしてゐたが、その様子は、「どうも仕方がございません。御存分になすつて！」と獨り言でも云つてゐるやうな按配であつた。

「さあ、食べる、そら！ 取れ！」と、我の強い地主は繰り返した。

「あなたが嚇しつけておしまひなすつたからなんですよ。」と、私が口を入れた。

「ぢや、こんなもの逐ひ出してしまへ！」

彼は犬を軽く足で蹴つた。不運な犬はそつと起き上がつて、麵麩を鼻から振り落とし、如何

にも無念さうな様子で、爪立ちでもして歩くやうに、玄關の方へ行つてしまつた。それも無理からぬ事だ、知らない人が初めて訪ねて来たのに、こんな取り扱ひをされるとは。

次の間へ通ずる戸が用心深さうにぎいと軋んだと思ふと、ネドビューースキン氏が愛想よく小腰をかゞめ、にこ／＼しながら入つて来た。

私は立ち上がつて、會釋をした。

「どうぞお立ちにならないで、どうぞその儘に。」と、彼は覺束ない調子で云つた。

私たちは腰を下ろした。チュルトプハーノフは次の間へ出て行つた。

「あなたは五分前からこの里へお越しになりましたので？」と、ネドビューースキンは嗜みよく手を口にあてながら咳拂ひをして、お體裁に指を唇に附けたまゝ、柔かみのある聲で云ひ出した。

「もう足掛け二箇月になります。」

「はゝあ、なるほど。」

私たちは暫く無言であつた。

「こゝのところ、よいお天氣が續きまして、」と、ネドビューースキンは言葉を續け、まるで天氣がいゝのは私のお蔭だとも云ふやうに、有難さうに私を眺めた。「穀類は、なんと申しますか、素

晴らしい出来で。」

私は同意のしるしに軽く頭を下げた。また暫く沈黙が續く。

「パントレイ・エレメーイチは、昨日兎を二匹お仕とめになりました。」如何にも話を引き立たせようと思ふらしく、ネドビューースキンは幾らか骨の折れる様子で口を切つた。「さやう、とても大きな兎でございましたよ。」

「チュルトプハーノフさんは、いゝ犬を持つて居られますか？」

「それこそ大したものでございます！」と、ネドビューースキンは我が意を得たり、といふやうに答へた。「まづ縣内でも指折りでせうな（彼は私の方へ身體を摺り寄せた）。それもその筈！ パントレイ・エレメーイチは、さういふお方でございますからね！ なんでも欲しいと思ひになつたら、つまり、なんでもかうとお考へになつたら、みる／＼中にもうちやんと出来上がつて、すべてがずん／＼扱が行んでございますよ。パントレイ・エレメーイチは、遠慮なしに申しますと……」

チュルトプハーノフが部屋へ入つて来た。ネドビューースキンはにつと笑つて口を喋り、  
「いまに御自分でなるほどとお思ひになりますよ。」とでも云ひたげに、眼で彼の方をさして見せた。私は  
ちほは獵の話始めた。



「なんなら、うちの犬をお目にかかせようか？」と、チュルトブハーノフは私に問ひかけて、返事も持たずにカルプを呼んだ。

水色の襟と紋章入りの釦のついた、青い南京木綿の長上衣を着た頑丈な若い衆が入つて来た。

「フォームカにさう云つて、」と、チュルトブハーノフはぶつ切ら棒な調子で云つた。「アムマラートとサイガを連れて来させろ。だが、ちゃんとしておかなくちやいかんぞ、いゝか？」

カルプは口を一杯に開けて、にたりと笑ひ、何ともつかない聲を出したまゝ出て行つた。髪を綺麗に撫でつけて、きちんと引き締まつた身なりをした、長靴姿のフォームカが犬を連れて来た。私は作法を守つて、この馬鹿げた犬どもに見惚れる振りをした（ボルゾイ種は凡て恐ろしく間抜けなのである）。チュルトブハーノフは、アムマラートの鼻の孔を目がけて唾をかけてやつたが、それは犬にとつては一向嬉しくもなさうであつた。ネドビュースキンもアムマラートの尻の方を撫でてやつた。私達はまた雑談を始めた。チュルトブハーノフはだん／＼心がとけて来て、終ひには力んだり、鼻を鳴らしたりしないやうになつた。顔の表情もすっかり一變した。彼は私とネドビュースキンの顔色を窺つたが……

「えゝ、構ふもんか！」と、出し抜けに叫んだ。「何も彼女を獨りぼつちにしておく事はいらん。

「マシーシャ！ おい、マシーシャ！ こつちへ来んか！」

誰やら隣りの部屋でかさこそ動いたが、返事はなかつた。

「マシーシャ、」と、チュルトブハーノフは優しい聲でくり返した。「こつちへお出で、大丈夫、びくびくせんでもいゝよ。」

扉が静かに開いた。と、私の眼には背の高い、すらりとした、チブシイ風の淺黒い顔をして、黄味を帯びた褐色の眼に、樹脂のやうに眞つ黒な髪をした、二十歳ばかりの女の姿が映つた。大きな白い歯が厚ぼつたい眞つ赤な唇のかけに輝いてゐる。身に纏つてゐるのは眞つ白な着物で、襟もとを金のピンで留めた水色のショールが、生粹のチブシイらしい細つそりした手を半ばかくしてゐる。彼女は野育ちの女らしい、おづ／＼したばつの悪さうな様子で、二足ばかり踏み出したと思ふと、立ち止まつてさし俯向いた。

「さあ、御紹介ませう、」と、パンテレイ・エレメーイチが口を切つた。「これは正式の女房といふわけではないが、まあ／＼女房みたいなもので。」

マシーシャはぼつと顔を赧らめて、當惑したやうに微笑んだ。私は普通よりも丁寧に頭を下げた。女はすつかり私の氣に入つてしまつた。小鼻がからりとして半ば透き通るやうに見える細い尖つた

鼻、秀でた眉のきりりとした線、蒼白い、ほんの心持ちこけた頬——すべて彼女の顔の輪廓は、奔放な情熱と、物事に拘はらぬ大膽さを示してゐる。三つ編みにして束ねた髪の下から、広い頸筋に見事な生え下がりが二寸ち並らんでゐた。——種族の血と力の徴しである。

彼女は窓ぎはへ行つて腰を下ろした。私はこのうへ彼女を當惑させたくなかつたので、チュルトプハーノフと話を始めた。マーシヤはそつと首を捻ぢ向けて、上目づかひに偷むやうに、野獸のやうな素早さで私を見はじめた。その眸が蛇の舌のやうにちら／＼する。ネドビュースキンはその傍に腰を下ろして、何やら耳打ちした。彼女は又につこりと笑んだ。微笑みながら、軽く鼻に皺をよせて、上唇を持ち上げたが、そのために、猫ともつかなければ、獅子ともつかない表情が添ふのであつた。

『あゝ、これまさに鳳仙花の實だ。』と、こちらも同じやうに、彼女のしなやかな姿や、瘦せた胸や、ぎくしゃくした素ばしつこい身振りを偷み見ながら、私はかう思つた。

「どうだね、マーシヤ、」と、チュルトプハーノフは問ひかけた。「何か、お客様におもてなしをしなくちやなるまい。おい？」

「うちにジャムがありますわ。」と彼女は答へた。

「そんならジャムを出しなさい。それから序でに火酒もな。あゝさうだ、マーシヤ、」と、後から追つかけるやうに聲をかけた。「ギターも持つて来るんだ。」

「ギターなんかどうして？ わたし、わたし、歌なんかうたはないから。」

「なぜ？」

「氣が向かないんですもの。」

「ちよつ、つま、ん事を、その氣になるさ、もしも……」

「なんですつて？」とマーシヤは急に眉をひそめて問ひ返した。

「もし御所望があつたら。」と、チュルトプハーノフは幾らかてれ氣味で云ひ足した。

「あゝ、さう！」

彼女は出て行つたが、間もなくジャムと火酒を持って引つ返した。そして又もや窓ぎはに腰を下ろした。その顔にはまだ一と筋の小さな皺が見え、双の眉は黄蜂の髭のやうに上がつたり下がつたりしてゐる……讀者諸君、黄蜂がどんな意地の悪い顔をしてゐるか、お目に止められた事がありましか？ 『いや、これは一と暴れられるわい』と私は考へた。話はうまく油が乗らなかつた。ネドビュースキンはすつかり鳴りを潜めて、窮屈さうににや／＼笑つてゐた。チュルトプハーノフは息を

はずませ、眞つ赤な顔をして眼をむき出してゐる。私はもう暇を告げようと思つた！……すると、不意にマーシャが立ち上がつて、いきなりさつと窓をあけ、頭を外に突き出して、通りかゝつた百姓女をさも腹立たしげに、『アクシーニヤ！』と呼びかけた。百姓女はぎくつとして振り向かうとした途端に、思はず足が滑つて、どうとばかり地びたに倒れた。マーシャは反りかへつて、聲高かから／＼と笑ひ出した。チェルトブハーノフもそれにつれて笑ひ出した。ネドビュースキンは夢中になつて嬉しうに金切り聲を立てた。私たちはみんな身慄ひした。まさに電光一閃、夕立ちが襲つて来た形だ……鬱してゐた空気が爽かになる。

三十分ばかり経つた時には、私たちはまるで別人の親があつた。みんな子供のやうに喋つたり、巫山戯たりしてゐた。マーシャは誰よりも一番はしやいだ、チェルトブハーノフはまるで喰ひつきたさうな眼つきで、女から眸を離さない。彼女の顔は蒼ざめて、鼻の孔は擴がり、眸は同時に燃え立つたり暗くなつたりする。野育ちの女が、すつかり本性を現はしたのだ。ネドビュースキンは雌鴨が雌鴨を追ひ廻すやうに、太い短い足で、よち／＼とその後から跋をひいて歩く。エンゾールまでが玄關に取りつけた臺の下から這ひ出し、園の上に立つて暫く私達を眺めてゐたが、不意に跳ね上がりながら吠え出した。マーシャは次の間へ小鳥のやうに飛び出したと思ふと、ギタアを持つて來

て、肩からショールをかなぐり捨て、素早く腰を下ろすと、頭をあげて、チブシイの歌をうたひ出した。その聲はかすかにひびの入つた硝子の鈴のやうに、じん／＼といふ響きを立てて打ち懐へ、急に激した調子になるかと思ふと、微かに低く消えて……心は楽しく、また空恐ろしくなつて來る。『あゝ、語れ、火の言葉！……』チェルトブハーノフは到頭踊り出した。ネドビュースキンは小刻みに足を動かして、時々足拍子を入れる。マーシャは火に焙られる白樺の皮のやうに、身體を前後左右に振り始めた。細い指は勢ひよくギタアの上を走り、淺黒い頸筋は二重にまかれた琥珀の首飾りの下で、靜かにふくらむ。かと思ふと、急に歌を止めて、ぐつたりと腰を落とし、さもいややさうに絃をかき鳴らす。チェルトブハーノフは踊り止めて、肩だけ軽く動かしながら、一つ所で足踏みをする。ネドビュースキンは瀬戸物の支那人形のやうに頭を振つてゐる。けれど、マーシャは再び身體をしやんと持ち直して、胸を張り、氣狂ひのやうに歌ひ出す。するとチェルトブハーノフは、又もや腰が地につきさうな程、低く蹲んだり、天井に届くくらゐ躍り上がったたり、獨樂のやうにくる／＼廻つたりしながら、『元氣よく！』と叫ぶのであつた。……

「元氣よく、元氣よく、元氣よく、元氣よく！」と、ネドビュースキンは早口に相槌を打つ。

その晩、おそく私はベスソーノヲを引き上げた……

## チュルトブハーノフの最後

私が訪ねてから二年ばかり経つて、パンテレイ・エレメーイチの身に災難が始まつた。——まさに災難である。不満、失敗、さては不運さへも、それまで幾度か彼の身に振りかゝつたことがあるけれど、そんな事は氣にも留めないで、彼は相變らず「王侯然とふるまつて來た」のである。ところが、先づ最初に彼を襲つた災難は、何よりも一番身にしみるものであつた。マーシャが彼を離れて行つたのである。

あれほどよく慣れ切つてゐたらしい彼の家を、どういふわけで見捨てる氣になつたか、といふのは——説明がしにくい。チュルトブハーノフは最後の日まで、綽名をヤッフといふ近所の若い退職槍騎兵大尉がマーシャの愛心の原因だと、ひたすら思ひ込んでゐた。パンテレイ・エレメーイチに云はせると、この男の取柄は、たゞのべつ口髭を捻つたり、矢鱈にこて／＼ボマードをつけたり、

勿體らしい薄笑ひをする位のものでつた。しかしこの場合、マーシャの血管の中に流れてゐるチブシイらしい放浪の血が、主に業をなしたので考へなければならぬ。いづれにせよ、よく晴れた夏の晩に、マーシャは少しばかりの身のまはりの物を、小さな風呂敷包みにして、チュルトブハーノフの家を出てしまつたのである。

その前三日ばかりといふもの、彼女は傷を負つた狐のやうに身を縮めて、壁にびつたり寄り添つたまゝ、隅つこにちつと坐つてゐた。——誰に一言、言葉をかけるでもなく——たゞ眼をきよときよと動かすばかりで、何やら物思ひに沈んでゐた。そして眉を吊り上げたり、微かに齒を剥き出したり、着物でも直すやうに両手を動かしたりしてゐた。こんな「氣分」は前にも時々、彼女を襲つたものだけれど、長く続いたことはいざなかつた。チュルトブハーノフはそれを承知してゐたので、自分でも心配しなければ、マーシャにも構はず打つ棄つておいた。ところが、獵犬番の言葉によると、たつた二匹残つた獵犬が「死ねた」ので、犬小屋へ行つて歸つて來た時、ばつたり女中に出會した。女中は慄へ聲で、マリヤ・アキンフィエヅナが且那樣によろしく、どうぞ御機嫌よくお暮らしたさるやうお申しつけになり、自分は今一度と歸らないから、と云ひ残した由を言上した。チュルトブハーノフはその場で二度ばかりぐる／＼廻つて、しや嘎れた唸り聲を上げたかと思

ふと、すぐさま家出女の後を追つて行つた。――序でにピストルまでも引つ摺んで。

彼は自分の家から二露里ばかり隔てた、郡役所のある町へ通ずる街道筋の、白樺林のわきで追つた。太陽は地平線の上に低くかゝつて、あたりは一面にばつと真紅の色に染め出された。――木立ちも、草も、大地も！

「ヤッフのとこへ行くんだな！ ヤッフのとこへ！」と、チュルトブハーノフはマーシャの姿を尋ねるが早いか、唸るやうに云つた。「ヤッフのとこへ行くんだ！」殆んど一歩毎に躓き躓き、マーシャの傍へ駆けよりながら、彼はかう繰り返した。

マーシャは足をとめて彼の方へ顔を振りむけた。光りを背にして立つてゐたので、黒い木で刻まれた像のやうに全身まっ黒に見えた。たゞ白眼ばかりが銀色の扁桃のやうにくつきりと際立つてゐたが、眼そのもの――瞳――は、なほ一層黒く見えた。

彼女は風呂敷包みをわきの方へ抛り出して、腕組みをした。

「ヤッフのとこへ行く気だな、腐れ女め！」と、チュルトブハーノフは繰り返して、女の肩を掴まへようとした――けれど、相手の眼と視線が出逢ふと、氣勢を削がれて、その場にもち／＼してしまつた。

「私はヤッフさんのとこへなんか行きやしません、パンテレイ・エレメイイチ、」と、彼女は落ちつき拂つて靜かに答へた。「たゞね、あなたとはもう一緒に暮らされないんですの。」

「どうして一緒に暮らされないんだ？ それは何故だ？ 俺が何かお前の腹の立つやうな事でもしたか？」

マーシャは首を振つた。

「何も私の腹の立つやうな事はなすりやしませんわ、パンテレイ・エレメイイチ。たゞわたしはあなたん所におゐるのが退屈でたまらなくなつたの……今までの事は心からお禮を申しますが、このまま續けては暮らして行けませんの。――どうしても！」

チュルトブハーノフはびつくりした。思はず兩手で自分の腿を叩き、躍り上がった程である。

「一體それはどうしたといふんだ？ 今までずつと一緒に暮らして来て、なんの不足もなく呑気にしてゐたものが――だしぬけに退屈になつてきたから、あんな人なんか棄てて行つてしまはうなどと考へ出してさ、いきなり頭に頭布をかぶつて、すたこら出てしまふなんて！ 奥様にも劣らない位、みんなから奉てられてゐたものを……」

「そんな事なんかちつとも望みぢやないわ。」と、マーシャは遮つた。

「どうして望みでないんだ？ 渡り者のチブシイの仲間から奥様に出世したくせに——なんだ、望みぢやないなんて？ 何故のぞみでないんだ、下司根性のくされ女め？ そんな事が本當に出来ると思ふのか？ これはほかに惚れた男があるんだらう、ほかに惚れた男が！」

彼はまた口から泡をふかんばかりに猛り立つた。

「ほかに惚れた男なんて、そんなこと夢にも考へてやしないわ、今までにだつてさ。」と、マーシヤは持ち前の歌ふやうな齒切れのいゝ聲で云つた。「わたし、ちやんとさう云つたぢやないの、氣が鬱いでたまらなくなつたのよ。」

「マーシヤ！」と、チュルトブハーノフは叫んで、我れと我が胸を拳で打つた。「さあ、止しにしよう。もう澤山だ、これだけ俺を苦しめたんだから……さあ、もう澤山だ！ほんとに冗談ぢやない！ チーシヤがなんて云ふか、考へて見るがいゝ。あの男のことだつてちつとは考へてやつたら好からうぜ！」

「チーホン・イワイヌイチにはどうぞよろしく、それから、かう云つて頂戴。」

チュルトブハーノフは両手を振り上げた。

「いや、いけない、なんの——行かせるものか！ ヤッフの奴なんか幾ら待つてたつて、あいつに

ぬく／＼と渡すものか！」

「ヤッフさんは」と、マーシヤは云ひかけた。

「あれがなんでヤッフさんなものか」と、チュルトブハーノフは口眞似した。「彼奴は正眞正銘のべてん師だ、騙兒だ、——おまけに、彼奴は猿みたいな面をしてゐやがる！」

まる半時間ばかりチュルトブハーノフは、マーシヤを口説き落とさうと苦心慘愴した。びつたりと傍へ寄り添つたり、また後ろへ飛び退いたり、手を振り上げたり、低く腰を屈めてお辭儀をしたり、泣いたり罵つたりした……

「駄目です」と、マーシヤは繰り返すのであつた。「わたしなんとも云へないほど氣がくさ／＼して……鬱ぎの蟲に食はれてしまふわ。」次第々々に彼女の顔は、氣のない、殆んど睡さうな表情になつて來たので、チュルトブハーノフは曼陀羅華でも飲まされたのではないかと、訊ねた程である。

「鬱ぎの蟲よ」と、彼女はもう十遍も繰り返した。

「ふむ、ちや、もし俺がお前を殺したら？」と、彼はだしぬけに叫んで、かくしからピストルを取り出した。

マーシヤはにつこり微笑んだ。その顔は生々して來た。

「それもいゝでせう。殺して頂戴、パンテレイ・エレメイチ、あなたの御氣隨にね。たゞ歸れつたつて歸りやしないから。」

「歸らない？」と、チュルトブハーノフは撃鐵を上げた。

「歸りませんよ、あなた。生きてる中は歸りやしないから。私が一旦ひ出したら後へはひかないのよ。」

チュルトブハーノフは不意にピストルを彼女の手を持たせて、そのまゝ地びたに坐つた。

「さあ、それならお前の方で俺を殺してくれ！ お前がゐなけりや生きてなんかゐたくない。俺はお前に愛想をつかされたんだから——俺も世の中の事にすつかり愛想がつきた。」

マーシャは身を屈めて、風呂敷包みを取り上げ、銃口をチュルトブハーノフから除けるやうにしながら、ピストルを草の上において彼の傍へすり寄つた。

「仕様のない人ね、あなた。何をくよくよなさるの？ 一體わたし達チブシイ女がどんなものか御存じないの？ わたしたちの氣質はこんなもので、これがわたし達の習慣なのよ。鬱ぎの蟲つて奴は、思ふ同志の仲を割くもので、これが心に忍びこんで遠い國へ誘ひ出すやうになつたら、もうどうしたつて止まりつこないわ。どうかこのマーシャを覚えてて頂戴、こんな情人は又と二人ありま

せんよ。——わたしだつてあなたを忘れやしないわ、あなたは本當に男らしい人——でも、二人の暮らしはもうこれきりよ！」

「俺はお前を可愛がつてやつたぢやないか、マーシャ、」と、チュルトブハーノフは両手で顔をかきしたまゝ指の間からかう呟いた。

「わたしだつて可愛がつてあげたわ、なつかしいパンテレイ・エレメイチ！」

「俺はお前を可愛がつてやつた、今でも夢中になる程、氣が狂ひさうな程、好きで堪らないんだ——それなのに、お前がかうして藪から棒に平氣で俺を見棄てておいて、浮世の浪に揉まれて歩くなんて、それを考へると——あゝ、もしも俺がこんなしがたい素寒貧でなかつたら、お前も俺を棄てて行きやしなかつたらう、とそんな氣がする位だ！」

これを聞いて、マーシャはたゞにたりと笑ふばかりであつた。

「まあ、あなたはよくわたしのことを怨のない女だと云つてたくせに！」と云つて、彼女は力まかせにチュルトブハーノフの肩を撲りつけた。

彼はいきなり躍り上がった。

「だが、それにしても、せめて金だけでも持つて行つてくれ——だつて、そんな無一文の身體でど

うするつもりだ？　しかしそれよりも、やつぱり俺を殺してくれ！　はつきり云ふが、一と思ひに殺して貰ひたいんだ！」

マーシャはまた頭を振つた。

「あなたを殺すんですつて？　それであなた、西伯利亞へ流し者にならないで済むと思つて？」  
チュルトブハーノフはぎつくり身慄ひした。

「それぢや、お前はたゞそれだけで、流し者にされるのが怖さに、いやだと云ふんだな……」  
彼はまた草の上にとりと身を投げた。

マーシャは無言のまま傍に立つてゐた。

「お氣の毒ね、パントレイ・エレメーイチ」と、彼女は溜め息つく／＼かう云つた。「あなたは好人なんだけど……でも仕方がないわ、さやうなら！」

彼女はくると身を翻して、二足ばかり歩き出した。もう夜が訪れて、ほの暗い影が西方から流れ寄つてゐた。チュルトブハーノフはそ／＼と起き上がつて、後からマーシャの兩腕を掴まへた。

「そんならお前は行つてしまふんだな、毒蛇め？　ヤッフのところへ！」

「さよなら！」　マーシャは情をこめてきつぱりとかう繰り返すと、身をふりほどいてすた／＼と歩き出した。

チュルトブハーノフは、暫くその後ろ姿を見送つてゐたが、ピストルの置いてある所へ走り寄つて、それを引つ摺むと、狙ひを定めて火蓋を切つた……けれど撃鐵の弾機をしめる前に、手が上に引き吊つたので、弾丸はマーシャの頭の上を喰ひながら飛び過ぎた。彼女は歩きながら肩越しに彼を振り返ると――その儘、からかつてでもゐるやうに身體を左右に揺りながら、ずん／＼歩いて行つた。

彼は顔をかくして一目散に駆け出した……

けれど、まだ五十歩と走らない中に、彼は急に釘づけにされたやうに立ち止まつた。聞き馴れた、餘りにもよく聞き馴れた聲が、彼の耳に入つたのである。マーシャは歌を唄つてゐた。「うるはしき青春の日」と、うたつてゐるのであつた。一つ一つの音が哀しげに、しかも燃えるやうな情熱を湛へて、夕暮れの空にひろがって行く。チュルトブハーノフはちつと耳を傾けた。聲は次第々々に遠ざかつて、消えたかと思ふとまた漂つて来る。漸く聞き分けられる程ではあるが、依然として灼けつくやうな情熱の流れをなして……



「あれはわざと俺にあてつけてるんだ。」とチュルトブハーノフは思つたが、忽ち呻くやうに云つた。

「あゝ、さうぢやない！ あれは俺に永久の別れをつけてゐるんだ。」涙がはらくと滾れた。

次の日、彼はヤッフ氏の住居に姿を現はした。ヤッフは生え抜きの社交界の人なので、淋しい田舎住居を嫌つて、彼の言葉を藉りて云へば、「少しでもお嬢さん方の身近にゐられるやうに」と、郡役所のある町に住んでゐた。チュルトブハーノフはヤッフに逢へなかつた。従僕の語つたところによると、彼は前日莫斯科に發つたとの事である。

「果たしてその通りだ！」と、チュルトブハーノフは猛然と叫んだ。「あいつらは謀し合はしてゐやがつたんだ。マーシヤは彼奴と一緒に駆け落ちしたんだ……しかし、待つてゐるがいゝ！」

彼は僕従が止めるのも聞かず、若い騎兵大尉の居間に闖入した。居間の長椅子の上には、槍騎兵の制服を着た主人の油繪の肖像がかゝつてゐた。

「あゝ、こいつ此處にゐやがつたか、尾無し猿め！」と、チュルトブハーノフは嗷鳴りさま長椅子の上へ躍り上がつて、堅く張つてある畫布に拳固を喰らはし、大きな穴を開けてしまつた。

「貴様、やくざ旦那にさう云へ。」と、彼は従僕の方へ振り向いて云つた。「當人の穢らしい面が見當たらないので、貴族のチュルトブハーノフ様が、繪に描いた奴の面にお開けになつた、とな。もし決闘でも申し込まうと思つたら、チュルトブハーノフ様の居所は、奴がよく知つてゐる筈だ！ それが出来なけりや、こつちの方から奴を探し出してやる！ 海の底をくゞつてでも、あの穢らしい猿面冠者を探しだしてくれる！」

これだけの事を云ふと、チュルトブハーノフは長椅子から飛び下りて、勝ち誇つたやうに引きあげた。

ところが、ヤッフ騎兵大尉は一向に決闘なぞ申し込まうとしなかつた。——それどころか、まるで何處にも顔を見せなかつたのである。——チュルトブハーノフの方も、是非仇を探し出さうとも考へなかつたので、何事もなくてすんでしまつた。その後、騒ぎの原因になつたマーシヤも杳として消息が知れなかつた。チュルトブハーノフは自棄酒をあふり出したが、やがて間もなく「氣がついてもとの身持ちに返つた。」こゝに第二の災難が降りかゝつたのである。

ほかでもない。彼の無二の親友、チーホン・イワーヌイチ・ネドビュースキンは亡くなったのである。亡くなる二年ばかり前から、身體の具合がどうも思はしくなくなつた。喘息に悩まされるやうになつて、絶えず寝込んでばかりゐた。そして眼が覺めてからも、なか／＼急には正氣づかなかつた。郡の醫者は「軽い中風」がきてゐるのだと云つた。マーシャが家出する前の三日間、つまりマーシャが「鬱ぎの蟲に取りつかれた」あの三日間といふもの、ネドビュースキンは自分の持ち村のペスセレンヂェフカに寝てゐた。ひどく風邪を引き込んだのである。それだけにマーシャの遺口は一層思ひがけなく、彼の心にさし響いたのである。當のチュルトブハーノフよりも、もつと深く心を打たれた位である。彼は温順しい臆病な性質であつたので、自分の友達に對するこの上もなく優しい同情と、病的な疑惑の念よりほかに、何一つ素振りには見せなかつた……けれども、彼の内部で何も彼もが切れ切れになり、ばら／＼になつてしまつたのである。「彼女は私の魂を抜き取つてしまつたのだ。」自分の氣に入りの模造革の小さな長椅子に腰をかけて、指をひらく／＼動かしながら、彼は獨りであつた。チュルトブハーノフが元氣を取り戻した時でさへ、ネドビュースキンはもと／＼通りになれず——「心の中が空っぽになつた」やうな感じを持ち續けてゐた。「こゝんところ」と、彼は胃の腑より少し上に當たる胸の眞ん中を指さしながら、よく云ひ

云ひした。こんな有様で冬まで持ち耐へてゐた。初霜の降りる頃から、喘息の方は少し快くなつたけれど、その代り、今度はもう軽い中風でなくて、ほんものの中風に見舞はれたのである。彼は立ち所に意識を失つたわけではなく、とにかく、チュルトブハーノフの顔も見分けが付き、おまけに「一體どうしたのだ、なんだつて、チリシャ、断りもしないで俺を置いて行くのだ、それぢやマーシャより非道いくらゐぢやないか？」と云ふ親友の絶望したやうな叫びに對して、剛ばつた舌で、「でも、わしや、バ……ア……セエ・エ……エ……キツチ、つ……も……あ——たの……いふこと……き……い……た」と返事をした程である。とは云ふものの、彼は郡の醫者の來るのも待たず、その日の中に死んでしまつた。醫者はまだ冷たくなり切らない彼の身體を見ると、現身の儚さを悲しく思ひしめながら、たゞ「鯨鮫の燻製に火酒」を所望するよりはかに仕方がなかつた。チーホン・イワーヌイチは、當然な事ではあるが、豫て心から尊敬してゐた恩人であり、心の廣い保護者であつた「バンテレイ・エレメーイチ・チュルトブハーノフ殿」に自分の領地を譲つてしまつた。しかし、それは心から尊敬してゐた恩人にとつて、大した利益をもたらさなかつた。といふのは、間もなく競賣になつて、一部は墓標や彫像の費用にあてられたからである。チュルトブハーノフは（彼にも父親の風變りな癖が傳はつてゐたらしい！）親友の亡骸の上に彫像まで建てようと考へつ

いたのである。そこで彼は、祈れる天使を表はしてゐる彫刻を莫斯科に注文してやつた。けれど、彼が人から紹介された仲介業者は、田舎なんか彫刻の分かるものはさらにあるまいと多寡を括つて、天使の代りにフロラの女神像を送つて寄越した。それはエカチェリーナ女帝時代に造られた莫斯科郊外の荒れ果てた庭園を、永年飾つてゐたものである。幸ひと、この彫像はロココ式の極めて優美な作品で、ふつくりした小さな腕、房々と波打つてゐる髪の毛、露はな胸にかゝつてゐる薔薇の花房、しなやかにくねらした腰つき——これが無代で仲介業者の手に入つたのである。かういふわけで、この神話の中の女神は優美に片足をあげて、チーホン・イワーヌイチの墓の上に、今でもやはり立つてゐる。そしていかにも氣取つたしなを作りながら、あたりを彷徨ひ歩く仔牛や羊の群れなどといふ、この村の墓場につきものの参詣者を眺めてゐる。

## 三

無二の親友を亡くしてから、チュルトブハーノフはまた深酒を始めたが、今度は前よりもずつと性質が悪かつた。家産はすっかり傾いてしまつた。獵をしようにも獲物は失くなるし、無けなしの金は耗つてしまふし、僅かばかり残つてゐる召使ひたちも散り散りに逃げ出してしまつた。パンテ

レイ・エレメーイチは全くの獨りぼつちになつて、胸の憂さを晴らす相手は愚か、たゞの一言交はし合ふ者さへなくなつた。たゞ傲慢なところばかりは少しも直らなかつた。それどころか境遇が酷くなればなる程、彼はいよく尊大に、いよく横柄になり、益々傍へも寄りつけないやうになつて、遂には全く野放し同然になつてしまつた。たゞ一つの慰め、たゞ一つの喜びだけが、彼のために残されてゐた。それは灰色をしたドン種の素晴らしい乗馬で、彼はこれをマレク・アデリと呼んでゐたが、全く天晴れ名馬であつた。

この馬が彼の手に入つたのは次のやうな経緯である。

ある時、チュルトブハーノフが馬に乗つて隣り村を通つてゐると、居酒屋のあたりに百姓たちが集まつて、がや／＼喚き立ててゐるのが聞こえた。この群集の真ん中で、頑丈な腕が始終おなじ位置で、上がつたり下がつたりしてゐる。

「あれは一たい何事だ？」と、チュルトブハーノフは持ち前の命令するやうな調子で、我が家の敷居に立つてゐる百姓婆さんに問ひかけた。

婆さんは居眠りでもしてゐるやうに、入り口の柱に凭れて、居酒屋の方をちら／＼と眺めてゐた。

更紗の襦袢を着て、剃き出しの胸に糸杉で作つた十字架をかけ、白つばい頭をした悪戯小僧が、兩

足を擴げて坐つてゐたが、握りしめた小さな拳を婆さんの木の皮靴の間に置いてゐる。そのすぐ傍には一羽の雛つ子が、こち／＼になつた黒麵包の皮を啄ついてゐた。

「知りませんがね、旦那、」と、婆さんは答へた。——そして前の方に屈み込ながら、皺だらけの黒い手を餓鬼の頭に載せた。「なんでも、村の若い者どもが、猶太人を擲つてゐるとかいふことで。」

「え、猶太人だつて？ 猶太人て何者だい？」

「そんなこと誰が知りませうもんで、旦那。この村にどこかの猶太人がひよつこりやつて来たんだけんど、どこから来た者だか——そんなこと分かる筈がありませんよ。ワーシヤ、この坊主、お袋んとこへ行きなよ、しつ、しつ、こん畜生！」

婆さんは雛つ子を叱り飛ばした。ワーシヤはその裾にしがみついた。

「さういふわけで、猶太人がぶん撲られてゐるんで、旦那。」

「どうしてぶん撲られるんだ？ 何をしたといふんだ？」

「分かりませぬ、旦那。きつとそれだけのわけがあるんでせう。それに、ぶん撲らずにやゐられないぢやありませんか！ なんせ、旦那、あいつら基督様を磔刑にした連中ですもん！」

チェルトブハーノフは一と聲高く叫ぶなり、馬の頸筋に一と鞭くられて、いきなり群集の方を指さして飛ばして行つた——やがてその中に躍り込むと、同じ鞭を振るつて、右に左に百姓どもを誰れ彼れの見さかひもなく打ちのめしながら、千切れ千切れの聲でかう云ふのであつた。

「勝手に……人を仕置きするなんて！ 勝手に……人を……仕置きするなんて！ 罰を下すのはお上の法律で、たゞの……人間ぢや……ないん……だぞ！ 法律だ！ 法律だ!! 法律だ!!!」

二分と経たない中に、群集は忽ち一人残らず四方八方へ散つてしまつた。——そして居酒屋の戸口の前の地びたには、小さな、瘦せぎすの、淺黒い顔をした、南京木綿の長上衣を着た男が、髪を振り亂して、見る影もなく痛めつけられた姿を曝してゐた……蒼ざめた顔、引つ吊つた眼、開いた口……それは何だらう？ 恐怖の餘り氣が遠くなつたのか、それとも本當に死んでしまつたのか？ 「何だつてお前たちは猶太人を殺したんだ？」物凄い勢ひで鞭を懐はせながら、チェルトブハーノフは雷のやうな聲で呟鳴つた。

群集は返事のかはりに弱々しい唸り聲を立てた。百姓の中には肩を抑へる者もあれば、脇腹をさする者もあり、鼻のあたまを撫でる者もあつた。

「喧嘩はなか／＼達者なもんだ！」後ろの方でかう云ふ聲が聞こえた。

「あんな鞭を持つてゐるんだもの！ それなら誰だつて出来らあ！」と、別の聲が云つた。

「猶太人をなぜ殺したんだ？ 先刻から訊いてるぢやないか、洗禮を受けてるくせに、外道めらが！」と、チュルトブハーノフは繰り返した。

けれどもその時、地びたに轉がつてゐた男が身輕にひよいと跳び起きて、チュルトブハーノフの後ろへ走つて行くと、擦撃したやうな手つきでその鞍の端にしがみついた。

高い笑ひ聲がどつとばかり群集の中に起こつた。

「生きてやがる！」といふ聲がまた後ろの方から聞こえた。「猫と同じだあ！」

「御前様、どうか庇つて下さい、お助け下さい！—その間にははれた猶太人は、チュルトブハーノフの足に胸をびつたりくつゝけながら、おどくどくと呟いた。「さもなけりや、彼奴らは私を殺してしまひます、殺してしまひます、御前様！」

「なんだつてそんな目に遭ふんだ？」チュルトブハーノフは訊ねた。

「それが、正直なところ、まるで分かりません！ なんでもこの村の牛や馬がばたく死にだしたので……それで私が怪しいと云ひ出しまして……けれど、私は何も……」

「いや、そんなことは後で白黒をつけよう！」とチュルトブハーノフは遮つた。「さあ、お前、こ

の鞍に掴まつて、俺の後からついて来い。——ところで貴様たち！」と、群集の方を回いて云ひ足した。

「貴様らは俺を知つとるだらう？——俺は地主のパンテレイ・チュルトブハーノフだ、ペスゾーノヲ村に住んでゐる——さあ、これで不平があるのなら、俺を相手に訴訟するがい——それから、序でに猶太人の方も相手取つたら好からう！」

「なんの訴訟など致しませうぞ？」と、白い鬚鬚を生やした、昔の族長そつくりな鹿爪らしい様子をした百姓が、恭々しく小腰を屈めながら口を切つた（そのくせ、この老人も負けず劣らず猶太人をぶん撲つたのである）。「パンテレイ・エレイメイチの旦那、わし共はあなた様をよつく存じて居ります。御親切に道理をお教へ下さいまして、まことに有難う存じます！」

「なんの訴訟など致しませうぞ！」と、他の連中もその尾について云つた。「だけど、あの外道の成敗はこつちでちやんとしてやりますわい！ なんの逃がして堪るものか！ それこそ野良の兎みたいに取つちめてやるんだ……」

チュルトブハーノフは口髭をひくく動かして、せむら笑つた。——そしていつかチーホン・イワイヌイチを救ひ出したと同じやうな遣り口で、迫害者の手から救ひ出してやつた猶太人を伴な

つて、悠々と自分の村へ引き上げた。

## 四

それから四五日経つて、チュルトブハーノフの召使ひの中でたつた一人だけ残つてゐる子供が、誰やら馬に乗つた人がやつて来て、お話したいと云つてゐる、と取次いだ。チュルトブハーノフが玄關口に出て見ると、それは例の顔馴染みの猶太人であつた。目事なドン種の馬に跨がつて、身動きもせず、誇らし氣に庭の真ん中に立つてゐた。猶太人は帽子を頭に被らないで小脇に抱へ、足も鐙にかけないで、その吊り革にさし込んでゐた。ぼろ／＼になつた長上衣の裾が鞍の両側から垂れてゐる。チュルトブハーノフの姿を見ると、唇を鳴らし、両腕をぐいと動かして、足を二つ三つ揺すつた。けれどチュルトブハーノフは、この變つた挨拶に答へなかつたばかりか、却つて立腹した程である。見窄らしい猶太人が生意氣にこんな立派な馬に乗るとは……なんといふ無作法千萬な話だ！

「やい、こら、このエチオビヤ面め！」と、彼は呶鳴つた。「もし泥濘ぬかるみに引き摺り落とされたくなかつたなら、今すぐ下りろ！」

猶太人はすぐさま唯々諾々と、粉袋みたいな恰好で鞍から轉げ落ちた。——そして片手で手綱を控へたまゝ、にこ／＼とお辭儀をしながら、チュルトブハーノフの傍へ寄つた。

「全體なんの用だ？」と、パントレイ・エレメーイチは儼然として訊ねた。

「御前様、御覽くださいまし、まあ、どんな馬でせう？」猶太人はのべつべこ／＼お辭儀をしながら、改めて云ひ出した。

「ん……さう……馬は、なるほどいゝ馬だ。どこからこんなものを手に入れたんだ？ きつと盗んで来た位なこつたらう？」

「滅相めさうもない、御前様！——わたしは正直な猶太人ですもの、盗みなんか致しません。御前様のために態々手に入れましたんで、全く！ 随分骨を折りましたよ、骨を！ その代り、この馬はどうです！ これだけの馬はドンドゥンの地方を隅から隅までさがしたつて、またと見つかるもんぢやありませんよ。まあ、御前様、この馬振りを見てやつて下さいまし！ そら、どうぞこちらへ！——どう、どう……横向きにならんか！——そこで一つ鞍をとつて見ませう。——どんなもんです？ え、御前様？」

「馬は、なるほどいゝ馬だ！」チュルトブハーノフは、わざと氣のない調子で繰り返した。——けれ

どさう云ひながらも、心臓は凄じく動悸をうつてゐた。彼はそれこそ氣狂ひ染みるほどの「駒」好きで、目も相當に利いてゐた。

「まあ、御前様、一つ撫でてやつて御覧なさいまし！ 頸筋を撫でてやつて、ひ、ひ、ひ！ こんな按配に！」

チェルトブハーノフは氣の進まないやうな顔をして、片手を馬の筋頸にのせ、二度ばかり軽く叩いた後、それから指で鬚甲から尻尾まで背筋を撫でて、腎臓の上に當たる急所に來ると、如何にも通人らしくそこを抑へた。馬は忽ち背骨を紆らせて、さも高慢らしい黒い眼でチェルトブハーノフを斜めに見返り、鼻をぶるつと鳴らして前足を踏みかへた。

猶太人は笑つて軽く手をたゝいた。

「御主人様が分かるんですよ、御前、御主人様が！」

「ふん、阿呆を云ふな。」と、チェルトブハーノフは忌々しうに遮つた。「さて、この馬をお前から買ひたくつても……金がない。それかといつて、たゞの買ひ物は、生まれてこの方、猶太人はさて措き、神様が手づから遣らちと仰つしやつても、受け取つた事がないんだ！」

「とんでもない、私があなたに物を差し上げるなんて、滅相な！」と、猶太人は叫んだ。「お購め

下さいまし、御前様……お金のところは……お待ち致しますから。」

チェルトブハーノフは考へ込んだ。

「いくらで賣るんだね？」と、終ひに彼は齒の間から押し出すやうに訊ねた。

猶太人はひよいと肩を竦めた。

「買つただけのお値段で宜しうございます。二百ルーブリ。」

馬は言ひ値の二倍からの値打ちがある——ことによつたら三倍もするかも知れぬ。

チェルトブハーノフは外つ方を向いて、熱病やみ染みた欠伸をした。

「ところで金は……何時？」と、彼は無理に眉を顰めて、猶太人の方を見ずに訊ねた。

「何時でもお手許の御都合のよろしい時に。」

チェルトブハーノフは頭を後ろにぐいと反らしたが、眼は擧げなかつた。「それでは返事にならぬ。ちやんと云はないか、ヘロデの末裔め！ 貴様なんか何時まで借金して堪るものか？」

「ぢや、かういふ事に致しませう。」と、猶太人はせきこんで云つた。「一六箇月先き……如何でせう？」

チェルトブハーノフはなんとも返事をしなかつた。

猶太人はしきりにその眼色を窺はうと焦つた。

「それで宜しうございますね？ 既に入れてお置きませうか？」

「鞍はいらんぞ。」と、チュルトブハーノフは引つ千切るやうに云つた。「鞍は持つて行け——分かつたか？」

「へえ、へえ、持つて参ります、持つて参ります。——と、猶太人は嬉しきまぎれにまはらぬ舌で云ひながら、鞍を外して肩に擔いだ。

「それちや金は六箇月後にな。」と、チュルトブハーノフは言葉を續けた。「それも二百ルーブリぢやない、二百五十ルーブリだ。黙つてろ！ 二百五十ルーブリだと云つたら！ それだけが俺の借りだ。」

チュルトブハーノフは相變らず、思ひ切つて眼が擧げられなかつた。これほど自尊心の惱みを感じたことは、今までに嘗てなかつたのである。「進物なのは見え透いてゐる。」といふ考へが自然と頭に浮かんだ。「忌々しい、お禮に寄越さうといふんだ！」彼はこの猶太人を抱きしめてやりたくもあれば、引つばたいてやりたくもあつた……。

「御前様、」と、猶太人は元氣づいて、お世辭笑ひをしながら云ひ出した。「そこで一つ、露西亞流

に裾から裾へ引き渡しをしたら……」

「これは又、なんといふことを考へ出したんだ！ 猶太人のくせに……露西亞流儀だと！……おい！ 誰かをらんか、馬を受け取つて厩へ連れて行け。それから燕麦でも槽に入れてやれ。今すぐ俺が行つて自分で見るから。それから斷つて置くが、この馬の名前はマレク・アデリとするぞ！」

チュルトブハーノフは玄關口の階段を登つて行つたが、急にくると踵で廻れ右をして、猶太人の傍へ駆けよると、しつかりその手を握りしめた。こちらは身を屈めて、唇さへも突き出したが——チュルトブハーノフはいきなり跳びのいて、「誰にも云ふな！」と低聲に囁いて、戸のかげに消えて行つた。

## 五

その日からといふもの、チュルトブハーノフの生活で、何よりも主な仕事となり、主な心遣ひと喜びになつたものは、このマレク・アデリであつた。彼はマーシャですらこんなには可愛がらなかつたと思はれた程、この馬に打ち込んでしまつた。又ネドビュースキに捧げたより以上の眞情を



彼に傾けた。又その馬の素晴らしさ！ 火、まさに火だつた、まぎれもない火薬のやうな馬だつた——しかもその堂々たる落ちつきは、昔の貴族を偲ばせるほどである！ どんなに引き廻しても疲れることを知らず、辛抱強く、従順な上に、飼料などは幾らもかゝらなかつた。何もほかに食ふものが無ければ、足許の土でも嚙つてゐる。竝足で行く時は、誰かの腕に抱かれてでもゐるやうだし、跑となると波のうねりに揺られてゐるやうだし、まつしぐらに走り出したら風でも追いつけない位である！ また嘗て息切れなどした事がない。それは息の抜ける口が澤山あるから。足は宛然鋼鐵のやうで、ついぞ一度として躓いた例がない。壕にしる、柵にしる、そんな物を飛び越すのは朝飯前の仕事で、しかもその賢さといつたら類がない！ たゞ主人の聲を聞いただけで、首を高く上げて駆け出してくるし、主人が立つて居れと云ひつけて姿をかくしたら、もう身じろぎだにしない。それから一寸でも主人の引つ返して来る氣配がすると、「私は此處に居ります」とでも云ひたげに軽い嘶きの聲を立てる。それに何もものをも怖れない。どんなに黒白も分らぬ闇の中でも、吹雪の中でも、ちゃんと道を見つけ出す。他人の云ふことは金輪際聞かうとしないので、すぐに齒を剝いて嚙みつかうとする！ 犬でもうっかり傍へ寄らうものなら、忽ち前足でその額を蹴り上げ——ぎやふんと云つたかと思ふと、もう息は絶えてゐる。氣位の高い馬で、鞭はお體裁に振つて見せるの

はよいけれど、夢々その身體に觸れてはならない！ いや、何もくどくどと説き立てるには及ぶまい——これこそ馬といふより全く寶物である！

チュルトブ・ハーノフがマレク・アデリの自慢話でも始めようものなら、どこからあれだけの名文句が出て来るかと思はれる程、滔々として盡くる所を知らなかつた！ ところで、その可愛がりやう、大事にしやうといつたらなかつた！ その毛並みは銀の光澤を放つてゐたが、それも古い銀ではなくて、底黒く光る新しい銀なのだ。掌で撫でて見ると真正銘の天鵝絨である！ 鞍、鞍褥、轡——凡て馬具一式が申し分なく整つて、きちんと磨き上げられてゐるので、鉛筆でも取り出して寫生したい程である！ チュルトブ・ハーノフは——云ふまでもなく——手づから愛馬の額髪を編んでやつたり、鬘や尾を麥酒で洗つてやつたり、蹄にさへも一度ならず膏を塗つてやつた……

よくマレク・アデリに跨がつて出かけて行く——近在の地主達の所でなく——彼はこの連中と相變らず交際ひをしなかつた——たゞ、他所の畑を横切り、屋敷の前を素通りするばかりである……さあ、遠くの方から拜むがいく馬鹿者ども！ と云はんばかり。もしどこかに狩りの一隊が現はれて、裕福な地主が遠い原へ獵に出かける氣配でも聞きこむと、彼はすぐさま其處へ駆けつけて、遙か離れた地平線のあたりを氣取つた恰好で走らせながら、美しさとその速さで觀る人を悉く驚嘆さ

せるけれど、近くへは誰一人寄せつけない。ある時、一人の獵好きの地主が供の者一同を従へて彼の後を追つかけた事さへある。チュルトブハーノフが次第に遠ざかつて行くのを見ると、全速力で走りながら、有りたけの聲を出して『おうい、君！ 話がある！ 幾らでも出すから、その馬を譲つてくれ！ 千ルーブリ出しても惜しくない！ 女房でも子供でもくれてやる！ 産の下の灰までくれてやる！』

チュルトブハーノフは、急にマレク・アデリの手綱を緊めた。獵好きの地主は、その傍に乗りつけて、『君！』と叫ぶ。『さあ、いくら欲しいのか云つてくれ？ お願ひだから？』

『もし君が王様で、』と、チュルトブハーノフは急かす騒がず云ひ出した（彼はかう云ひは云つたものの、生まれてこの方シェクスピアの文句などは聞いた事もないのである。『私の馬の代りに君の王國を譲らず私に寄越すと云つても——それでも眞つ平だ！』かう云つてから／＼と笑つたかと思ふと、マレク・アデリを後足で棒立ちに立たせ、まるで獨樂のやうに空中でくると向きを替へ——そのまゝ、後も見ずに駈け出した！ 馬は刈り入れた後の畑を飛鳥のやうに跳んで行く、獵好きの地主は（人の話では、唸るほど金を持つた公爵だといふ）帽子を地びたへ叩きつけ——いきなりぱつたり身を投げ出して、帽子の中に顔を埋めた！ かうして、三十分ばかり倒れたまゝであ

た。

チュルトブハーノフがこの馬を大事にしたのは當たり前である！ 彼が最後にもう一度だけ、近在の地主の誰よりも堂々と威張ることが出来たのは、全くこの馬のお蔭ではなかつたか？

## 六

さうかうしてゐる間に時が過ぎて、支拂ひの期日が迫つて来た。——ところが、チュルトブハーノフには、二百五十ルーブリはさておき、五十ルーブリの金もなかつた。どうしたら好からう、どうして急場を遁れよう？ 『よし！』と、彼は最後に腹を決めた。『もしあの猶太人が人情も何もなく、このうへ待つのが厭だと云つたら、家も地所も彼奴に呉れてやつた上、俺は馬に乗つて氣の向くまゝに何處へでも行つてしまはう！ よしんば餓ゑ死したつて、マレク・アデリを手放す事ぢやない！』彼は頻りにやきもきして、思案投げ首の體であつたが、その時、運命の神が後にも先きにもたつた一度だけ、彼を氣の毒に思ひ、につこり微笑してみせた。といふのは、遠縁に當たる伯母で、名前さへチュルトブハーノフには初耳だつたのが、彼にとつては莫大な二十千ルーブリといふ金額を、遺言狀に書き残して行つたのである！ 彼はこの金を所謂土壇場に迫つて、猶太人の来る前

の日に受け取つた。チェルトブハーノフは嬉しさのあまり、気が狂はないばかりであつた。けれど火酒ワシカの事なんか考へもしなかつた。マレク・アデリが手に入つて以來、酒は一滴も口にしなかつたのである。彼は既へ駈けつけて、自分の生涯の友の鼻面を掴まへて、皮膚の殊に柔かい小鼻の上のあたりを右から左から接吻してやつた。「これからは別れつこなした！」マレク・アデリの頸筋や、きれいに櫛の目を通した鬘の下を平手で叩きながら、彼は叫んだ。家へ歸ると二百五十ルーブリの金を勘定して、別に封筒へ入れた。それから仰向けに寝ころんで、パイプをふかしながら、暫くのあひだ残りの金をどう處分したものかと空想してゐた。——つまり、どんな犬を買ひ込んだものか、生粋のコストロマ種で、是非とも赤斑でなくてはならない！ といつたやうな類ひである。彼はベルファイシカとさへも話をした。そして、縫目といふ縫目に黄色い飾り紐のついた、新らしい哥薩克カサコフ上着を買つてやると約束した。かうしてこの上もない上々の機嫌で眠りについた。

彼は良くない夢を見た。獵に出掛けて行つたのだが、乗つてゐるのはマレク・アデリではなくて、何かしら駱駝みたいな奇妙な獣なのである。すると向かうから、雪のやうに白い、白い毛をした狐が走つて来る……彼は鞭を振り上げて、犬どもを嚇しかけようとした——が、彼の手に握つてゐるのは鞭と思ひきや、湯殿で使ふ垢すりの絲瓜シカバネで、狐は彼の前をあちこち駈け廻りながら、舌を出し

てからかつてゐる。彼は乗つてゐた駱駝から飛び下りたが、跪いて、倒れてしまふ……倒れかゝつたのが憲兵の腕の中で、憲兵は彼を總督のとこへ引つ張つて行つた。見れば總督といふのはヤッフである……

チェルトブハーノフは眼がさめた。部屋の中は暗かつた。つい今しがた、二番鶏が鳴いたばかり……

どこか、遠い遠いところで馬が嘶いた。

チェルトブハーノフは頭を上げた……もう一度、か細い嘶きが聞こえる。

『あれはマレク・アデリが嘶いてゐるのだ！』と、彼は考へた。『たしかにあれの嘶き聲だ！だが、どうしてあんなに遠いところで？ やつ、大變……でも、そんな筈はない……』

チェルトブハーノフは忽ち全身が冷たくなつた。がばと寢床から跳び下りて、手さぐりで長靴や着物を探し、身支度をした。——そして、枕の下から既の鍵を引つ掴んで、外へ飛び出した。

## 七

既は屋敷の一番はづれにあつた。一方の壁は野原に面してゐる。チェルトブハーノフはなか／＼

鍵を錠前に差し込むことが出来なかつた——手が慄へてゐたので、急に鍵を廻すことも出来なかつた……彼は息を殺して、身動きもせずに立つてゐた。戸の中ではことりといふ物音もすればこそ！『マーレシカ！ マーレシカ！』と、彼は低聲に呼んでみた。まるで、死に絶えたやうな静けさ！ チェルトブハーノフは思はず鍵を引き抜いた。戸はぎいと軋んで、そのまま開いた。……試してみると、錠はかけてなかつたのだ。彼は敷居を跨いで、もう一度愛馬の名を呼んだ。——今度は『マレク・アデリ！』と、ちやんと本當の名前を呼んだのである。けれど、忠義な馬は何の應へもせず、たゞ廿日鼠が藁の中をかさこそ音をさせるばかりであつた。その時チェルトブハーノフは、厩の中に設けてある三つの仕切りの中、マレク・アデリを入れてあつた方へ飛んで行つた。あたりは鼻を掴まれても分からないやうな闇であつたが、彼は一と息にその仕切りの中へ飛び込んだ……空つぽだ！ チェルトブハーノフは頭がぐらぐらとして來た。まるで頭の鉢の中で鐘ががん／＼鳴り出したやうである。何か云はうとしたけれど、出るのはたゞしゆう／＼といふ音ばかり、喘ぎ喘ぎ膝をがく／＼させながら、両手を上下左右を振り廻し、仕切りから仕切りへ移つて行き、殆んど天井まで乾草を積み上げてある三番目の仕切りにまで入つて見た。あちらの壁に突き當たり、こつちの壁へ打つ突かりした揚句、ぱつたり倒れて、でんぐり返りをしたが、また起き上がつて、い

なり半開きの戸口から驚地に庭へ飛び出した。……

「盗まれた！ ペルフィーシカ！ ペルフィーシカ！ 盗まれた！」と、彼は死物狂ひの聲で叫んだ。小僧のペルフィーシカは襦袢一枚で、宛ら獨樂のやうに、今まで寝てゐた物置きから轉がり出した……

主人と一人きりの下男と——二人ながら酔ひどれのやうに、庭の真ん中でぶつかつた。まるで氣でも違つたやうに、二人はぐる／＼と堂々めぐりをしてゐた。主人の方でもどういふ譯か合點の行くやうに話が出来なかつたし、下男の方も何をしろと云はれるのか納得がゆかなかつた。『大變だ！ 大變だ！』と、チェルトブハーノフがしどろもどろに口走ると、小僧もそれについて、『大變だ！ 大變だ！』と、鸚鵡返しに云ふばかりであつた。『提灯だ！ 持つて來い、提灯を點けて！ あかりだ！ あかりだ！』と、これだけの聲が、力なく萎えたチェルトブハーノフの胸から、やつとのことで絞り出された。ペルフィーシカは家の中へ駆けこんだ。

けれども提灯をつけたり、灯りを持つて來たりすることは、さう無造作にはゆかなかつた。硫黄燐寸はその當時の露西亞では滅多にない貴重品とされてゐたし、臺所にも乏しいおきは疾に消えてゐた。——燧金も燧石も中々見つからなかつた上に、すぐには火がつかかなかつた。チェルトブハ

ノフは齒がみをしながら、度膽を抜かれたベルフィーシカの手から燧道具を引つたり、自分で火を鑽り出しにかゝつた。火花は夥しくあたりを飛び散つたが、悪態や唸り聲の方がそれよりもつと澤山吐き散らされた。——しかし、それでも火口は、二人が四つの頬つべたや唇を合せて懸命に吹き立てたけれど、中々つかなくつたし、ついてもすぐ消えてしまふ！ 漸く、完全に五分ばかりたつて、壊れかゝつた提灯の底に蠟燭の燃えさしが、覺束なげな光りを放つた。チュルトブハーノフはベルフィーシカを引率して、厩の中に駆け込み、灯りを頭上高く差し上げて、四邊を見廻したが……

やつぱり空虚だ！

彼は庭へ飛び出して、隅々隈々残りなく駆け廻つたが、馬は何處にもゐない！ パンテレイ・エレメイイチの屋敷を廻つてゐる編み垣は、久しい前からぼろ／＼になつて、方々が倒れかゝつたり、地びたについたりしてゐる……厩のわきなどは幅二尺あまりも、すつかり押し倒されてゐた。ベルフィーシカはそこを、チュルトブハーノフに指さして見せた。

「旦那様！ こゝを見て御覧なさい。ついお晝までは、こんなになつてゐませんでしたよ。ほら樺杭までが地面から抜け出してゐます。これで見ると、誰かが引つて抜いたに違ひない。」

チュルトブハーノフは、提灯を持つて飛んで來ながら、この邊の地面をあちこちと照らして見た

……

「馬の足跡、馬の足跡 蹄鐵のあとだ、今ついたばかりの跡だ！」と早口に口走つた。「こゝから連れ出したんだ、こゝからだ、こゝからだ！」

彼は忽ち編み垣を躍り越えて、「マレク・アデリ！ マレク・アデリ！」と喚きながら、どんどん野原の方へ駆け出した。

ベルフィーシカは呆れ顔で、編み垣の傍にぼんやり佇んでゐた。提灯の灯りの圓い形が、星明りも月の光りもない、深い闇夜に吞まれてしまつて、見る見る中に消えて行つた。

チュルトブハーノフの絶望したやうな叫び聲は、次第々々に幽かになつてゆく……

## 八

もう東が白み始めた頃、彼は家へ歸つて來た。見れば人間らしい俤はなく、着物は泥まみれになり、顔は野獸めいた物凄しい相恰を呈し、眼つきは氣むづかしく、そのくせぼつとしてゐた。噎れた聲でベルフィーシカを逐ひ拂ふと、そのまゝ居間に閉ぢ籠つた。彼は疲れ切つて、殆んど立つてゐ

る力もなかつたが、それでも床に就かうとはせず、戸口の椅子に腰を下ろして、両手で頭を抱へた。

「盗まれた!……盗まれた!」

それにしても、泥棒はどういふ手を使つて、よる夜中、錠のおりた厩からマレク・アデリを盗み出したのだらう? 晝間でさへ見知らぬ人間は傍へ寄せつけようとしなかつた、あのマレク・アデリが——どうしてことりとも音をさせず、聲も立てないやうに盗まれたのだらう? 番犬一匹吠えなかつたといふ事は、どう解釋したらいいのだらう? なるほど、犬は全部で二匹、しかも稚い仔犬がゐるばかりで、それさへ寒さと飢<sup>ひ</sup>に、地びたを掘つてうづくまつてゐたのだが——しかし、しかし、それにしても!

「マレク・アデリを盗まれちまつて、これから俺はどうしたらいいのだ。」と、チュルトブハーノフは我ともなしに考へる。「愈々たつた一つ残つた楽しみを失くしてしまつた。——さては、俺も最後の時が来たのだな。代りの馬を買ふとしようか、いゝ按配に金も出来たから! だが、何處へ行つたら、あれだけの馬が見つかるのだ?」

「パンテレイ・エレメーイチ! パンテレイ・エレメーイチ!」戸の外で、かうおづくと呼ぶ聲

が聞こえた。

チュルトブハーノフは跳ね起きた。

「そこにゐるのは誰だ?」と、彼は變に上づつた聲で叫んだ

「私です、あなたに使はれてゐるベルフィーシカです。」

「それで何用だ? それとも見つかつたのか、家を覚えてゐて歸つて来たのか?」

「いんえ、さうちやありません、パンテレイ・エレメーイチ、實はあの馬を賣つた猶太人の奴が

……」

「それがどうした?」

「やつて来ましたので。」

「ほう、ほう、ほう、ほう、ほう!」と、チュルトブハーノフは妙な聲を出して——いきなり戸をさつと開けた。「こゝへ引つ張つて来い、引つ張つて! 引つ張つて!」

髪を蓬々に振り亂して、なんだか野獸じみた風態をした「恩人」が忽然と姿を現はしたのを見て、ベルフィーシカの後ろに立つてゐた猶太人は、そのまま逃げ出さうとした。けれど、チュルトブハーノフはたつた二跳びで追ひついて、まるで虎が爪を立てるやうに、その咽喉を掴んだ。

「は、あ！金を取りに来たんだな！金を取りに！」まるで自分が締めつけてゐるのではなく反つて相手に締めつけられてゐるやうに、彼はしや嘎れ聲を振り絞つた。「夜中に盗んでおいて、晝になつたら金を取りに来るのか？え、え？おい？」

「滅相もない、ご、ぜん、さま、」と猶太人は呻き聲を出した。

「白状しろ、俺の馬はどこにゐる？どこへ隠したのだ？誰に賣つた？さあ白状しろ、白状しろ、白状しろと云ふのに！」

猶太人はもう呻き聲さへ出せなくなつた。紫色になつた顔には恐怖の表情さへ消えてしまつた。両手はだらりと垂れて、身体はチュルトプハーノフが猝猛な勢ひで揺すぶり立てるまゝに、葦のやうにゆらく前後に揺れてゐた。

「金は拂つてやる、すつかり耳を揃へて一哥ゴ残らず拂つてやる。」と、チュルトプハーノフは呶鳴り続ける。「但し、即座に泥を吐かなけりや、生まれ損なひの雛つ子同然、絞め殺してくれるぞ……」

「なに、旦那、もう締めておしまひになりましたよ。」と、小僧のベルファイーシカは殊勝らしく云つた。

そこで、初めてチュルトプハーノフは我に返つた。

彼は猶太人の頭を離してやつた。すると、猶太人はどうとばかり床に倒れた。チュルトプハーノフはそれを抱き止めて、ベンチに腰をかけさせ、その咽喉へ火酒カウをコップ一杯つき込んで、正氣に返らした。さて、正氣にしておいて、話を始めた。

聞いて見ると、猶太人はマレク・アデリの盗難事件を夢にも知らないものであつた。また自分で態々「尊敬してやまぬパンテレイ・エレメーイチ」のために、手に入れた馬を盗み出すわけがないではないか？

そこで、チュルトプハーノフは彼を既に案内した。

二人がゝりで既の仕切りや、秣槽や、戸の錠前を調べ上げて、秣や藁を底の底まで掻き廻した揚句、今度は庭の方へ移つた。チュルトプハーノフは、垣根の傍の足跡を猶太人に指さして見せた——と、不意に我れと我が兩脚を叩いた。

「さてよ！」と叫んだ。「貴様はどこであの馬を買つた？」

「マロ アルハンゲリスク郡はエルホセンスクの馬市で。」と猶太人は答へた。

「誰の手から？」

「コサックから。」

「さて！ そのコサックは若いやつか、それとも年寄りか？」

「中年のどつしりした人物でございます。」

「どんな様子をしてゐた？ 見かけはどうだつた？ きつと一筋縄でゆかぬ騙兒だらう？」

「きつと、騙で兒ございませうな、御前様。」

「で、どうだつた、其奴は貴様になんと云つた、その騙兒は——前からあの馬を持つてゐたやうに云つたか？」

「確かさう云つたやうに覺えますが。」

「さてこそ、そいつでなくて誰が盗むものか！——おい、考へてもみる、さうぢやないか。まあこつちへ来い……貴様はなんと云ふのだ？」

猶太人はびくつとして、黒い眼を上げてチュルトプハーノフの顔を見た。

「私をなんと云ふかですつて？」

「うん、さうだ。貴様の名はなんて云ふんだ。」

「モシエリ・レイバと申します。」

「よし、レイバ、一つ考へてもみる、なあ——貴様は賢い男だから分かるだらうが——あのマレク・アデリが元の主人より外に、誰の手に自由になるものか？ つまり、元の主人が鞍も置けば響も飲めて、馬衣も除けたんだ——そら、その馬衣が乾草の上に置いてあるだらう！……でもなく自分の家にゐると同じやうに扱つてゐるぢやないか！ これがもし元の飼主でなかつたなら、ほかの奴なんかマレク・アデリが踏み殺してしまつた苦だ！ 村ぢう總立ちになるやうな騒ぎをおつ始めたに相違ない！ 貴様もさう思ふだらう？」

「さう思ふには思ひますが、御前様！……」

「さて、そこで先づ第一にそのコサックを探し出さんけりやならん！」

「でも、どうして探したのですでございます。御前様！ 私は後にも先きにもたつた一度見たばかりで——それに今どこに居りますやら——また名はなんと云ひますやら？ やれ、やれ、やれ！」と猶太人はさも情けなさうに、垂れた髪をふりながら云ひ添へた。

「レイバ！」と、急にチュルトプハーノフが叫んだ。「レイバ、俺の顔を見てくれ！ 俺は本當に正氣を失つてしまつた、俺はもう普段の俺ぢやない！ お前が力を借してくれなかつたら、もう自殺してしまふぞ！」



「でも、どうしたら私なんぞにそれが……」

「俺と一緒に出掛けようとして、あの馬泥棒を探すんだ！」

「でも、一體どこを目指して参りますので？」

「馬市を廻るんだ、本街道や裏街道や馬泥棒の巢は固より、町、村、農場——どこもかしこも、あそこも此處も探すんだ！ 金のことなら貴様、心配するな、俺はな、兄弟、遺産を手に入れたんだ！ 假令文なしになつても必ず大事な馬は探し出して見せる。あのコサックめ、あの悪黨め、決して逃がすこつちやないぞ！ 何處へ逃げてもついて行くぞ！ 奴が土の中へ潜れば、こつちも土を掻き分けてやる！ 奴が悪魔の所へ逃げてゆけば、こつちは魔王の處へ行つて見せる！」

「まあ、どうして魔王のとこなぞへ、」と猶太人は注意した。「そんな所へ行かなくても済みますよ。」  
「レイバ！」とチュルトブハーノフはその言葉を抑へた。「レイバ、貴様は猶太人で、穢ららしい信仰を持つてゐるとはいひ條、貴様の魂はなまじつかの基督信者よりもずつと増した！ だから俺を可愛想だと思つてくれ！ 何しろ俺が一人で出掛けたつて仕様がな、一人ぢやこの仕事は手に合はん。俺は疳癩持ちだが、貴様は分別者だ。大した分別者だ！ お前たちの種族はみんなさうなんで、學問しなくなつてもすつかり呑みこんでゐる！ 貴様はひよつとしたら、一體この男どこか

ら金を手に入れるつもりかと、怪しく思つてゐるかも知れんが、まあ俺の部屋へ行かう——有り金全部見せてやる。それをすつかり渡してやる、俺の首から十字架を外しても構はん——たゞマレク・アデリだけは取り返してくれ、取り返してくれ！ 取り返してくれ！」

チュルトブハーノフは臆にでもかゝつたやうに慄へてゐた。汗が玉のやうに顔を傳はつて流れ、涙と交じつて髯の中に消えてゆく。彼はレイバの両手を握りしめて、拜まんばかりに頼み、接吻さへしかねない勢ひであつた……彼は前後も辨へぬほど興奮してゐた。猶太人は言葉を返して、自分には仕事があるから他國へ行くことはどうしても出来ない、云ひ譯をしようとしたけれど……いつかのこと！ チュルトブハーノフは耳を藉さうともしなかつた。仕方なしに哀れなレイバは到頭納得した。

次の日、チュルトブハーノフはレイバと一緒に百姓馬車に乗つて、ベスソーノヲ村を出發した。猶太人は稍々當惑らしい顔つきをして、片手で手摺りに握まりながら、縮まりのない身體をがたがた揺れる腰かけの上に躍らせ、片手ではしつかりと懷中を抑へてゐた。そこには新聞紙にくるんだ一束の紙幣が潜んでゐるのであつた。チュルトブハーノフは彫像のやうにどつかと腰を下ろして、たゞ眼を四方に配り、胸一杯に息をしてゐた。帯には七首がさしてゐる。

「さあ、俺と馬の仲を割いた悪黨め、今こそ用心するがいゝ！」本街道にさしかゝつた時、彼はかう呟いた。

家のことは小僧のベルフィーシカと、彼がお情けで引き取つてやつた耳の遠い飯焚き婆さんに頼んで置いた。

「俺はやがてマレク・アデリに乗つて歸つて来るぞ。」彼はこの二人と別れる時に元氣よく云つた。

「さもなけりや、決して歸つては来ないんだ！」

「さうなつたら、お前は俺の嫁にでもなるか！」と、ベルフィーシカは飯焚き婆さんの横腹を肘で突きながら、洒落のめした。「どうせ幾ら待つたつて、旦那は歸つて来なさりやしないもの、こつちは退屈でへたばつてしまふからな！」

## 九

一年……まる一年過ぎた。パンテレイ・エレメーイチについては一向に何の消息もなかつた。飯焚き婆さんは死んでしまつた。ベルフィーシカさへもすんでのことで家を捨て、町へ出ようといふ心組みをしてゐた。町には理髮師の下職をしてゐる従兄がゐて、彼をそゝのかしたのである――

と、不意に主人が歸つて来るといふ噂が擴まつた！ 教區の補祭がパンテレイ・エレメーイチから直々手紙を受け取つたが、その中には、やがてベスソーノヲに歸る心算だといふ事を知らせ、用意萬端整へておくやうに豫め召使ひの者に申し渡して欲しいといふ依頼が書いてあつた。ベルフィーシカはこの言葉を、まあ少し埃でも拂つておけ、といふ意味に解釋したが、それでもこの報らせを大して信用しなかつた。ところで四五日経つて、紛れもないパンテレイ・エレメーイチがマレク・アデリに跨がつて邸の庭に現はれた時、初めて補祭の云つたことが本當であつたと、信じないわけに行かなくなつた。

ベルフィーシカは主人の傍へ飛んで行つて、鐘を抑へながら馬から下りるのを手傳はうとしたが、こちらは自分で飛び下りて、勝ち誇つたやうな眼ざしを邊りに投げ「俺はマレク・アデリを探し出すと云つたが、ちやんとこの通り探し出したぞ、これで敵に對する面當てが出来たんだ、運命にたいする面當てが出来たんだ！」と高らかに叫んだ。ベルフィーシカは彼の傍へ寄つてその手に接吻したが、チュルトブハーノフは下男の忠義立てには目もくれなかつた。マレク・アデリの手綱を取つて引き立てながら、大股に厩の方へ歩き出した。ベルフィーシカは落ちついてちつと主人を見守つたが、怖氣づくやうな思ひであつた。「あゝ僅か一年の間になんといふ瘦せやうだ、なんと

いふ老けやうだ——それに顔も無性に殿しい凄い顔つきになつたものだ！」當り前なら、パンテレイ・エレメーイチはちやんと目的を達したのだから、喜ばなければならぬ筈であつた。又、なる程、喜んでゐるにはゐたのである……が、それなのにベルフィーシカは妙に怖氣づいて、不氣味にさへなつて來た。チュルトブハーノフは馬を元の仕切りへ入れて、軽く胸中を叩き、「さあ、これでお前もまた家へ歸れたんだぞ！ いゝか、氣をつけろよ！……」と云つた。その日早速、彼は獨り者の小作男の中から頼もしさうなのを番人に雇つて、自分はまた居間に落ちついて、普通の暮らしを始めた……。

とは云へ、何も彼も普通りといふわけではなかつた……けれど、その話はあと廻しにしよう。

歸つて來た翌日、パンテレイ・エレメーイチはベルフィーシカを呼び寄せた。他に話し相手になかつたので、マレク・ア德里を見つけ出した顔末を、この子供に物語り始めた——けれど、勿論、主人としての品格を落とさないやうに、低音で話したのである。この物語の間中、チュルトブハーノフは窓の方に顔をむけて坐つたまゝ、長いパイプで煙草を吹かしてゐた。ベルフィーシカは兩手を後ろに組んで、戸口の敷居の上に立ち——恭々しげに主人の後ろ頭をみつめながら、その物語を拜聴してゐた。聞けば、パンテレイ・エレメーイチはいろ／＼無駄骨を折つたり、あちこち乗り廻

したりした揚句、ついにロームヌイの馬市へ辿りついたが、その時はもう一人きりで、猶太人のレイバはついてゐなかつた。この男は意氣地なしのために辛抱し切れないで、逃げ出してしまつたのである。それから五日目に、もうこの地を發足するつもりで、名残りにずらりと並んでゐる馬車の間を歩いてゐると、飼料を入れた袋に繫がれた三匹の馬の間に、ふとマレク・ア德里の姿を見た！ 彼はすぐさま愛馬を見分けたし——マレク・ア德里も彼を見分けて、嘶きながら暴れ出し、蹄で地面を掘り始めたのである。「だが、彼奴はコサックが連れてゐたんぢやなくて、」と、チュルトブハーノフは相變らず首を振り向けようともせず、依然たる低音で話を續けた。「チブシイの伯樂が持つてゐたんだ。俺は云ふまでもなく、すぐさま自分の馬だとばかりしがみついて無理矢理に取り戻さうとした。ところが、チブシイの畜生奴、まるで火傷でもしたやうに、市場中へ響き渡るやうな聲で喚き立てながら、この馬はほかのチブシイから買つたのだ、これは神かけて間違ひのない事で、證人を連れて來てもいゝとまで云ひ出した……俺は面倒臭くなつたので——勝手にしやがれと思つて、金を拂つてやつた！ 肝腎なのは、生命より大事な馬を見付け出して、心の落ちつきを取り戻したといふ事で、これが何よりなんだからな。それからこんな事もあつたよ、カラチュブ郡で猶太人のレイバの言葉を眞に受けて、あるコサックに喧嘩を吹つかけて——つまり馬泥棒と聞

違へたんだ——其奴の面をいやといふ程なぐりつけてやつた。ところがコサックと思ひの外、そいつは坊さんの息子だつたので、賠償金をふんだくられてしまつた——百二十ルーブリもた。なに、金は天下の廻り持ちで、マレク・アデリがまた俺の手に歸つたといふのが何よりも有難いんだ！俺はいま仕合せだ——俺はこれから平和な暮らしを楽しむことが出来る。ところで、ベルフィーシカ、お前一つ云ひつけて置くが、もし萬が一にもこの界限でコサックの姿を見たら、早速ひと口も物を云はずに飛んで歸つて、俺に鐵砲を渡すんだぞ。さうしたら、俺は探るべき所置を心得てゐるから！」

パンテレイ・エレメーイチは、こんな風にベルフィーシカに話しをした。口ではこんな風に云つたものの、胸の中は彼が云ひ切つたほど穩かではなかつた。

悲しいかな！彼は深い心の奥底では、連れて歸つた馬が確かにマレク・アデリとは、充分に信じ切つてゐなかつたのである。

## 十

パンテレイ・エレメーイチに苦しい時が來た。他でもない、平和を楽しむといふ事が何よりも難

かしかつたのである。尤も、樂な日も時々はあつた。ふと心に湧き起こつた疑念が愚にもつかぬ囁き語のやうに思はれ、この馬鹿氣た考へを五月蠅い蠅のやうに追つ拂つた上、自分自身までも嘲り笑ふのであつた。しかし又いやな日も訪れた。執念くつきまといつて離れぬ考へが、床下の鼠のやうにそつと忍びよつて、彼の心に穴をあけたり、削つたりし始める。——そして、彼は人知れず苦しみ、悩むのであつた。あのマレク・アデリを見つけ出した思ひ出深い日には、チェルトブハーノフはただ陶然たる喜びのみを感じたものである……が、運よく見つけ出した馬の傍で一夜を過ごした後、翌る朝、旅籠屋の低い庇の下で鞍を置きにかゝつた時、初めて何か彼の心をちくりと刺した……彼はたゞ頭を振つたが——それでも、とにかく種は蒔かれたのである。家路をさして歸る道すがら（それは一週間ほど續いた）、この疑惑はあまり眼を覺まさなかつた。たゞベスソーノフに歸りついで、元の紛れもないマレク・アデリが棲んでゐた土地に踏み込むが早い、疑惑はいよ／＼強く、いよ／＼明瞭な形を取つて來た……歸りの道中は主に並み足で、ゆらり／＼と馬を進め、四邊の景色などを眺め、短いパイプで煙草をふかしながら、何一つ考へようとしなかつた。たゞ時々「チェルトブハーノフの一統は、かうと思ひ立つたら何でも仕送げるのだ！どんなものだい！」と考へて、北叟笑む位なものであつた。ところが、さて家へ歸つて見ると、話が別になつて來た。無論、

彼はこれらすべての事を自分の心一つに疊んでゐた。たゞ自尊心だけからいつても、心中の不安を表に現はすわけにゆかなかつたのである。たとへ誰にもせよ、今度の新らしいマレク・アデリが元のは違ふやうだなどと、遠廻しにでも仄めかす者があつたら、彼はそいつを『眞二つに引き裂いた』であらう。彼は偶々顔を合はせた少數の人から『運よく見つかつた』お祝の言葉を受けたが、自ら進んでそのやうな祝辭を求めようとしなかつた。それどころか、前にもまして人と顔を合せるのを避けた——よくない兆しである！ 彼は絶えずへもしそんな云ひ方が出来るはずれば、マレク・アデリを試験してみた。どこか少し遠い野原へ乗つて行つて試してみたり、そつと厩へ入りこんで内から戸に鍵をかけ、馬の鼻先に突つ立つてその眼を覗きこみながら、低聲に『本當にお前か？ お前か？ お前か？……』と、訊ねてみたり、それかと思ふと、幾時間も無言のまゝちつと、と見かう見して、時にはさも嬉し氣に、『さうだ！ あれだ！ あれに違ひないとも！』と呟いたり、時には腑に落ちぬ様子で當惑らしく立ち盡くすのであつた。

チェルトブハーノフを主に當惑させたのは、このマレク・アデリと、あのマレク・アデリとの外面的な相違ではなかつた……尤も、その相違は極く少なかつた。あれの方は、尾と鬣がやゝ薄く耳がもう少し尖つて、膝關節が多少短めで、眼がもつと明るかつた——が、それはたゞそんな氣がす

るだけかも知れない。チェルトブハーノフを當惑させたのは、云はゞ精神的な相違であつた。あれの習慣はこれと違つて、萬事につけて癖がまるで別であつた。例へば、あのマレク・アデリはチェルトブハーノフが厩に入るや否や、いつも四邊を見廻して軽く嘶いたものである。ところがこれは平氣で済まして秣をもり／＼喰んでゐるか、でなければ首を垂れて假睡んでゐる。一匹とも主人が鞍から飛び下りる時はびくともせず立つてはゐるが、あれは呼ばれるとすぐ聲のする方へ行つたのに、これは切株のやうに何時までも突つ立つたまゝである。あれも同じやうに早く駛つたが、しかし、もつと高く、もつと大股に跳ね上がった。これは並み足の時はあれよりもゆつたりと歩くけれど、跑足になるとやゝ搖れ氣味で——どうかすると蹄鐵を『がちやつかせた』——つまり、後足と前足をぶつけるのである。あれは決してこんな無様な事をしなかつた。——とんでもない事だ！ 此れは——と、こんな考へがチェルトブハーノフの心に浮かんだ——いつも耳をびく／＼動かし、馬鹿々々しい氣がするくらゐだが、あれはその反對に左耳を後ろに寝かして、ちつとそのまゝにしながら主人を見守つてゐる！ あれは自分の廻りが綺麗でないと見ると、すぐさま後足で厩の壁を蹴る。が、これは假令腹につきさうなほど糞を積み上げられても平氣なものである。あれは、例へば向かひ風に立たせると、胸一杯に息をついて全身を慄はせるが、これはほんの鼻を鳴らすば

かりである。あれは雨降りの濕氣を氣にしたものだが、これは平氣の平左である……こちらの方ががさつだ、ずつとさがつだ！ あれほど氣持ちのいい所がないし、手綱捌きにも敏感でない——それは云ふまでもない事だ！ あれは可愛い馬だつたが、これは……

チェルトブハーノフは時々こんな事を考へた。かういふ考へが湧くと、すぐに悲痛な氣持ちに襲はれた。その代り又ある時は、耕されたばかりの畑を全速力で飛ばしたり、雨に洗はれた谷のどん底へ跳び下りさせ、また一番峻しい所を選んで駆け上がらせる。すると、彼の心は歡喜のあまり痺れるばかりで、聲高な叫びが口をついて出る。彼ははつきりと間違ひなく信じこむのである。今乗つてゐるのこそ、疑ひもなく真正正銘のマレク・アデリだ。これだけの事の出来る馬が他に又とあらうか？

とは云ふものの、かういふ時でも厄介な事や、いやな事なしには濟まなかつた。長い間、マレク・アデリを探し廻つたので、チェルトブハーノフはかなり金を使つてしまつた。コストローマ種の獵犬のことなぞもう綺麗に諦めてしまつて、相變らずたつた一人で近在を乗り廻してゐた。ところがある朝、ベスソーノフから五露里ばかり離れた所で、一年半前にあれほど鮮かな乗馬ぶりを見せた例の公爵の狩獵隊に、チェルトブハーノフはばつたり出逢つた。しかも、まるでわざとのやう

にこんな事が持ち上がったのである。丁度あの時と同じやうに、今度も不意に一匹の野兎がゆるい丘の地境の蔭から飛び出して、大共の前に現はれた！ 『それ掴まへろ、それ！』とばかり狩獵隊の一同はその後を追つて駆け出した。チェルトブハーノフも同じやうに駆け出したが、他の連中と一緒に緒でなく、二百歩ばかりの脇の方へ離れた所で——これもあの時とまるで同じやうであつた。出水に洗はれた大きな窪みが坂を斜めに横切つて、上へあがるに従つて次第に狭くなりながら、チェルトブハーノフの行く手を遮つてゐた。これから一跳びに飛び越さうといふところ——一年半前に、しんじつ見事に飛び越したところは、それでもまだ幅八歩ばかり、深さ二間ほどあつた。勝利、不思議にもまた繰り返されようとしてゐる勝利を豫感して、チェルトブハーノフは凱歌を奏するやうに聲高く叫んで、鞭をふり廻した。——獵人たちも馬を駛らせながら、この水際立つた騎手から眼を離さないでゐた。——彼の馬は箭のやうに飛んでゆく——いよく割れ目はもう鼻先きに迫つた。

さあ、さあ、あの時のやうにたつた一跳びで……  
けれど、マレク・アデリは急に前足を突つ張つて立ち止まり、くるりと左に向きを變へて、崖ぶちに沿うて馳り出した。チェルトブハーノフがどんなに割れ目の方へ手綱をしゃくつて首を向けさせようとしても、一向に素知らぬ顔である……

怖気がついたので。つまり、自信がなかつたのだ！

その時、チュルトブハーノフは羞恥と憤怒に燃え立つて、殆んど泣かぬばかりに手綱をゆるめ、たゞ前へ前へと馬を追つて坂道を駈け上がった。少しも早く狩獵隊の傍を離れたい、一行の嘲笑を耳にしたくない、一刻も早く彼等の呪はしい眼から遁れたい！

兩の脇腹を傷だらけにして、全身汗の泡にまみれながら、マレク・アデリは我が家へ駈けつけた、チュルトブハーノフはすぐに居間へ閉ぢ籠つた。

『いや、ちがふ、あれは俺の仲よしぢやない！ あれは頸の骨を折つたつて、俺に恥をかゝせるやうな事をしやしない！』

## 十一

やがて次のやうな出来事が、遂にチュルトブハーノフを所謂『ベしやんこ』にしてしまつたのである。ある時、彼はマレク・アデリに乗つて、ベスソーノフ村の所屬してゐる教區の會堂を圍む僧侶の領地裏を通つてゐた。コサック帽子を目深に被り、猫背になつて、兩手を鞍の前輪に落としたまゝ、彼はゆる／＼と進んで行つた。心の中は浮かぬ氣持でどんより濁つてゐた。不意に誰か彼の

名を呼ぶ者があつた。

彼は馬をとめて、頭を上げてみると、かねて話し相手にしてゐる補祭であつた。茶色の三角頭巾を、小さく編み下げにした髷色の頭髮に被り、黄色つばい南京木綿の長上着をまとひ、水色の布つ端を腰よりずつと下に締めたこの祭壇の使徒は、自分の『領地』を見に出て來たのであるが、パン・トレイ・エレメイイチを見かけたので、一應の敬意を表して、序でに何かをねだるのが自分の義務だと心得た。御存じの通り、桑門の人はかういふ下心なしには、俗世の人に話しかけないものである。

しかし、チュルトブハーノフは補祭を相手にするどころではなかつた。相手の會釋にほんのお義理で答禮をし、何やら口の中でぶつ／＼云つただけで、もう鞭を振らうとした……

「ときに、あなたの馬は實に豪勢なものですな！」と補祭は急いで云ひ出した。「これこそもう全く自慢の種になりますな。誠にあなたは大それた智者で、なんの事はない、獅子のやうですわい！」補祭は名うての雄辯家であつた。そのためひどく司祭にうるさがられてゐた。この司祭は生まれつきの口下手で、酒を飲んでも舌の紐が解けなかつたのである。「悪人どもの企みで生き物を一匹失くされたが、」と補祭は言葉を續けた。「聊かも落膽されないばかりか、反つて一そう神様の

攝理に頼みをかけて、また代りを手にお入れたすつた。少しも前のに劣らないばかりか、或ひは立ち優つてゐるかと思はれる位……それといふのも……」

「何を出鱈目いつてゐるんだ？」と、チェルトブハーフは佛頂面で遮つた。「代りの馬とは何事だ？　これはあれと同じ馬ぢやないか、これはマレク・アデリだ……俺が探したんだ。無暗なことを喋るな……」

「おや！　おや！　おや！　おや」補祭は指で髯を弄り、色の薄い貪慾らしい眼でチェルトブハーフを見廻しながら、引き延ばすやうに間を置いて、かう云ひ出した。「それは一體どういふわけですか、あなた？　あなたの馬が盗まれたのは、たしか去年の聖母祭から二週間ばかり経つた時間で、今は十一月もそろ／＼終らうといふ頃ぢやありませんか？」

「うむ、さうさ。それならどうしたといふんだ？」

補祭は相も變らず、指で髯を弄り廻しながら、  
「それはかういふわけなんで、あれからもう一年あまり経つてゐるが、あなたの馬はあの時分灰色の石垣馬だつたけれど、未だに同じ毛色をしてゐる。いや、それどころか、反つて濃くなつた位だ。一體それはどうしたわけでせうな？　灰色の馬といふものは、一年経つたらずつと白くなるも

のだが。」

チェルトブハーフはぎくつとした……まるで誰かが猪突き槍で心臓の眞上を一突きくれたやう。なるほど、灰色の馬はだん／＼毛並みが變るものだ！　どうして、こんな分かりきつた事が今まで心に浮かんで來なかつたのだらう？

「この忌々しい豚の尻尾め！　退きやがれ！」と、彼は物狂はしく眼を輝かしながら、だしぬけに一聲呶鳴ると——忽ち、呆氣にとられた補祭の眼の前から姿を消してしまつた。

あゝ！　何もかもお終ひだ！

今こそ、本當に何もかもお終ひだ！　すべてが水の泡となつた。最後の切り札が殺されてしまつた！　何もかもが、この『白くなる』といふ一言で、立ちどころに崩れ落ちたのだ！

灰色の馬は白くなる！

駛れ、いくらでも駛れ、こん畜生！　けれども、この一言から遁れるわけにはゆかないのだ！　チェルトブハーフは我が家に駆けつけると、また一室に閉ぢ籠つてしまつた。



このやくざ馬がマレク・アデリである筈はない。こいつとマレク・アデリの間には、毛筋ほども似通つたところはない。誰でも幾らか馬のことを知つた人間なら、一目でそれ位の事を見分けなければならぬ筈だ。パンテレイ・チュルトブハーノフともあらう人間が、見苦しく一杯喰つてしまつたのだ——いや！ わざと初めから我れと我が身を欺いて、自分の眼を晦ましてゐたのだ——今となつて見ると、これにはもう疑ふ餘地もない！ チュルトブハーノフは部屋の中を歩きつ戻りつしながら、檻の中の野獸のやうに、壁の際まで行く度に同じやうな恰好でくると踵を返してゐた。彼の誇りの強い心は堪へ難いまでに痛み憫んだ。しかし、彼を苦しめてゐたのは傷つけられた自尊心ばかりではなかつた。絶望の念が彼の全幅を領し、憤怒に息づまりさうになり、復讐の渴望が激しく燃え立つた。けれど相手は誰か？ 誰に復讐するのか？ 猶太人か、ヤッフか、マーシヤか、補祭か、泥棒のコサックか、近所の地主連か、世界中の人間か、それともどいつまりは自身？ 彼は心も眩む思ひがした。最後の切り札が殺されたのだ！（この比較は彼の氣に入つた）かうして、彼は又と類のないやくざ者、誰よりも一番淺ましい人間、世界の笑ひ草、豌豆畑の案山子、手のつけられない馬鹿者で、あの補祭の奴のいゝ罵り者になつてしまつた……彼は心に描いてみた——あの忌々しい豚の尻尾が、いつまでも灰色である馬のことだの、お目出度い旦那のことだ

のを話してゐる有様を、まさしくと思ひ浮かべた……あゝ、なんといふ浮かべられない事だ!!……チュルトブハーノフはこみ上げて来る并癩を抑へつけようとしたが、その骨折も空しかつた。この……馬は、よしんばマレク・アデリでない迄も、しかし何と云つたつて……名馬には相違なく、先々も永いあひだ役に立つかも知れないと、自分で自分に云ひ聞かせようとしてみたが、それもやはり駄目だつた。彼はすぐさま憤然と、こんな考へを吹つ飛ばしてしまつた。あのマレク・アデリに對しては、もうそれでなくてさへ済まない氣がしてゐるのに、こんな事を考へるのは、あの愛馬に對して新たに侮辱を加へることになる……さうとも！ このやくざな代物を、この驚馬を、自分はまるで盲目か阿呆のやうに、あのマレク・アデリと等し並みにしてゐたのだ！ このやくざ馬がまだ自分の役に立つとしたところで、……二度とあんな奴に乗つてやるものか？ 金輪際！ 決して決して!! 韃靼人にくれてやるか、犬の餌食にしてしまふかだ——それより他には何の値打ちもなし……さうだ！ それが一番だ！

二時間あまりも、チュルトブハーノフは居間を歩きつ戻りつしつとけた。

「ベルフィーシカ！」と彼はだしぬけに號令をかけた。「これからすぐに酒屋へ行つて、火酒を三四升取つて来い！ 分かつたか？ 三四升だぞ、さあ早く！ 今すぐこの俺の卓の上に火酒の壺を

載せるんだぞ！」

火酒は一刻の猶豫もなく、パンテレイ・エレメーイチの卓の上に現はれた。彼は早速あふり始めた！

### 十三

もしその時チュルトプハーノフを一目見た者があつたら、彼が氣難かしさうな疝癩顔でコップ酒を後から後からと飲み乾してゐる有様を隙見する者があつたら——たしかに、思はず慄然としたに相違ない。やがて夜ともなれば、安蠟燭が卓の上にぼんやりと燃え始める。チュルトプハーノフは隅から隅へと彷徨ひ歩くのをやめてしまつた。彼は眞つ赤な顔をして坐つたまゝ、どんより濁つた眼を、時には足もとへ落したり、時にはちいつと暗い窓に注いでゐた。彼は立ち上がつて火酒を注ぎ、ぐいと呷つて、又もや腰を下ろし、又もや一つの點に視線を注いで、身じろぎもしない——たゞ息遣ひが段々せはしくなつて、顔がいよ／＼赧くなつていつた。どうやら、彼の腹では或る決心が固まつてゆくらしかつた。その決心はさすがに彼をどきまぎさせたが、彼はだん／＼それにも馴れていつた。いつまでもいつまでも同じ想念が、執拗に、絶え間なく、じり／＼と迫つて来て、

同じ光景が彼の眼の前に愈々はつきりと描かれて来る。そして、亂酔の灼熱したやうな重味に壓されて、心の中の苛立たしい疝癩が、もう野獸のやうに殘忍な氣持ちと入れ變つた。不吉な薄笑ひが唇の邊に浮かんで来る。

『さあ、それにしても、そろ／＼いゝ時分だ！』と彼は何かの事務にでも取りかゝるやうな、いくらか面倒臭さうな調子でかう云つた。『もういゝ加減ぐ／＼したからな！』

彼は最後の一杯を飲み乾して、寢臺の上にかけてあつた拳銃を下ろした。——例のマーシャを狙つて撃つた拳銃である。装填したが、『萬一の用意』に尙幾つかの藥筒をポケットに入れて——さて、既の方へ足に向けた。

戸を開けようとした時に、番人が急いで飛んで來たけれど、彼は『おれだ！それが見えんのか？ 彼方へ行け！』と呶鳴りつけた。番人は少しばかり臨へよつた。『行つて寝ろ！』と、チュルトプハーノフはまた呶鳴つた。『こんなものを番せんでもいゝ！珍らしくもない、どんな寶物だと云ふのだ！』かう云つて彼は既へ入つた。マレク・アデリ……寶物のマレク・アデリは敷藁の上に寝そべつてゐた。チュルトプハーノフは足でどんと蹴つて、『起きろ、この鈍つく！』と云つた。それから輪索を秣槽から外し、馬衣を取つて地べたへ投げ出した——次に、おとなしくされる

まゝになつてゐる馬を仕切りの中でいけぞんざいに廻して厩から庭に引き出し、番人が呆れ返つてゐるのを尻目にかけて、庭から野原へ曳いて行つた。番人は轡もかけない馬を、夜夜中どこへ連れてゆく心算なのか、とんと合點がゆかなかつた。旦那に譯を訊くのは無論おつかない。彼は旦那の姿が近くの森に通ずる道の曲り角で消えるまで、ちつと見送るばかりであつた。

#### 十四

チュルトプハーノフは立ち止まらうとしなければ、後を振り返らうともせず、大跨にどん／＼歩いて行つた。マレク・アデリは——最後までこの名で呼ぶことにしよう——おとなしくその後からついて行く。可成り明るい夜であつた。チュルトプハーノフは、行く手に黒く連なつてゐる森の齒型になつた輪廓を、はつきり見分けることが出来た。夜寒が身に沁みただので、今しがた飲んだ火酒の酔ひが確かに發して来る筈であつたが、しかし……しかし、それよりも更に強い別な酔ひが、すつかり彼を包んでしまつたのである。頭は重くなり、血はずきん／＼と咽喉もとから耳にかけて鳴つてゐたが、彼はしつかりした足取りで歩き続けた。どこへゆくつもりか、それもはつきり承知してゐたのである。

彼はマレク・アデリを殺さうと決心した。まる一日、この事ばかり考へてゐたが……今はもう腹が決まつた！

彼は落ちつき拂つてゐたわけではないけれど、義務觀念に従つて事をなす人のやうに、確乎たる自信をもつて、ひたむきにこの決心に向かつて進んだ。この『藝當』は彼の眼に『雜作もないこと』に思はれた。——名馬の名を僭するものを殺してしまへば、立ち所に『一切』を清算し、愚かな眞似をした己れ自身を罰することにもなり、本物の愛馬に對する申し譯も立ち、『世間全體』に對して(チュルトプハーノフは『世間全體』のことをひどく氣にしてゐたので)、俺様に巫山戯た眞似をするわけにいかないぞ、さういふ氣持を思ひ知らせることもなる……が、それより一番肝腎なのは、贗物と一緒に我れと我が身をも片附けてしまふといふ事だ。全くこのうへ何しに生き存らへよう？ かういふ様々な思案がどろして彼の頭にうまく納まつたのか、何故それがかくまで無雜作に思はれたか——容易に説明することは出来ないけれど、全く不可能といふ譯ではない。人から侮辱を受け、心を打ち明けるべき身内の者もない無一文の獨り者、おまけに酒で血潮の燃え立つたチュルトプハーノフは、今や狂氣に近い状態になつてゐるのである。それに、發狂した人間がどんなに馬鹿氣な突飛な眞似をしても、當人の眼から見れば、自分流儀の論理もあれば、權利さへも

ある。それは疑ふべくもない。とまれチュルトブハーノフは自分の権利をどこまでも信じ切つてゐた。彼は躊躇する事なく、直ちに罪ある者にたいする宣告を執行しようとした。とは云へ、いつた誰のことを罪あるものと呼んでゐるのか、我ながらはつきりしなかつた、實のところを云ふと、彼はこれからしようとしてゐる事をよくも考へて見なかつたのである。「片附けなくちやならん、片附けなくちや。」これが鈍い頭で、儼然と、繰り返し繰り返し獨り言ちた事である。「片附けなくちや！」

罪なくして罪をきせられた馬は、彼の後からおとなしく小刻みに走つて行つた……けれど、チュルトブハーノフの胸には憐憫の情など影もなかつた。

### 十五

漸く馬を連れて來た森の端れから程遠からぬ所に、若い樺の繁みに半ば包まれた小さな谷が延びてゐた。チュルトブハーノフはそこへ下りてゆく……マレク・アデリは物に跪いて、危く彼の上に倒れかゝりさうになつた。

「やい、おれを押しつぶす氣だな、こん畜生！」と、チュルトブハーノフは叫んで——宛然自分の

身を守らうとでもするやうに、かくしから拳銃を掴み出した。もう彼の全幅を領してゐたのは狂暴な氣持ちではなく、よく犯罪を遂行しようといふ前に人を襲ふと云はれてゐる一種特別な感情の麻痺状態であつた。けれども、彼は自分で自分の聲にびつくりした——暗い木の枝の蔽ひ被さつた下、木深い谷に満ちてゐる朽木の蒸れたやうな匂ひの中で、彼の聲は何とも云へないほど氣疎く響いたのである！ その上、彼の叫びに應じて、何かしら大きな鳥が頭の眞上の木の頂きで不意に羽ばたきをした。チュルトブハーノフは身慄ひした。さながら、彼は自分の行ひを見せるために、わざ／＼證人を起こしたやうなものだ——しかも、場所もあらうに！ たゞ一匹の生物にも出逢つてはならぬ筈の、かうした寂しい場所……

「さあ、どこへでも勝手に失せろ、畜生！」と、彼は齒を喰ひ絞つたまゝ云つた。——それからマレク・アデリの手綱を放して、拳銃の臺尻で肩のあたりを力任せに撲りつけた。マレク・アデリは忽ちくるりと向きをかへ、坂を攀ちのぼつて谷を出ると……そのまゝ駈け出した。けれど、その蹄の音が聞こえてゐたのは暫くの間で、吹き起こつた風があらゆる物音を掻きまぜ、押し包んでしまつた。

やがて今度は、チュルトブハーノフがゆつくり谷間を出て、森の端れまでつくと、とぼくと家

路をさして歩き出した。彼は自分に不満を感じてゐた。頭と胸に感じてゐた重苦しさが手足にまで擴がつて行く。腹立たしい、暗澹とした、物足りない気持ちで、すき腹を抱へながら歩いた。まるで誰かに辱かしめられ、獲物も食べ物も奪れたかのやう……

自殺の決心を妨げられた人ならば、かうした気持ちがかかるであらう。

不意に何か後ろから両肩の真ん中邊を突いたものがある。彼は振り返つた……マレク・アデリが道の真ん中に立つてゐる。主人の後からついて来て、鼻面でさはり……自分のゐることを知らせたのである……

「あゝ！」と、チュルトブハーノフは叫んだ。「貴様は自分で自分から殺されに來たんだな！ それなら、よし、かうしてくれる！」

瞬くひまに彼は拳銃を取り出し、引き金を上げると、銃口をマレク・アデリの額に押しあて、そのまま發射した……

哀れな馬は、脇へ飛び退いたと思ふと、後足で棒立ちになり、十歩ばかり駆け出したが、急に重々しく横倒しになつて、痙攣でも起こしたやうに地面をのたうちながら、かすれた息遣ひをはじめた……

チュルトブハーノフは両手で耳に蓋をして、すたく／＼駆け出した。膝がかく／＼する。酒の酔ひも、怖ろしさも、漠然とした自信も——何もかも一時に消し飛んでしまつた。後に残つたのはたゞ羞恥と醜惡の感じばかり——それに一つの意識、今度こそはいよく自分自身をも片付けてしまつたといふ、疑ふ餘地もない明瞭な意識であつた。

## 十六

六週間ばかり経つて、小僧のベルフィーシカは折ふしベスソーノフの屋敷の前を通りかゝつた駐在所の警部を呼びとめた、それを自分の義務と思つたので。

「何用だ？」と、警官が訊ねた。

「どうぞ旦那、手前どもの家へお寄りを。」と、小僧は小腰を屈めて會釋しながら答へた。「パンテレイ・エレメイイチが、どうも死ぬるおつもりらしいので、それで、實はわたくしも心配なのです。」

「なんだと？ 死ぬるつもりだと？」と、警部は問ひ返した。

「はい、さよで。初めの間は毎日のやうに火酒を召し上がつて居りましたが、今度は、それ、床

に就いておしまひになつて、すつかりもう瘦せさらばうてしまはれました。どうやら、旦那は今なにんもお分かりにならんやうな按配でして。まるつきり口をお利きになりません。」

警部は馬車から下りて來た。

「どうだな、いくらなんでも、坊さんぐらゐは呼びに行つたんだらうな？　旦那は懺悔を済ましたのか？　聖餐は受けたのか？」

「いんえ、なんにもしてありません。」

警部は眉をひそめた。

「それは一體どうしたといふ事だ、え？　そんな事があつてよいものか——あん？　一體お前は知らんのか……そんな事をする……大變な責任問題になるんだぞ——あん？」

「實は、一昨日も昨日も、それをお訊ねしましたんで。」と、怖氣づいた小僧はすかさず答へた。

『パンテレイ・エレメーイチ、坊さんを迎へに一走り行つて來なくてもよろしうがすか？』と申したんですが、旦那の仰つしやるには『黙れ、馬鹿。餘計な口出しをするな。』と、かうなんがす。ところが今日は、私が何か話しかけても——たゞじろつと私の顔を見て——髭をひく／＼となさるばかりで。」

「火酒は大分飲んだのか？」と警部が訊ねた。

「滅法界もない飲み方でした！——まあ、とにかく旦那、お願ひですから家へ入つて御覽なすつて。」

「なら、案内しろ！」と、警部は不機嫌さうに口の中で云つて、ベルフィーシカの後について行つた。

驚くべき光景が彼を待ち受けてゐた。

屋敷の中でも奥まつた所にある濕つぼうす暗い部屋の中で、馬衣をかけた見窄らしい寢臺の上に、けば立つた外套を枕にして、チェルトブハーノフが横たはつてゐた。その顔色はもう、蒼ざめてゐるといふより死人のやうな黄ばんだ緑色で、眼は鉛色の光澤を帯びた瞼の下に落ち窪み、蓬々とのびた口髭の上には、今でも赤味を帯びた鼻が尖つてゐる。相變らず、胸に藥筒さしのついた短上着を着て、チケルケス風の青い廣ズボンを穿いて寝てゐる。天邊の眞つ赤な毛皮帽子が眉ぎはまで額を隠してゐる。チェルトブハーノフは片手に狩獵用の鞭を握り、いま一方の手には繻ひのある煙草入れを持つてゐた——マーシャの最後の贈物である。寢臺のわきの卓の上には、空になつた火酒の壺が置いてあり、枕もとの壁には二枚の水彩畫がピンで留めてある。一枚は、どうも見たと

ここでは、ギターを手にした肥つた男を描いてあつたが、——恐らくネドビュースキンでもあらう。もう一枚の方には疾駆する騎手の姿が描かれてゐる……馬は、子供らが壁や塀に樂書きするやうな、あの昔話に出て来る動物に似てゐたが、克明にぼかしてある馬の石垣模様や騎手の胸についてゐる薬筒さしや、長靴の尖つた爪先きや、矢鱈に大きな口髭などから推して見れば、疑ひもなくこの繪は、マレク・アデリに跨がつたパンテレイ・エレメーイチを描いたつもりに相違ない。

呆氣にとられた警部は、どうしたらいいか分からなかつた。死のやうな静寂が部屋の中を領してゐる。「いやあ、これはもう死んでゐるわい。」と考へたが、聲を張り上げて呼びかけた。

「パンテレイ・エレメーイチ！ おい、パンテレイ・エレメーイチ！」

その時、竝々ならぬ事が起こつた。チュルトブハーノフの眼が静かに開いて、火の消えたやうな腫が、先づ右から左へ、次に左から右に動いて、客のところまでびつたり止まつた。その姿を見分けたのだ……どんよりした白眼の中に何かちらついたと思ふと、どうやら視線らしいものが浮かび出した。紫色になつた唇が次第に離れて、それこそ、全く棺の中から洩れるやうな嘎れた聲が聞こえた。

「由緒ある貴族、パンテレイ・チュルトブハーノフが死んで行くのだ。よもや誰もその邪魔は出来

まい？——俺は誰にも借りもなければ、貸しもない……打つ棄つといてくれ、みんな！ 行つてくれ！」

鞭を持つた手を上げようとした……が、云ふことをきかない！ 唇は再び粘りついて、眼は眼ぢられた——そして前と同じく、チュルトブハーノフは叩きつけられたやうに身を伸ばし、踵をびつたりつけたまゝ、ごつ／＼した寢臺の上に横たはつてゐた。

「息を引き取つたら知らせてくれ。」と警部は部屋を出て行きながら、ペルフィーシカに囁いた。

「ところで、坊さんは今から呼びに行つても構はんと思ふがな。なんといつても式は守らんけりやならん、聖油禮をしてやるんだ。」

ペルフィーシカはその日、早速坊さん呼びに出かけた。そして、翌朝は警部に知らせなければならぬ事になつた。パンテレイ・エレメーイチはその夜の中に息を引き取つたのである。

葬式の時、彼の棺を見送つたのは、小僧のペルフィーシカと、モシエル・レイバの二人きりであつた。チュルトブハーノフの訃報が、どうしたわけか、この猶太人の耳に入つたので——彼は恩人に對する最後の義務を怠らなかつたのである。

## 生きた御遺骸

長き忍苦にみちたる郷土——

露西亞の民の國よ、いましは！

フョードル・チュツチエフ

佛蘭西の諺のいふところに依ると、「乾いた漁師と濡れた獵人の姿ほど世にも哀れなものはない」とのことである。私はまだ魚とりを道樂にしたことがないので、晴れたいと日和に漁師がどんな氣持を味はふものか、また天氣の悪い日に漁が澤山あつたら、その嬉しさがどのくらゐ濡れ鼠の不快さを紛らしてくれるものか、何とも見當がつかかねる。しかしとにかく、雨といふやつは獵人に取つて全く災難である。丁度この種類の災難に私は出くはした。それは或る時、エルモライを連れて、松雞を撃ちにベールフ郡へ行つた時のことである。まだ夜の引き明けから雨は小止みなしに降り續けた。この災難を除けるために、ありとあらゆる方法を盡してみた！ 護謨びきの合羽を頭からすつぽり被りもしたし、なるべく雨の滴に打たれまいと、木の下蔭に佇んでもみたが……雨合

羽の方は、鐵砲を打つ邪魔になつたことは云ひ立てないにしても、臆面もなく平氣で水を浸すし、木蔭は又、なるほど初めのうちは、雨の雫が落ちて來ないやうに思はれたけれど、やがてその中に、叢葉に溜まつた水が急にどつとこぼれて、枝といふ枝が樋の栓を抜いたやうな溜しぶきを頭の上から落とすので、冷たい水がネクタイの下を潜り、背筋を傳はつて流れるのであつた……これはエルモライの言葉を借りると、「いよくのどんづまり」であつた！

「いや、ビョートル・ペトロギッチ」到頭彼はかう云ひ出した。「これちや仕様がありませんや！ 今日、獵は駄目ですぜ。犬は濡れて鼻が利かなくなるし、鐵砲は火がつかねえ……ちよつ！ お話になりやしねえ！」

「どうしたものかな？」と私は訊ねた。

「かうませうよ。アレクセーエフカへ参りやせう。旦那は御存じないかも知りませんが——ちよつとした農場があまりましてな、旦那の御母さまの所有になつてをります。こゝから八露里ばかりのところ。今夜はそとで泊つて、明日になつたら……」

「こゝへ引つ返すか？」

「いんえ、こゝへ歸るんちやありません……アレクセーエフカの先きにわつしの知つたところがあ



りましてね……松雞をやるにや、こゝよりずつといふ所なんで！」

私はこの忠實な伴の男に、それくらゐなら何故いきなりそこへ案内しなかつたか、などと押して訊ねようとはしなかつた。そして、その日の中に母の所有になつてゐる農場へ辿りついた。正直な話、そんなものがあらうなどとは、今まで私は夢にも知らなかつたのである。この農場には小さな離家がついてゐて、かなり古びてはゐたけれど、誰も人が住んでゐなかつたので、従つてさつぱりしてゐた。私はそこで極めて穩かな一夜を過ごした。

翌日は思ひ切り早く眼を醒ました。太陽は今しがた昇つたばかりで、空には雲の翳さへなかつた。あたりには、烈しい光りが二重になつて照り輝いてゐた。若々しい朝の光りと、まだ乾きもやらぬ昨日の夕立ちの反射なのである。小馬車の用意をしてゐる間に、小さな庭をそゞろ歩きに出かけた。嘗ては果樹園であつたのが、今はたゞ荒れるに任してゐる。でも、蒸りの高い水々しい叢葉が四方から離れを取り圍んでゐた。あゝ、外氣の中の快さ、頭の上には青空が擴がり、雲雀が鳴いて、鈴のやうな囀りが小さな銀の玉でも振り撒くやうに虚空から降つて来る！ 彼らはきつと翼の上に露の滴を載せて行つたに違ひない。その歌聲は露をそゝいだやうに思はれる。私は帽子までぬいで、悦びの胸を一杯に張つて息をした……餘り深くない谷の斜面に、結びめぐらした柴垣のすぐ

傍に養蜂場が見える。一と筋の細徑が、高草や葎麻が壁その儘に密生し、ゐる間を蛇のやうに蜿蜒しながらそこへ通じてゐる。雑草の上には、どこから種子を運ばれたのか、暗綠色をした大麻の莖が高く聳えてゐる。

この徑つたひに歩いて行くと、養蜂場へ出た。その傍には柴を編んで造つた納屋があつた。冬、蜜蜂の巢を入れて置く、いはゆる「圍ひ」である。私は半ば開いた戸口を覗いて見た。中は暗く、ひっそりとして、乾き切つてゐる。薄荷や蜜蜂の匂ひがする。片隅には板の間が設けられて、その上に何やら蒲團にくるまつた小さな物の形が見える……私は出て行かうとした……

「旦那さま、もし、旦那さま！ ビョートル・ベトロギーチ！」沼の音のそよぎのやうに弱々しい、ゆつたりした、嘎れ聲が聞こえた。

私は足を停めた。

「ビョートル・ベトロギーチ！ どうぞ、こちらへいらしつて！」と、いふ聲がまた聞こえる。それは、私が目をつけた例の板の間から響いて來るのであつた。

私はそばへ寄つて見て——驚きのあまり棒のやうに立ち辣んだ。私の前には生きた人間が臥てゐたのである。しかし、これは一體なものだらう？

顔はすつかり菱び切つて、たゞ一様に青銅色をして、どう見ても粉れのない——昔風の描き方をした、聖像のやうであつた。鼻は剃刀の刃のやうに尖つて、唇は殆んど見分けられない位で、たゞ齒と眼ばかりが白く目立ち、頭を縛つた布の下からは、乏しい黄色い髪が額にはみ出してゐる。額の邊まで被さつてゐる蒲團の襲の下から、小枝のやうな指をゆる／＼と爪練りながら、同じく青銅色をした小さな両手が動いてゐる。私はなほも眼を据ゑて見た。その顔は醜くないばかりでなく、却つて美しいくらいであつたが——しかし物凄、並み外れたものであつた。その上、この顔が金屬のやうな感じのする頬のあたりに、微笑みを擴げようともがき……もがいてゐるのを見て、一しほ恐ろしく思はれたのである。

「わたしがお分かりになりませんか、旦那さま？」とまた同じ聲が囁いた。その聲は動くか動かないか見分けられないほどの唇から、湯氣のやうに吐き出されるかと思はれた。一そに又、お分かりにならう道理がありません！ 私はルケリヤでございます……覚えていらつしやいますか、あのスバスコエのお母さまのところへ輪踊りの音頭取りをいたしました……お覚えをいらつしやいますか、わたしはその上に合唱の方も音頭を勤めてをりましたか？」

「ルケリヤ！」と私は叫んだ。「お前だつたのかい？ まさかどうも！」

「わたし、さうなのでございますよ、旦那さま——わたし、わたしルケリヤでございます。」  
私は何と云つていゝか分からず、薄色の死んだやうな眼をこちらに注いでゐる。このどす黒いちつと動かぬ顔を、呆然として購めてゐた。これが果たして有り得ることだらうか？ この木乃伊がルケリヤだとは——あの背が高くして色の白い、頬のあか／＼とした、笑ひ上戸の踊り好き、そして歌の名人で、邸中でも一番の美人であつたルケリヤ！ 村の若い衆がみんな後を追ひ廻した利巧者のルケリヤ、私自身まだ十六歳の少年の頃、ひそかに憧れの対象にしてゐたあのルケリヤだとは！

「飛んでもないことを、ルケリヤ、」私はやつとのことで口を切つた。「一體それはお前どうしたんだね？」

「とんでもない災難が降りかゝりましてね！ どうかあなた、つまらない事ではございますが、旦那さま、お厭でもわたしの不仕合せな身の上話を聞いてやつて下さいまし。まあ、その桶へお掛けなすつて、もつと近く、でない、わたしの聲がお聞こえになりませんか。でも、わたしずるぶん聲が出るやうになりましたわ！——それはさうと、あなた様にお眼にかゝれて、こんな嬉しいこととございますせん！ 一體どうして、こゝアレクセーエフカなどへいらつしやいましたのでせう？」

ルケリヤは極く小さな弱々しい聲ではあつたが、激みなしに話し続けた。

「獵師 エルモライが、こつちへ引つばつて来たんだよ。が、それよりお前の話を聞かうぢやないか……」

「わたしの災難のお話でございますか？——宜しうございます、旦那さま。もう大分前のことで、六年か七年ぐらゐにもなりません。わたしはその時分、グシーリイ・ポリヤーコフと許婚の約束が出来たばかりなのでございました。覚えていらつしやいますか、押出しのいゝ、髪の毛の房々と捲いた人で、お母様に使はれて食堂番を勤めてをりましたか？ でも、あの時分あなたは村にいらつしやいませんでした、莫斯科へ學問をしに行つておしまひになつて。わたしとグシーリイはお互ひにとても好き合つてゐましてね、わたしあの人のことが寝た間も頭を離れませんでした。丁度春のことでしたが、ある晩ふと、どうしたのか……もう夜明けに間もないのに……どうしても寝られないのでございます。庭では鶯が、それこそうつとりする程いゝ聲で啼いてゐるんです……わたしは堪らなくなつて、起き出しましてね、入口の上り段のところで聞きに出来ました。鶯は一生懸命に高音を張つて啼き立ててゐます……すると不意に、誰かグシーリイらしい聲でわたしを呼んでるやうな気がしました、小さな聲で「ルーシャ！」とこんな風にね……わたしは不圖その方へ眼をやりまし

たが、やはり半分夢見ごとくだつたと見えて、足を踏みはづしたのでございます、高い上り段から眞つ直ぐに下へ落ちてしまひまして、いきなり地べたへ身體を打つつけたので！ でもその時は大した怪我もなかつたやうな気がしましたので、やがて起き上がつて、自分の部屋へ歸つて来たやうな譯ですが、でも、何かしら中の方で——お腹ん中で——千切れたやうな按配でございました……ちよつと一つ息をつがして下さいまし……暫くの間……旦那さま。」

ルケリヤは口を噤んだ。私は驚きの眼を瞠つて彼女を眺めた。私が驚いたのはほかでもない、彼女が殆んど楽しさうに、嘆聲や溜め息など洩らすことなく、しひて同情を求めようともせず、物語をつづけたことである。

「それからといふもの、」とルケリヤは言葉を續けた。「わたしは次第に瘦せ細つて参りまして、肌の色が黒みがかゝつて来ました。歩くことも骨が折れるやうになりますし、その中にやがては全然兩足が利かなくなりましてね、立つことも坐ることも叶ひません。始終横になつてばかりゐたいのでございます。飲み食ひも氣が進みませず、だん／＼悪くなる一方でした。奥さまは、あの御親切な方ですから、方々のお醫者さまにもかけて下さるし、病院にまでやつて下さいました。けれど、一向に驗が見えませんが、第一、わたしの病氣が何の病ひやら、それを見立てるお醫者さまが一人もないの

でございます。でも、いふことなら何でもして下さいました。鐵を焼いて背中に當てたり、川の氷を割つてその中へ浸けたり——でも、やつぱり効き目がありません。たうとうわたしは身體がこち／＼になつてしまひました……そこで、御主人さま方も、もうこのうへ療治をしても仕方がない、かうと云つて、お邸へ片輪者を置いとくわけにもゆかない、といふことになりましたね……まあ、こちらへ送られて来たのでございます——それに、こゝには身寄りの者もをりますので、かういふ次第で、御覽の通りの有様でをります。」

ルケリヤはもう一度口を喋んで、又もや微笑みを見せようとした。

「それは、しかし恐ろしいこつたね、お前の身の上は！」と私は叫んだが……それ以上なんと云つていゝか分からないで、かう訊ねた。

「で、グシーリイ・ポリヤーコフはどうしたんだね？」

この問ひはおそろしく馬鹿げてゐた。

ルケリヤは心持ち眼をわきへ外らした。

「ポリヤーコフがどうしたかですつて？——暫くしほ／＼してゐましたが、やがてほかの娘と、グリーンノエ村から来た娘と夫婦になりました。グリーンノエを御存じでいらつしやいますか？ わたし

どものところからさう遠くはございません。娘はアグラフェーナと申しました。あの人はとてもわたしを可愛がつてくれたのですけれど、何分、若い男のことでございますから、いつまでも獨り身で居るわけには参りません。それかとて、わたしがどうしてあの人の配偶になれませう？ でもあの人はちやんとした、氣だてのいゝお内儀を見つけて、今では子供たちまでありますからね。すぐ近所の地主さまのところへ、番頭を勤めてをります。あなたのお母様が身元證明の書きものをつけて、暇をおやりになつたものですから、お庇で大そう具合がいゝさうでございますよ。」

「それでお前はかうして、いつもいつも臥せてばかりゐるのかい？」と私はまた訊ねた。

「さやう、旦那さま、かうして臥せてをりますのも、足かけ七年目でございます。夏はこの小屋に寝て居りますが、寒くなると、風呂場の入口の間に移してくれまますので、そこに臥てをります。」

「誰がお前の看病をしてゐるんだね？ 誰か世話をしてくれる人があるの？」

「はい、こゝにも親切な人たちが居りましてね、わたしのやうなものでも放つては置きません。それに看病と申しても知れたもので、食べる方は、もう食べるといふ程でもありませんし、水なら、ほれ、そこにございます、その湯呑みの中に、いつも淨いな清水が用意してありますので。湯呑みには自分で手が届きます。片方の腕はまだ利きますから。それからね、こゝに小さな女の子がをります

の。孤兒みどりごでしてね、これがひよいくと見舞ひに來てくれます、有難いことにね。つい今し方もそこに居りましたつけが……お會ひになりませんでしたか？ それはく可愛い娘で、色白なんですよ。その子が花を持つて來てくれますの、私が大好きなもんですから、その、花がねえ。こゝには、庭の花といつてはございません——も有つたのですけれど、絶えてしまひましたね。でも、野の花だつていゝものでございますよ。匂ひなんか庭の花よりいゝ位ですもの。まあ、あの鈴蘭にしましても……どれだけ氣持がよいやら！」

「それで退屈でないかい、可哀さうに、ルケリヤ、不氣味でないかい？」

「どうも致し方がございません！ 嘘をつくのは厭ですから正直に申しますが、初めの間はとても情なまけなうございました。けれど、やがて馴れつこになつて、辛抱しぬいてみると——もう何ともありません。世の中にはもつと不運な人もあるんですからね。」

「それは又どういふ事だい？」

「中にはまるで身を寄せるところのない人もありますもの！ また中には目が見えなかつたり、耳が聞こえなかつたりして！ ところが、私は有難いことに眼もよく見えますし、何でもはつきり聞こえます、それこそ何でも。土龍とらごもが地の中を掘つてゐる——それさへちやんと聞こえますからね。」

又どんな匂ひでも、それこそ、どんなに微かな匂ひでも鼻が利きますので！ 畑で蕎麥の花が咲くとか、お庭で菩提樹の花が開くとかすれば、教へて貰はなくとも、すぐさま一番に知るのでございます。たゞそちらの方から風がそよ／＼と吹いて來さへすれば分かりますものね。えゝえ、なんの神さまをお恨み申しませう？ まだく運の悪い人は、たくさん居りますからね。それに、かういふ事だつてあります。達者な人といふものは、ともすれば罪なことをし勝ちなものですけれど、わたしなどは罪の方が自分で逃げて行つてくれました。この間もお坊さまが、アレクセイ神父さまがわたしに聖餐を授けようとなされて、『お前には懺悔をさせるものはない。さういふ風になつては罪を犯すわけがないからな？』と仰つしやいました。けれどもわたしはその御返事に、『でも、心の中の罪はどうなりますので？』とお訊ねしたら、『いや、それは大した罪ぢやないよ。』と云つて、笑つていらつしやるのでございます。」

「それに、わたしはきつとその心の中の罪も餘りないと思ひます。」とルケリヤは續けた。

「だつて、わたしは物を考へたり、第一、そのことを思ひ出したりしないやうに、自分を躰けてしまつたからでございます。その方が、月日が早く經つてくれます。」

私は正直な話、びつくりした。

「お前はいつもいつも全くひとりぼっちぢやないか、ルケリヤ。それなのに、どうして考へことが頭へ浮かんで来ないやうに出来るんだらう？ それとも、始終眠つてるのかい？」

「まあ、どういたしまして、旦那さま！ いつも寝られるとは限りません。大した痛みはございませんけれど、この、お腹ん中がしく／＼疼きましてね、骨の節々もさうなんで、どうも本當にぐつすり眠られません。どう致しまして……ところで、かうしてちつと横になつて、まじり／＼しながら、考へことをしないでございます。まあ自分は生きてゐて、息をしてゐるのだと感ずる——それだけがやつとなんですからね。かうして、見たり聞いたり致します。蜜蜂が巣でぶん／＼唸つたり、鳩が屋根に止まつてく／＼啼いたり、巢についた牝雞が雛をつれてパンの粉を啄つきに入つて来たり、かと思ふと雀や蝶々が飛んで来たりします——そんなことがとてもいゝ気持ちでしてね。一昨年は燕がその隅に巢まで作りまして、子供を孵したのでございます。その面白かつたことと云ひましたら！ 一羽が巢に歸つて来て、身體をびつたりつけながら雛を養ふと、また飛んで行つてしまひます。また見てゐますと、もう入れ替りにほかのが飛んで来る。時には開け放した戸口を掠めて行くことがあります。すると子供たちは、ね、早速ちいちく鳴いて、嘴を開けて待つてゐるぢやありませんか……わたしはその次の年も心待ちにしてゐましたが、何でも土地のさる獵師

が鐵砲で撃つてしまつたさうでございます。あんなものを殺して何の足しになるのでせう？ 燕なんて甲蟲ほどしかないものを……あなたがた獵をなさる方は、なんて地意わるなんでせうね！」

「おれは燕なんか撃たないよ。」と私は急いで云ひわけした。

「かと思ふと、一度なんか」とルケリヤはまた云ひ、した。「それは可笑しい事がございましたわけ！ 兎が飛び込んだので、本當なんですの！ 犬にでも追はれたものでせうか、とに角いきなり戸口から轉がるやうに入つて来ましてね……すぐ傍にちよこんと坐つて——いつ迄もちつとさうしてゐました——のべつ鼻をひく／＼させて、髭を動かしてゐるぢやありませんか——まるで軍人さんそつくりでしたわ！ わたしの方も見てゐましたつけが、わたしが怖いものぢやないつてことを合點したと見えますの。たうたう起き上つて、びよん／＼と戸口のとこまで跳ねて行きましてね、闕の上で後をふり返つたと思ふと、そのまゝ見えなくなつてしまひました！ その可笑しいことと云つたら！」

ルケリヤはちらと私を眺めた……これでも面白くないか？ とでも云ひさうに。私は彼女を悦ばすために微笑んで見せた。彼女はかさ／＼に乾いた唇を嚙んだ。

「まあ、冬になりますと、そりや當たり前のことですからけれど、いけませんわ。だつて暗いんですも

のね。蠟燭をつけるのは勿體ないし、それに何の役にも立ちませんから。わたし、読み書きは知つてをりまして、いつも本を読むのは好きでしたけれど、一體まあ、何を讀むのでせう？ こゝには、本なんてまるでないし、よしんば有つたにもせよ、どうして手に持つてゐることなど出来ませう、本などを？ アレクセイ神父さまが、氣晴らしにといつて、曆を持つて来て下さいましたが、何の役にも立たないことが分かつたものですから、また持つて歸つておしまひになりました。尤も、暗いにや暗うござんすけれど、それでも何か彼か耳に入るものがあります。蟋蟀が鳴いたり、鼠がどこかでがり／＼云はしたり——すると、いゝ氣持ちになつて來るんですの、考へないで済みますから！」

「それから又、お祈りも唱へます。」少し息を休めてから、ルケリヤは言葉を續けた。「たゞほんの少しか知りませんのでね、そのお祈りを。第一また、私なんか何も神様にうるさくして御迷惑をおかけすることなどはありませんもの。わたしなんか何をお願いすることがありませんか？ わたしにどんなものが入用なのか、それは神さまの方がよく御存じでいらつしやいます。神さまがわたしにこの十字架を授けて下さつたところを見ると、つまり私を愛してゐて下さる證據ですものね。かういふ風に悟れといふのが、神さまのお云ひつけでございます。「我らの父よ」とか、「聖母マリヤよ」

とか『悲しめるものみなへの讃歌』などを誦してしまひますと——又その後は何も考へないで、ちつと臥てをりますが、それで平氣なのでございますよ！」

二分ばかり過ぎた。私は沈黙を破らないで、腰かけ代りの窮屈な桶の上で身動きもせずになた。私の前に横たはつてゐる不幸な生き物の慘たらしい石のやうな静けさが、私にもいつしか傳はつて、自分までが痺れたやうになつて來た。

「ねえ、ルケリヤ、」私は遂に口を切つた。「どうだらう、一つお前に相談があるんだがね。もしあなたなら、私がちやんと云つて、お前を町の立派な病院へ連れて行かせるが？ もしかしたらまだ癒るかも知れないぜ、そりや何とも云へない。いづれにしても、さうすればお前は獨りぼつちぢやなくなるからな……」

ルケリヤはほんの心持ち眉を動かした。

「お、いけません、旦那様、」と心配さうな聲で囁いた。「病院なぞへ送らないで下さいまし、わたしに觸らないで、あんな所へ行つたら、かへつて餘計に苦しい目をするばかりですから。どうしてわたしの病氣が癒せるものですか！……現にいつかこゝへお醫者さまが來てくれています、わたしを診察してやると仰つしやるのです。わたしはどうぞ後生ですからそつとして下さいとお願ひしま

したが、なんの、なんの！ わたしをあつちへ向けたり、こつちへ向けたりして、手足を揉み散らしたり、伸ばしたり曲げたりしましてね。『これは學問のためにするのだ。そこが學者の務めなんだ！だから、わしに逆らつたりするのは以つての外だ。なぜつて、わしは色々の仕事をした功で勳章まで頂戴した人間でな、お前たち愚かな者どものために盡してやつてゐるのだ。』とこんなに仰つしやいます。さんざわたしをひねくり廻しひねくり廻した擧句、病名を云はれましたが——何だか變挺れんな名前でした。ね——それつきり歸つてしまひました。ところが、わたしは丸一週間といふもの、身體中の骨がしくしく疼いて困りましたよ。あなた様は、わたしが獨りぼつちだ、いつも獨りぼつちだ、と仰つしやいますけれど、いゝえ、いつもさうぢやありません。來てくれる人もあります。わたしはおとなしい人間で、迷惑なぞかけませんのでね。百姓の娘達も遊びに來て、お喋りをして行きますし、巡禮の女が通りかゝつて、エルサレムだのキエフだの、いろ／＼な有難い町々の話をしてくれます。それに、わたしは獨りだつて怖くはありません。結局いゝ位でございます。全くの話が！……旦那さま、どうかそつとして置いて下さいまし、病院なぞへお遣りにならないで……御親切は有難うございますけれど、たゞわたしに構はないで、もし旦那さま。」

「まあ、好きなやうにするがいゝ、好きなやうに、ルケリヤ。私はたゞお前のためを思つて云つただけなんだから……」

「分かつてをります、旦那さま、わたしのためを思つて下さるのですとも、御親切な旦那様、他人を助けるなんて誰に出来るものですか？ 誰が他人の心の中まで立ち入れますもんで。人間は自分で自分を助けるより仕方がございませんよ！ 早い話が、旦那は本當になさりますまいけれど——時折りかうして獨りで休んで居りますと……まるでこの世に生きてゐるのは、わたしよりほか誰もないやうな氣が致します。たゞもうわたしひとりだけが生きた人間みたい！ すると、何だか有難い後光でもさして來るやうな按配で……ふつと考へ込んでしまひます——しかも奇妙なことを考へますので！」

「どんな事をそのとき考へるの、ルケリヤ？」

「それは、旦那さま、とてもお話し出来ません。御得心の行くやうに云へません。それに、あとになると忘れてしまふものですから。まるで雲のやうにふわつと來て、夕立ちみたいに降りかゝるんですの、すると何とも云へないほど爽々しい、いゝ氣持ちになるのですけれど、さてそれが何だつたか、一向に譯がわかりません！ でも、こんな氣が致します。もしわたしの周りに人が居りましたら、こんな事はちつともなくなつて、自分の不仕合せといふよりほか、なんにも考へないのぢや



ないかつて。」

ルケリヤはやつとのことと溜め息をついた。胸も手足と同じやうに、彼女のいふことを聞かなかつたのである。

「お見受け申しますと、旦那さま」と彼女はまた始めた。「あなたはわたしを大そう可哀さうに思つて下さるやうでございますが、どうぞあんまり氣の毒がらないで下さいまし、ほんとうに！打ち明けてお話ししますけれど、早い話が、わたしは今でもどうかすると……ねえ、お覚えでもございませうが、昔はわたしもそれは陽氣な娘でしたね？ 蓮つ葉な娘でしたもの！……それで、まあどうでせう？ わたしは今でも歌をうたひますの。」

「歌を？……お前が？」

「え、歌をね、古い歌を、輪舞のや、皿占ひのや、十二日節のや、いろんな歌を！ わたしはそんなのを澤山知つてをりまして、今でも忘れませんから。でもねえ、普通の踊歌は唄ひません。今のやうな身の上になつて見ますと、そんなのは具合が悪うございましてね。」

「それをどんな風に歌ふの……心の中で？」

\* 皿の下に物を置いて占ふ時の囁し歌。

「心の中でも、それから聲を立てても、大きな聲は駄目ですけど、でも、ちやんと分るやうにね。それ、さつきお話しましたでせう——女の子が一人わたしのところへ遊びに来るつて、孤兒ですが、でもね、物分かりのいゝ子でして。それでわたし、その子に歌を教へてやりましたの。もう四つばかりちやんと覚ええました。本當になさいませんか？ ちよつと待つて下さいまし、わたしが今……」

ルケリヤは身構へに息を深く吸ひ込んだ……この半ば死んだやうな生き物が歌をうたはうとしてゐる、かう考へると私は思はずぞつとした。けれど、私が一言も云ひ出さない中に、長く尾を引いた、漸く聞き取れるか取れないかの、しかも澄み切つた正確な音が、私の耳に響いて來た……ついで第二、第三の音。ルケリヤは『草野の中で』を歌つてゐるのであつた。化石したやうな顔の表情を變へず、眼さへきつと据ゑて歌つてゐる。この哀れた、精一杯の、細い煙のやうに打ち慄へる聲は、人の心を動かさねば止まぬ響きを帯びてゐた。彼女はその魂を残らず注ぎ出したかつたのである。私はもう恐れを感じなかつた。言葉に盡くせぬ憐愍の情が私の胸を締めつける。

「あゝ、だめです！」と彼女は不意に云つた。「力が續きません……旦那さまのおいで下さつたのがあまり嬉しくつて。」

彼女は眼を閉じた。

私はその小さな冷たい指の上に手を載せた……彼女は私をちらと見上げた。——古代彫刻でも見るやうな、金色の睫毛に翳られた暗い瞳は、ふたゝび閉ぢられてしまつた。間もなく、その眼は薄闇の中で輝きはじめた……眼は涙に濡れてゐる。

私は相變らず、身じろぎさへもしなかつた。

「まあ、わたしとしたことが！」とルケリヤは、思ひがけない力の籠つた調子で不意に口を切つた。そして眼を大きく見開きながら、瞬きで涙をふり拂はうとした。「よくまあ、恥づかしくない！ なんといふことでせう？ もう永らくこんな事はなかつたんですの……去年の春、グーシヤ・ポリヤコフが訪ねて来た、あの日以来のことだ。あの人がそこに腰かけて、話をしてゐた間は——何のこともありませんでしたが、行つてしまつた後で、獨りきりになると、怵へ性なしに泣き出してしまひました！ 一體どこからこんなものが出て来るのでせう……尤も、わたしたち女の涙なんて、たゞ同様のもので、他愛なく出るものですけれどね。ねえ、旦那さま」とルケリヤは云ひ足した。「多分ハンカチをお持ちでゐらつしやいませうね……お気持ちが悪いでせうけれど、わたしの眼を拭いてやつて下さいませんか。」

私は急いでその望みを叶へてやつた。——そしてハンカチを残して置いてやつた。彼女は初め辭退して……こんなものを頂いて何といたしませう？ と云ふのであつた。ハンカチは極く質素なものながら、清いで眞つ白だつた。やがて彼女は弱々しい指で掴むと、もうそれきり放さうとしなかつた。私は二人を包んでゐる暗がりに馴れて来たので、彼女の顔の輪廓をはつきりと見分けることが出来、青銅色の皮膚に滲み出してゐる微かな紅の色にさへ氣がついた。そして——少なくとも私にはさう思はれたのであるが——その昔の美しかつた名残りを、その顔に見つけ出すことができたのである。

「ねえ、旦那さま」とルケリヤはまた云ひ出した。「さつき眠れるかとお訊ねになりましたね？ なる程、わたしは稀にしか眠りませんが、でも、寝た時にはきつと夢を見ます——いゝ夢をね！ 夢の中では、いつだつて病氣のことはございませぬ。いつも達者で、若くつて……たゞ一つ悲しいことには、眼が醒めて、氣持ちよく伸びをしようと思ひますと——どつこい、まるで鎖で縛られたやうなんでしょう。いつでしたか、それはそれは有難い夢を見ましたつけ！ なんならお話しませうか？ では聞いて下さいませ。——ふと見ると、わたしは野原の中に立つてゐるのでございませぬ。廻りには裸麥が一面に生えてをりましてね、よく熟れて背が高く黄番巴をしてをります！」

……そばには赤い犬がついてをりましたが、それが意地の悪い、とても意地の悪いやつでして、のべつわたしに噛みつかう、噛みつかうと致します。さて、わたしは手に鎌を持つてゐるのでございます。しかもたゞの鎌ではなくて、紛れもないお月様なの。ほら、月がよく鎌みたいになりますね、あれですの。この月でもつて、わたしは裸麥をすつかり綺麗に刈つてしまはなければなりません。たゞ暑いので、身体がぐつたりして、それにお月さまが目眩しくつて堪りませんし、妙に億劫なのでございます。ところが、まはりには矢車菊が生えてゐましてね、とても大きな輪なんですよ！それが急にみんなわたしの方へ頭をふり向けました。わたしはこの矢車菊を摘んでやりませうと考へました。ヴーシャが来るつて約束しましたから、丁度さいはひ、まづ花環を拵へよう、刈るのはその後でも間に合ふから、と思ひましてね。矢車菊を摘みにかゝりました。ところが、幾ら摘んでも、摘んでも、花は指の間からどこかへ消えて行くのです。どうしても駄目！花環は編めないぢやありませんか。さうかうしてゐる中、誰やらわたしの方へ来る足音が聞こえます。すぐ傍まで来て、ルーシャ！ルーシャ！と呼ぶのでございます。……あゝ、困つた、間に合はなかつた！とわたしは考へました。でも、同じことだ、矢車菊の代りにお月様を頭に被らうと思ひまして、飾頭巾のやうにお月様を被りますと、急にわたしの身體が光り出して、野原が一面に明るくなりました。

ふと見ると、麥の穂先を傳はつて矢のやうに早く走つて来るものがある——でも、それはヴーシャではなくて、當の基督さまなのでございます！どうしてそれが基督さまと分かつたか、それは云へません——繪に描いてあるやうなお姿とも違ひますけれど、とにかくさうなのです！お顔がなくて、背の高い、若い方で、眞つ白な着物をきてゐらつしやいましたが、たゞ帯だけが金なのでございます。わたしの方へお手を差し伸べて仰つしやるには、『怖がることはない、美しく着飾つたわしの花嫁、わしの後からついておいで。お前は天國で輪舞の音頭を取つて、極樂の歌を唄ふのだ。』わたしはいきなりその手に吻をつけました。犬は不意にわたしの足に噛みつきました……けれど、そのときわたしたちは虚空へ舞び上がりました！基督さまが先きに立つていらつしやる……そのお翼が鷗のやうに長くて、空いつばいに擴がつてゐます——わたしはその後からついて参りました。そこで、犬もわたしの足から離れなければなりませんでした。その時はじめて、この犬はつまりわたしの病氣なのだ。でも天國に行けば、こんなものの居場所はなくなるのだといふことが、やつと分かつたのでございます。」

ルゲリヤはちよつと口を噤んだ。

「それからこんな夢も見ました」とまた語り出した。「でも、ひよつとしたら現に見えたのかも知

れませんが、それはもう何とも云へません。わたしはこの納屋の中に臥てゐるやうな気がしました。すると亡くなつた両親が、お父さんとお母さんが参りましてね、わたしに丁寧なお辭儀をするんですが、口はちつとも利きません。わたしが『お父さんお母さん、何だつてわたしにお辭儀なさるんですの？』と訊きました。『ほかでもない、お前はこの世で自分の魂を樂にしたばかりでなく、私たちの心からも大きな重荷をおろしてくれた。だから、私たちはあの世で大層具合がよくなつたよ。お前はもう自分の罪は綺麗になくしてしまつて、いま私たちの罪滅ぼしをしてくれてゐるのだよ。』かう云つて、両親はまたわたしにお辭儀をすると、その姿が見えなくなつてしまつて、目に映るのは壁ばかりでした。その後で、これは一體どういふ事なんだろうと、不思議で不思議で堪りませんでした。懺悔のとき、お坊さまにもお話した位でございます。でも、お坊さまは、それは幻ではない、幻はたゞ坊さんにだけ見えるものだから、とこんなに仰つしやいました。」

「それからね、こんな夢もございましたつけ。」とルケリヤは言葉を續けた。「なんでもわたしが街道の楊の下に坐つてゐる處なので。手には削つた杖を持つて、袋を背中に負ひましてね、頭は布で包んで、そつくり巡禮姿なのでございます。どこか遠い遠い所へ靈場めぐりに行かなければならないのでした。巡禮がのべつ私のそばを通り過ぎて行きます。みんな厭々さうにのろ／＼と歩いて、

同じ方ばかり指してゐるのでございます。誰も彼もぐつたりしたやうな顔をして、みんなお互ひに似てゐるのです。ふと見ると、大勢の間に一人の女がうろ／＼して、ぐる／＼歩き廻つてをります。背が高く、みんなの頭の上に首がちやんと見えてゐましてね、着てゐる着物も何だか特別なもので、わたし達のやうな露西亞風とは違つてをります。顔もやはり特別な顔で、脂けのない嚴しい顔でした。そして、誰もがその女を避けるやうにしてゐるのです。女は急にくりと身を翻して、まづすぐにわたしの方へやつて来るぢやありませんか。わたしのそばには立ち止まつて、ちつと見つめる、その眼が鷹のやうに黄色くて大きくて、澄みに澄んでゐるのでございます。『どなた？』と訊ねますと、『わたしは死神だよ。』と申します。わたしは吃驚りするどころか、却つて大喜びして十字を切りました！するとその女が、死神の云ふことには、『ルケリヤ、わたしはお前が可哀さうだけれど、でも連れて行くわけにはゆかない、さやうなら！』あゝ！わたしはそのとき辛くて辛くて堪りませんでした！……『つれて行つて下さい、あなた、わたしの大好きなお方、どうぞつれて行後の時を決めて下さるのだなつて下さいな！』と申しますと、死神はわたしの方へ振り向いて、何か云ひ出しました……わたしは最後の時を決めて下さるのだなと悟りましたけれど、よく分かりません、聞き取りにくいので……ペトロフキが濟んでからといつたやうな気がしました……そこでわたしは